ISSN 2434-6136

東海大学紀要

体育学部　第50号

東海大学

2020

BULLETIN
SCHOOL OF PHYSICAL EDUCATION

Number 50 2020

TOKAI UNIVERSITY

目　次

巻頭言

東海大学紀要（体育学部）第50号発刊に寄せて

積山和明　**1**

寄稿

半世紀の成果としての博士課程スタート

萩裕美子　**2**

原著論文

体育学における人文主義的方向と体育の本質論の一契機
—ディースターヴェーク教育学における自己活動概念に基づいて—

阿部悟郎　**3**

実践研究

ハンドボール競技における防御戦略構築に関する検討

栗山雅倫　**13**

スノーボード用チタン製センターディスク使用と技術習得との関連性に関する研究
～テキストマイニング分析から技術習得補助具としての有効性を検討する～

内藤堅志・瀧澤憲一・藤沼到・須藤桂・今村佑良・栗國朝嗣　**21**

研究資料

海外研修航海の意義
—価値ある教育プログラムとして—

吉原さちえ　**33**

コロナ禍における地域住民を対象とした運動指導動画の動向

福田昌平・後藤里織・久保田晃生　**41**

実践報告

COVID-19に対応した健康・スポーツ科目における遠隔授業の組織的実践

川邊保孝・植村隆志・八百則和・與名本稔・小山孟志・小河原慶太　**47**

World Congress on Science and Football 2019の研究動向と海外トップチームの練習視察報告

八百則和　**57**

その他

Current principles and best practices for providing effective leadership in sport and leisure management

Andrew Roomy　**65**

心理サポートの実践と研究に関する思案
—日本スポーツ心理学会第47回大会キーノートレクチャーの振り返り—

武田大輔　**71**

体育学部紀要の存続価値を巡る私見

武田大輔　**81**

Contents

Introduction

Address of the 50th-anniversary issue in the Bulletin of School of Physical Education, Tokai University

Masaaki Tsumiyama 1

Short Note

The Sport Doctoral Program was recently established to celebrate the 50th anniversary of the Tokai University School of Physical Education.

Yumiko Hagi 2

Original

One of the moments concerned with the essential discussion and the humanistic direction in physical education

—Based on the concept of "Selbsttätigkeit" in Diesterweg's pedagogic works—

Goro Abe 3

Practical Study

Examination of building a defense strategy in handball competition

Masamichi Kuriyama 13

Studies on the relationship between the use of titanium center discs for snowboarding and skill acquisition.

Examining the effectiveness as an auxiliary tool for learning snowboarding skills from text mining analysis

Kenshi Naito, Kenichi Takizawa, Itaru Fujinuma, Katsura Suto, Yura Imamura and Tomotsugu Awakuni 21

Material

Significance of overseas educational cruise —As a valuable educational program—

Sachie Yoshihara 33

The movement of exercise promotion videos target for local resident in COVID-19 pandemic.

Shohei Fukuda, Saori Goto and Akio Kubota 41

Study Report

Organizational practice of remote lecture for health and sports classes during COVID-19 pandemic

Yasutaka Kawabe, Takashi Uemura, Norikazu Yao, Minoru Yonamoto, Takeshi Koyama and Keita Ogawara 47

Reports of research trends in World Congress on Science and Football 2019 and visit training sessions of professional team in Australia

Norikazu Yao 57

Other

Current principles and best practices for providing effective leadership in sport and leisure management

Andrew Roomy **65**

Considerations on psychological support practice and research
—Reflections on the Keynote at the 47th Annual Conference of the Japanese Society of Sport Psychology—

Daisuke Takeda **71**

The personal opinion on the continuation of publication of the Bulletin of the School of Physical Education.

Daisuke Takeda **81**

［巻頭言］

東海大学紀要（体育学部）第５０号発刊に寄せて

積山　和明*1

東海大学紀要（体育学部）は、本号をもって創刊第50号を迎えることができました。長きにわたって体育・スポーツ科学の発展に寄与していただきました先輩教員の皆様方、並びに今まさにご活躍を賜っております現学部教員各位に、改めて敬意を表するところです。

東海大学体育学部が創設された１９６７年は、１９６４年の東京オリンピックを契機として日本の体育・スポーツへの関心が大いに高まり、単に競技力向上に止まらず、青少年育成や健康づくり、更には国際交流の分野としても注目が集まっていた頃といえます。ちょうどこの時期に拡充期を迎えた東海大学は、理想の総合大学の建設に邁進していました。そのような中、体育学部は建学の精神に基づき、社会変化に対応し、未来の扉を開く学部として誕生しました。まず、１９６７年には体育学科のみでスタートし、１９６８年に武道学科、１９７１年に社会体育学科を創設、１９７６年には大学院体育学研究科修士課程を開設いたしました。その後、時を置いて、２００４年には、体育学科、競技スポーツ学科、武道学科、生涯スポーツ学科、スポーツ・レジャーマネジメント学科の５学科による、新教育課程を発足させ現在に至っています。そして２０２１年４月には、念願であった大学院体育学研究科博士課程後期を開設いたします。東海大学体育学部は、目標に向かって常に挑戦し、教育・研究とともに運動部の活動も両立させた、まさに学園の活力を生み出している学部といっても過言ではないと考えています。

２０２０年は、本来であれば東京オリンピックが開催され、世界中の注目が日本に集まるはずの年でした。それが、全く予想もしなかったコロナウイルスの世界的感染拡大により、オリンピックは勿論のこと、多くの行事が中止、延期に追い込まれました。当然教育界にも深い影を落とし、本学部においても春学期は全て遠隔授業、秋学期はゼミナール・実技・実験・実習科目については何とか対面授業ができるようになったという活動実績にとどまり、これまでとは全く異なった学園生活を余儀なくされました。そのような状況の中でも、この度、東海大学紀要（体育学部）第５０号の記念号を発刊することができました。遠隔授業にも慣れてきたとはいえ、これまで経験したことがない授業形態であり、学生も大変であったことと容易に推察できますが、教員にとりましても授業のコンテンツ作りから成績管理に至るまで、極めて多くの時間と労力を費やす中での研究活動となりました。

東海大学紀要（体育学部）第５０号発刊に際しては、コロナ禍においても教員それぞれが全力を傾注していただいたものと確信しています。紀要は、体育学部の教員の研究活動の一端に触れていただける貴重な機会でもあります。是非、ご高覧いただきますようお願い申し上げます。最後に、今回の編集に携わっていただきました関係各位に感謝申し上げますとともに、日本の体育・スポーツとともに歩み続ける東海大学体育学部の更なる発展に向け、皆様方の力強いご支援ご協力を心よりお願いし、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

＊1　東海大学体育学部

［寄稿］

半世紀の成果としての博士課程スタート

萩　裕美子*1

東海大学紀要（体育学部）の創刊第 50 号、誠におめでとうございます。毎年の研究の蓄積が半世紀にわたり、紀要という形で残されてきたことは大変、意味ある事と思います。

さて、このめでたい節目に、図らずも博士課程が設置され、稼働することとなりました。博士課程の設置は、先人たちも何度かチャレンジされたとお聞きしております。そのようなチャレンジもあって、教員採用の折には博士課程の担当も可能であることを念頭に置いた採用活動をしてきました。その結果、現有勢力だけでチャレンジができることとなり、まさに機が熟したと思われます。

博士課程設置のきっかけは、外部評価でした。多くのオリンピアンを輩出し、指導者やコーチも育成してそれなりの実績があるにもかかわらず、博士課程がないのはどうなのか。本学でも博士課程を持たないの 2 つの学部でその一つが体育学部でした。学生にとっても指導者にとっても魅力ある大学にするためには、博士課程の設置は必須と思われました。

また社会情勢もめまぐるしく変化を遂げ、体育・スポーツ振興においても、大きな影響があります。社会が複雑になり、一つの専門分野だけでは解決しない課題が山積みです。これまであまり縁のなかった領域においても、体育・スポーツへの期待が高まっています。スポーツ立国戦略が提案されたり、健康寿命の延伸に身体活動促進やスポーツ実施率の向上が期待されたり、地域の活性化にスポーツが一役買ったりと、スポーツそのもの研究だけでなく、様々な分野とのコラボレーションが求められています。

このような社会的背景の中で、体育・スポーツの博士課程を設置することにはどのような意味があるのか。ワーキンググループを作ってオープンに話し合いを重ねました。本研究科の特徴としてスポーツの実践現場を持っていること、総合大学であることで、他分野との共同研究も可能であること、本学はこれらを強みにして、新しいタイプの体育･スポーツ研究者(多領域において専門家として活躍できる)の育成を目指すこととなりました。またこれらを具現化できる可能性を秘めていると感じています。

また、2022 年には本学全体の改組改変があり、新たな時代に向かう人材育成を目指しています。体育学研究科は体育学部を根とし、現場を重要視し、より高度化した研究を進めていく所存です。そのためには実践現場の声をより多く反映し、どのような課題があるのか、どのような解決法が有効だったのか、実践研究、症例研究も重要です。大事なのは研究の蓄積です。引き続き研究の蓄積が行われ広く公開されることを期待しております。

＊1　体育学部　体育学研究科長

［原著論文］

体育学における人文主義的方向と体育の本質論の一契機
－ディースターヴェーク教育学における
自己活動概念に基づいて－

阿部悟郎

One of the moments concerned with the essential discussion
and the humanistic direction in physical education
-Based on the concept of “Selbsttätigkeit” in Diesterweg’s pedagogic works-

by

Goro Abe

Abstract

Physical education is the essentially education. So, it is important to examinate the meaning of physical education as education at all times. And it should continue to inquire the educational possibility in physical education. Therefore, physical education needs to study a lot of education thoughts and theories. The purpose of this study was the theoretical contribution for the construction of the essential discussion of physical education through the investigation of Diesterweg’s pedagogic works, especially the concept of “Selbsttätigkeit”.

Deasterweg, A.F. (1790-1866) was the one of the important scholars in German academic world and his humanistic discussion for School education had been the right path in humanism in pedagogic discussion. Based on his pedagogic humanism, education was essentially the contribution to human becoming as the general human-building.

＊1　東海大学体育学部体育学科

So, physical education might be narrated as essentially the contribution to human becoming through physical movement in this view point. It should select the most important thing in a lot of moments not only the development of physical fitness, hasten the physical growth, or the instruction of sport technique and so forth on. What was the most important thing in physical education as education essentially? It was the contribution to human becoming in physical education as education.

１．はじめに

体育、とりわけ教科体育において、児童・生徒が身体運動を学び、そして多様な身体運動経験を重ねるだろう。児童・生徒一人一人はそこで有意味な瞬間を享受しているかもしれない。しかし、そこにおいては、学びの成果に対する客観化の力学も否めない。体育は彼らの何を測定しようとしているのか。このような問いは、やがて次のような問いに逢着するだろう。体育とは何であり、そして何であり得るのか。

これらは一般的には原理論的な問題であり、解への到達が困難な、それでいて不断の探求を喚起する重要な問いでもある。もちろん多くの研究者がこれに挑み、そして実りある学的成果を提起してきた。

しかし、プラトンに従うならば、これについて原理的な深さを持って答えることができない以上、それを本当に知っているとはいえない [1]。体育学はこれについての、全くの確定知を持っていないのかもしれない。体育学はこの問いに誠実に対峙し、そのような原理論的研究の歩みを着実に進めていかなくてはならないだろう。

さて、このような原理論的問題を探求していく場合、体育概念の基底を成している教育概念についての検討から始めなくてはならない [2]。ここから、体育についての原理論的問題は、教育概念の問題へと接続されていく。すなわち、体育とは何かといった体育の本質への問いは、教育概念への方法的な迂回を通じて進行していくこととなる。この方法的な迂回を通じて見えてくる知的風景についての語りこそが、体育学の原理論的問題に関わる有意味な知的蓄積の一つとなるだろう。

まず、教育についての省察は、古代ギリシアの啓蒙思想やそれ以降の哲学的な思弁などに遡る [3]。もっとも、教育思想史の流れにおいて、教育学的思考をはじめて完全な形式で根拠づけ、それを学問的な形式で提示したのは、いわゆる教育学的近代である [4]。ここを介して教育学は学問として発展していく。おそらく、教育についての学問的な省察を遡源するためには、少なくともこのあたりまでは遡る必要があるだろう。そして、そこで展開された教育についての諸々の論議は、人類が教育をどのように論じてきたか、あるいはどのように論じ得るのかといった学問的要請に、いくつかの鍵を与えてくれるのではないだろうか。体育学は教育についての人類の叡智に学ぶ必要がある。

そこで、本稿においてはディースターヴェークの教育学に焦点をあて、その分析を通じて、体育の本質論の構成に対する学理論的な寄与を目的としたい。なお、本稿においても、彼の主著として承認されている [5]『Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer』第 4 版 [6]を基軸とする。ホフマンは、ディースターヴェーク教育学についてのあらゆる考察は、この著作を中心に据えなければならないと説く [7]。ここでも、この著作にあわせて、必要に応じてディースターヴェーク全集等より関連文献 [8]を補いながら、その教育学を追っていく。彼が教育学的近代にあって、「真に悩み闘った対象」を見きわめながら、彼の教育学にみられる「教育の実存的理解」に光を当てる試みは、体育についての原理論的問題の追求においても有効であるだろう [9]。

なお、別稿 [10]においても示した通り、日本の体育学においてディースターヴェークを主題的に扱った研究はほとんど確認されない。さらに言えば、教育学や教育思想史においてエポックメイキングな教育学的近代の教育学論議を方法として取り扱った研究もそう多くはない [11]。このことは、教育学、とりわけ教育学的近代の教育学論議が、日本の体育学研究に充分にいかされていないことを意

味するだろう。人類の知的遺産に触れることなく、体育とは何であり、そして何であり得るのか、といった体育の原理論的問題に挑むのはいささか無謀であるだろう。本稿における体育の本質論の構成への寄与という試みは、ディースターヴェークを通じて教育学的近代を中心とした人類の遺産に謙虚に学ぶ試みでもあるだろう。

２．本論

２．１．ディースターヴェーク教育学と一般的人間形成概念

ディースターヴェークの略歴については既に別稿においてやや詳しく述べてある[12]ため、ここでは差し控えたい。彼は「ドイツにおける教育学研究を前進させた最高位」[13]と評されるのみならず、ドイツ啓蒙思想の代表者としても評価されている[14]。そのような彼の教育学的関心は、時代や社会への迎合にではなく、それらを超越したいわば教育学的普遍にあった。それは当該の時代や社会に渦巻いていた諸々の教育問題、たとえば国家主義や帝国主義、そして実用主義に絡めとられない、教育の真実の姿 である。そこで、彼は教育の普遍妥当な原理を求め、探究した[15]。しかし、彼の時代の教育学の状況ははなはだ貧相で、方法上の入門書や実践上の教科課程は存在したが、本来の教育を取り扱っている著作は皆無であったようである[16]。彼は、次のように述べる；

> 教育学は、最高位の原理を手に入れなければ、いよいよ厳密な学問の地位を断念しなくてはならない[17]。

そこで、彼は教育の最高位の原理を求めて、研究活動を推し進めていくこととなる。それでは、彼が導いた教育の最高位の原理とは、何であったのか。これについては、彼の学問的背景の一端から探るのが正道であるだろう。たとえば、ディースターヴェークの教育学は「基本的にカント哲学のうえに立つ」[18]とされている。あわせて、林も彼の教育学の基礎はカントであると説く[19]。それでは、彼はカントをどのように受容したのであろうか。おそらく、カントの受容のしかたによって、教育の論じ方が相違するだろう。林によれば、彼はカント道徳論の対立的契機から「義務」を切り捨て、「自律」を採用した[20]。これによって、ディースターヴェークにあっては、教育が、大略、児童・生徒の自発性に対する援助として論じられていった。これはプロイセン絶対主義教育思想への抵抗であったのかもしれない。

あわせて、彼のペスタロッチの受容についても触れておきたい。彼は、ペスタロッチの「人間の調和的発達」という考え方を受容している[21]。さらに、長尾によれば、彼はペスタロッチから「人間教育・人間性陶冶というフマニスムス Humanismus の理念」を学んでいる[22]。それゆえに、彼の教育学は自由主義的であり[23]、当時の国家中心の硬直した注入主義的な学校教育のありかたに真っ向から対決するものであった。彼は次のように警鐘を鳴らす；

> 学校は、国家のために児童を調教してはならない[24]。

それゆえに、彼は教会の権威と結びついた古い教育内容や支配的だった暗記学習の機械論的方法を拒絶する[25]。そして、国家が定めた基準に児童や生徒をはめ込もうとするのは、ははなはだ狭量であり、「最も有能な、それゆえに個性的な人をもプロクルステスのベッド Prokrustesbett に押し込み、その才能を棄却しようとする」[26]愚行であるとさえ説く。

したがって、そのようなプロイセン絶対主義教育のなかにあって、彼の関心は、あくまでも教育の硬直した機械論ではなく、学校教育におけるすべての教科において人格形成的な役割が充分に達成できるように構想することであったのである[27]。もっとも、彼は当時の教育の現状に対して批判的な立場にありながらも、未来を明るく展望していた。彼は次のように述べる；

> いつかは・・・(中略)・・・人々がほんとうに剣を鎌に変える時代が来るだろう。すなわち、現在は戦争に、戦争の機械、つまり生きた兵器として利用されている数百万の人々すべてに、

人間のための人間形成を促進するという使命が与えられる時代が来るだろう[28]。

この「人間のための人間形成」こそが、彼が追い求めていたものであるだろう。そして、これが学問的に結実したのが、一般的人間形成 die allgemeine Menschenbildung という概念であった。そして、これは人類史にみる教育についてのあらゆる省察の良識ではなかったのか。彼によれば、人類はずっと前から教育の中に、この一般的人間形成、つまり「人間をできるだけ全面的に形成する」という目的を見定めてきたのである[29]。彼の教育学の試みは、教育学の良識の復権への叫びとも見て取れるだろう。

さて、この一般的人間形成については、彼の著作の随所にみられるが、たとえば、1831 年の著作からは「人間をできるかぎり全面的に形成する」という意味に読み取れる[30]。単純にこの意味に立脚するならば、学校教育は国家のための調教の場ではなく、「すべての子どもが人間として持っている一般的人間形成への要求」[31]にこたえる場でなくてはならない。彼は、次のように述べる；

> 学校は青少年に対して、彼らが求める（一般的）人間形成全体を与える使命を持つ施設である。それは何ら他の機関に頼らない。それは、それ自体であり、そして全体である[32]。

まさに、彼の教育学においては、学校教育は人々への一般的人間形成の保障の場であるだろう。それゆえに彼は「学校は国家のためにあるのではない」[33]とまで宣言するのである。このような彼の教育学は、当時にあってはきわめて進歩的であったといえよう[34]。彼のこのような教育学の中核こそが一般的人間形成の概念であり、そして理念なのである[35]。この一般的人間形成こそが、彼が導いた教育の最高位の原理であるだろう。そして、彼はこの教育の最高位の原理、すなわち一般的人間形成をどこまでも守ろうとしたのであった[36]。これが彼の教育学なのである。

２．２．一般的人間形成概念と教育の本質論

さて、先に見たように、彼が導いた教育の最高位の原理は、一般的人間形成であった。それでは、この一般的人間形成の内実に目を向けてみなくてはならない。彼は、この一般的人間形成の理念を、二つの側面から捉える[37]。一つは宗教的な理念であり、いま一つは哲学的な理念である。前者は、個人の外側にあり、それ自体が完全なるものとして、人間の追求対象あるいは目的として、個人に努力を要請する。このような努力を通じて、個々人の本質の「最も高貴な萌芽」が発展していく[38]。これに対して後者は、個人の人間的な発展を通して次第に生成していく。これを通して人格の自由がもたらされ、最も完全なる本質のありかたにまで個人は高まりゆく[39]。彼は次のように述べる；

> 前者においては、まず神的なもの Göttliche が措定され、人間はそれを通して理念化されていくのに対して、後者においては、人間は道徳的な存在として措定され、やがて神的なものとの合致にまで、自分を高めていくのである[40]。

端的に表現するならば、前者においては神の側から人間を高めるのに対して、後者においては人間を神に向かって高めるのである。彼はそれら両者を、人文主義 Humanismus と称するのである[41]。

もっとも、ここで彼の神概念に触れておく必要があるだろう[42]。彼の教育学において、神は人格態として語られない。まさにそれは、真・善・美という人類全体の崇高なそして永遠の理念の究極値として語られるのである[43]。彼によれば、人間はさまざまな理念の追求を通して、真・善・美そのものであるところの神に似通うのである[44]。

彼のこのような表現は、随所に確認される。たとえば、彼のベルリン教員養成所所長就任演説においても、教育の目的の一つに「神の似姿になること Gottähnlichkeit」を明確に位置づけている[45]。まさに、彼の提起した一般的人間形成は、この「神への似通い」や「神の似姿」という思考方法を欠いては成立しない。そして、彼はこの「似通い」をその個性の限界内において達成した個人のありように人間存在の意義を見出す。彼は次の

ように述べる；

人間はそのものそれ自体が人間なのではなく、人間になりゆく存在である。それゆえに人間の生とは、まさに各人の絶えざる発展の過程にほかならない[46]。

いささかの誤解を恐れずに約言すれば、彼が用いる人間という表現は、生物的・物理的な概念ではなく、一つの価値論的な目的概念であるだろう。しかも、それは固定的・完結的な理念像ではなく、むしろ不断に生成し、そして常に価値形成的に再構成されゆく可能的暫定像として理解されるように思われる。そして、この神に対する可能的暫定像としての人間には、その不断の生成や常なる再構成をもたらす主動因が内在する。これが、自己 das Selbst である[47]。

それでは、この自己はいかにして不断の生成や常なる再構成をもたらすのであろうか。実は、この自己には「崇高で価値高きものを求める天分」がある[48]。これがために、人間は「崇高で価値高きもの」を感知し、それを得ようと努め、それらを積み重ねながら、自らのものとして確定していくことができる。ここで、「崇高で価値高きもの」という表現に着目してみたい。先の引用を想起するならば、「崇高で価値高きもの」とは、「真・善・美そのものであるところの神」の現世的なあらわれと見てよいだろう[49]。

そうであるならば、この自己は、神学色を少し脱色して表現するならば、真・善・美という客観的価値を求め、それを得ようと努め、やがてそれを自らのものとする一連の価値探求的な活動体として理解される。ちなみに彼はこれを「真・善・美をめざす努力」とも表現している[50]。そして、そのような努力は理念界に想起される形而上の存在とではなく、現実世界に存在する有形無形の形象との交渉を通じてなされることとなる。彼は次のように述べる；

現世的なもの、すなわち地上の財 Güter は・・・人間が精神的な財を得るための媒介であり、手段であり、そして前提なのである[51]。

したがって、精神的な財は、自己みずからの努力と活動によって獲得しなくてはならない。彼の比喩[52]を踏まえるならば、肉体は肉体以外のもの、たとえば金や銀、絹繊維や宝石によって飾ることができるが、精神については自己みずからが、それを求め、獲得し、そしてそれを自らのうちにつくりあげなくてはならないのである。そして、このように自己の価値探求的な活動によって多くのものを獲得すれば、それだけ「神への似通いを高めていく」[53]こととなる。すなわち、いわゆる神性の高みには、この自己の価値探求的な努力によって登っていくのである[54]。彼は、このような自己の価値探求的な活動を、自覚的に「自己活動 Selbsttätigkeit」と表現する[55]。そして、彼はこれを「人間のうちにおいて本来的に人間的なるもの」と位置付けるのである[56]。彼は次のように述べる；

人間はこのような自己活動を通してのみ、自然物以上のものに、つまり人間になれるのである[57]。

さて、彼によれば、人間はこのような自己活動を通して、そのうちに多くの精神的な財を獲得する。おそらく、その総和がその人の人間性を構成するだろう。しかし、それは物理的な単純総量を意味しない。彼は、ここで調和という概念を持ち出す。彼は次のように述べる；

あらゆる人間は、自ら自身の中のまとまった、そして完全なる調和を得ようと努めなくてはならない[58]。

つまり、真・善・美という人類の理想は、その内実を個々人の天分に従って追求されるべきであり、万人が同一の理念像をその人格に示す必要はないのである[59]。万人がゼウスにならなくてよい。ここから彼の教育学は個性論へと開かれていく。彼は、個性の本質を、個体間の単純差異にではなく、精神的な財の調和によって確定した特有の品性に見出す[60]。そして、彼においては、このよう

な調和ある品性を本質とした個性を形成することが、教育の目的になっているのである[61]。まさに、この個性こそが、「神が人間に与えた使命」であるだろう[62]。この個性こそが、人間が「成らなければならないもの」の現世的内実なのである[63]。そして、それは生涯にわたる価値追求を通じた自己の価値形成的な再構成の道でもあるだろう。

それゆえに、ホフマイスターは、この自己活動を特有の個性における「真・善・美の諸価値の実現」であると総括する[64]。これによって人間一人一人は、ようやくそれぞれが成らなければならないものに成れるのである[65]。まさに、ディースターヴェークの提起した一般的人間形成とは、この自己活動による諸価値の獲得と調和を通じた個性化の道であるといえよう。ディースターヴェークはここに学校教育の中核を置く。まさに、この自己活動という概念は、ディースターヴェーク教育学における中心的なカテゴリーなのである[66]。

それでは、学校教育はこの自己活動に対して何を為しえるのだろうか。彼によれば、真の教育はこの自己活動が展開する範囲において、その効力が発揮されるのである[67]。したがって、教育の主要な配慮は、この自己活動を展開させることと、それに併せてこの自己活動の能力を高めることとなるのである[68]。

したがって、一般的人間形成という観点からすれば、学校教育は、一人一人の中に人間を見出し、それを尊重し、人間として全くふさわしい存在に到達するよう、助力しえるのみである[69]。そうであるならば、ここでは価値への誘いあるいは促しこそが学校教育の重要な役割の一つとなるだろう。彼は、ここに教育の本質をみるのである。

まさに彼のこのような教育学、とりわけ一般的人間形成の概念は、いわゆる市民社会の形成期における、硬直した学校教育に対する思想的な挑戦、あるいは啓発であったともいえる。そして、それはまた実用主義的教育観の否定であるとともに、ペスタロッチ教育学の再規定[70]を通じた教育学的人文主義の提起でもあったように思われる。

おそらく、それは近代教育学の潮流において、人文主義的思考方向の起点の一つに位置し、後に続く精神科学的教育学の有意味な批判対象の一形式となったのではないだろうか。彼は、教育においては、何よりもまず人間の高まりと高貴化を考えるべきであると説く[71]。彼のこのような人文主義的な提起は、明らかに教育学的普遍の不可欠な基底であるだろう。

もっとも彼の教育学は、概念の明確さや体系性についての批判もみられる[72]。あわせて、彼の教育学的価値論の不徹底から、彼の提起する教育の目標論が「結局、形式的・ユートピア的なものにとどまっている」[73]という批判もみられる。

しかしながら、彼が求めていたものは、教育学的普遍であり、そして教育の真実の姿であったことを想起されたい。そして、それを指し示してくれる正しい意味での教育学は、その当時は存在していないことを、彼は嘆いていた[74]。そこで、彼は教育学の成立のために、教育についての普遍妥当な「最高の原理」が不可欠であると思念したのであった[75]。彼の教育学的探求を通して到達した「最高の原理」こそが、あの一般的人間形成であり、そして教育学的人文主義であるだろう。教育学、彼が到達した正しい意味での教育学について彼は次のように述べる；

> 教育学は、人間を人間にまで形成しようとするのである。そして、また教育学はそうすべきなのである[76]。

教育の対象は、知識や技術ではなく、あくまで生成しゆく一人一人の人間なのである。そして、これによって、教育の本質は、たとえばそのような人間の生成の歩みに対する寄与、すなわち人間形成 Menschenbildung として語られていくだろう。そして、これこそが教育学の中心概念であり、あらゆる教育事象の共通分母 Einheitsnenner となるのである[77]。ここが、彼の教育学における教育の本質論の中核であるだろう。

２．３．体育の本質論の構成と一般的人間形成の契機

体育の本質を問い、その基底にある教育概念を検討していくとき、教育についての語りが体育の可能性を押し拡げてくれるだろう。やはり、教育

それ自体を精緻に把握すれば、それだけ体育の概念を精緻に構成することができるだろう。本稿においては、その基底をディースターヴェークの教育学に求めてきた。それでは、これによって、体育の教育としてのありようはどのように規定されていくのであろうか。

まず、彼の教育学の中核には、一般的人間形成の概念が位置する。人間の全面的で調和的な高まり、つまりこの一般的人間形成への要求は誰しもが有しているという。彼に従えば、これについての保障の場が学校教育ということになる。それゆえに、学校教育はこの一般的人間形成との関わりから論じられていく。体育も同様である。体育も、児童・生徒の一般的人間形成の保障の場であるだろう。まさに、学校教育のあらゆる内在的契機、とりわけあらゆる教科の目的は一般的人間形成である。それぞれの教科の特性はそのまま一般的人間形成の特定的な可能性として規定されていく。体育は、概ね身体運動文化を媒介するところに特性があるとすれば、そこから特定的な可能性が論じられていくだろう。

そこで身体運動文化に目を向けてみたい。この身体運動文化は永い歴史的過程において人類が創造した価値形象の一形式であり、文化伝達を介して未来へと開かれている。したがって、そこには人間によって実現された価値が形式化されている。たとえば、表現芸術における特有の価値形象は、超験的な価値の分化によって表現可能となった美という客観的価値を中核として構成されるだろう[78]。また、学問は、おそらく真という客観的価値を中核として構成されるのではないだろうか。表現芸術と学問は、そこに実現された価値が相違する。差異論的価値論からすれば、同一の体系内における個別形式の価値は、それらの間に示された差異に存在する[79]。双方の価値はいうまでもなく代替不能な特有なのである。

それでは、あの身体運動文化はどうであろうか。身体運動文化にもさまざまな形式があるが、その一つがスポーツである。そして、スポーツにもさまざまな形式がある。野球やバレーボール、サッカー、陸上競技、登山、ダンスなど、あるいは新たなスポーツも誕生している。そして、それぞれの形式には、それ特有の価値が実現されており、それぞれの価値に差異が存在する。教科体育では、児童・生徒にとっては、これらが「地上の財」であり、「精神的な財を得るための媒介」となるのである。体育で多くのスポーツを教材として児童・生徒に提示するのは、一般的人間形成という観点から見れば、ここにも意味があるだろう。スポーツ教材の多様性は、そのまま自己の価値探求的な運動、すなわち自己活動の可能性の多様性に直結するだろう。

さらには、一人一人の価値探求は、拡がりとともに深まりの方向も予見される。体育における身体運動文化の価値追求において、特定のスポーツ形式に傾注する場合もあるだろう。たとえば、教科体育というより、むしろ課外体育においては、特定のスポーツ形式に深く取り組む機会があるだろう。これも一般的人間形成の保障という点では、教育学的に意義が認められる可能性がある。学校教育における運動部活動の諸問題を棚上げするわけにはいかないが、少なくとも制度論的にはそこに積極的な意義がある。特定のスポーツ形式に傾注することは、美談や根性論に絡め取られることなく純粋に教育学的に思念すれば、まさに高次な価値探求行為であり、その深みの質こそが自己活動の程度を規定するだろう。

これらの自己活動の多様性と価値探求の深みの積算によって、神学的に表現するならば、そのぶんだけ「神への似通い」を高めていくのである。体育も、教育であることの真意において、何よりもまず人間の高まりと高貴化を重視しなくてはならないだろう[80]。そして、そのようにして獲得された価値本質 Wertwesenheit[81]は自己の中で特有に調和し、人格の内実を構成していく。それは、まさに「精神的な財の調和によって確定した特有の品性」であり、これこそが個性なのである[82]。このような調和ある品性を本質とした個性を形成することが、教育の目的になっていた[83]ことを想起されたい。やはり、体育も、この自己活動による諸価値の獲得と調和を通じた個性化の道であるように思われる。それは生涯にわたる価値追求を通じた自己の価値形成的な再構成の道でもあるだろう。

これは、一人一人の不断の生成 Werden の道程である。このように考えるならば、体育は、一人一人の生成の歩みに対して、おもに身体運動文化という価値形象を媒介として寄与していくことができる。それは、運動能力育成や体力育成ということではなく、価値追求を通じた自己の価値形成的な再構成、つまりは一人一人の高まりの高貴化への特有の寄与であるだろう。かつてゲーテはその作品「神性 DAS GÖTTLICHE (1783) 」において「人間よ、高貴であれ Edel sei der Mensch.」と詠った[84]。体育も教育であることの真意からひとりひとりが高貴であることを希い、そしてその高まりを喜ぶのである[85]。これによって体育は人間形成 Bildung として語られていくのである。ここに体育の本質論の中核を見据えるべきであるだろう。

３．結語

これまで、ディースターヴェーク教育学の特徴に目を向け、その主要概念である一般的人間形成と自己活動の分析に基づいて、体育の本質論の構成を試みてきた。体育の本質論は、人間形成概念を共通分母として構成される。体育のこのようなありかたは、やはり人文主義と呼ばれるだろう。ただし、この立場は、決して運動能力育成や体力育成等を拒絶しているわけではない。体育がそれらと全く無縁でいることなど、できようはずがない。

しかし、体育は教育であることの真意において、「ルカの福音書」においてイエスがマルタに説いたように、「なくてはならないもの」を、勇気を持って選択しなくてはならない[86]。それが、人間形成なのである。ジンメルはこれを、つまり教育の概念を人間形成に置くか、それとも測定可能な客観的成果に置くかといった選択は、教育における「最も重大な原理的決断 wichtigste prinzipielle Entscheidung」であるとさえ述べた[87]。

体育の世界でもエビデンスが声高に叫ばれ、測定主義が次第に進行するなか、体育はそのありかたについての決断が迫られているとすれば、体力の増強やスポーツ技術の指導もさることながら、勇気をもって人間形成を選択するべきであるだろう。これは体育の未来をつくる「最も重大な原理的決断」の一つである。そして、それは、もはや体育学的なユートピア論などではなく、体育学の人文主義的構成の本質的契機であるだろう。

４．註および引用・参考文献

1) プラトン：藤沢令夫訳 (1979) 国家（下）, 岩波書店, pp.144-146. 533A-D

2) 佐藤臣彦 (1993) 身体教育を哲学する, 北樹出版, pp.71-72.

3) Flitner, W. (1950) Allgemeine Padagogik, Ernst Klett, S.13.

4) Flitner, W., ditto, S.14.　その代表者は、たとえばペスタロッチ Pestalozzi, J.H. (1746-1827)、フレーベル Fröbel, F.W.A. (1772-1841) やヘルバルト Herbart, J.F. (1776-1841)、そしてディースターヴェーク Diesterweg, A.F. (1790-1866)等である。

5) Richter, K. (1890) Einleitung, Diesterweg, A.F. (Hrsg. Richter, K. 1907) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, 6.Aufl., S.4.

6) 別稿においても示した通り、Diesterweg, A.F. (1850) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, 4.Aufl.は、Deiters, H. (Hrsg.1950) Diesterweg Schriften und Reden , Volk und Wissen と、Hofmann, F. (Hrsg. 1962) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer und andrere didaktischer Schriften, Volk und Wissen の両者に掲載されている。ただし前者には欠落箇所があるため、本稿においてもその両者を照合し、後者の当該部分でそれを補った。なお、前者の部分的欠落は、編集者の意図によるものであるかどうかは依然として判然としない。なお、長尾十三二氏による訳書は、Deiters 版に対応している。cf. Diesterweg, A.F. : 長尾十三二訳 (1969) 市民社会の教育, 明治図書, Pp.212.

7) Hofmann, F. (1962) Die didaktischen Auffassungen F.A.Diesterwegs und ihre Bedeutung für die Gestaltung der Didaktik für Sozialistische Schule, in Wegweiser, 4.Aufl, S.15.

8) 以下、関連文献のうち、全集 Sämtliche Werke 掲載論文については、SW と略記したうえで、その巻数と頁数を明記する。

9) 大曽根良衛 (1969) 近代的庶民学校の基礎付け―A.Diesterweg の教育観を中心として―, 山梨英和短期大学紀要, 3：136.

10) 阿部悟郎 (2018) 体育の教育学的基底における人文主義適方向の検討―ディースヴェークの教育学的人文主義に基づいて―, 東海大学紀要体育学部, 48：1-12.

11) これについては、日本体育学会の機関誌「体育学研究」第 1 巻(1951)から第 64 巻第 2 号(2019)、

日本体育学会体育哲学専門領域の機関誌「体育哲学年報（旧名称：体育哲学研究）」通号第 8 号(1976)から第 50 号(2020)、日本体育・スポーツ哲学会の機関誌「体育・スポーツ哲学研究」第 1 巻(1979)から第 42 巻(2020)までを通覧した。

12) 阿部悟郎(2017) 体育の教育学的基底とその可能性―ディースターヴェークの教育学的ヒューマニズムに基づいて―, 体育・スポーツ哲学研究, 39-1：32-33.

13) Hofmann, F. (1989) Studien zur Geschichte der bürgerlichen Didaitik, Volk und Wssen, 197.

14) Lemke, H：上杉重二郎訳.(1987) 人間が人間になること、すべてこれが肝心なのだ―ドイツにおいてディースターヴェークはいかに受け継がれているか―, 北海道大学教育学部紀要, 31：117.

15) Diesterweg, A.F. (1830) Über das oberste Prinzip der Erziehung, SW, 2：23.

16) Diesterweg, A.F. (1835) Das pädagogischeDeutschland der Gegenwart-Bevorwortung und Begründung dasselben, 3：409.

17) Diesterweg, A.F. , a.a.O., 15), S.25.

18) Kemsies, F. (1889) Herbart und A.Diesterweg, Gumbinnen, S.5.

19) 林昭道 (1973) ヘルバルトとディースターヴェーク―ヘルバルト研究序説―, 教育学研究, 40-3：13.

20) 林昭道, ibid, p.18.

21) 林昭道, ibid, p.15.

22) 長尾十三二 (1951) プロイセン絶対主義の教育の性格, 海後勝雄, 近代教育史, 第一巻, 誠文堂新光社, p.213.

23) 林昭道, op.cit., 19), p.13.

24) Diesterweg, A.F. (1849) Die Grundrechte des deutschen Volks in betreff der Erziehung und Bildung der Jugend, SW, 8：6.

25) 照本祥敬 (1988) ディースターヴェーク「自己活動 Selbsttaätigkeit 論」の考察―「一般的人間陶冶 die allgemeine Menschenbildung」の理念と「自己活動」―, 教育方法学研究, 13：65.

26) Diesterweg, A.F. (1850) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, 4.Aufl., S.13.

27) 吉本均 (1986) 学校教授学の成立, 明治図書, pp.177-178.

28) Diesterweg, A.F. , a.a.O., 26, S.54-55.　なお、前段の文章の出自は、イザヤ書第二章四「彼らはそのつるぎを打ちかえてすきとし、そのやりを打ちかえてかまとし、国は国にむかってつるぎをあげず、彼らはもはや戦いのことを学ばない」にあるのは言うまでもない。

29) Diesterweg, A.F. (1831) Über die amtliche Stellung der Volksschullehrer, SW, 2：286.

30) Diesterweg, A.F., ditto, p.286.

31) Disterweg, A.F. (1829) Entwicklung und Organization des Schulwesens am Rheine,besonders in Köln, Volk und Wissen, S.501.

32) Diesterweg, A.F. (1849) Broschüren über die Schulfrage, SW, 825.

33) Diesterweg, A.F. (1849) Die Grundrechte des deutschen Volks in betreff der Erziehung und Bildung der Jugend, SW, 8：6.

34) Günther, K-H (1978) Quellen zur Geschichte der Erziehung, Volks und Wissen, S.225.

35) 照本祥敬, op.cit., 25), p.59.

36) Diesterweg, A.F. (1830) Über Philanthropinismus und Humanismus in bezug auf die in unseren Yeit entstehenden Bürgerschule, SW, 2：12.

37) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.8-9.

38) Diesterweg, A.F., ditto, S.9

39) Diesterweg, A.F., ditto, S.9

40) Diesterweg, A.F., ditto, S.9.

41) Diesterweg, A.F., ditto, S.9.　厳密には、前者を rerigiöse Humanismus、後者を philosophische oder anthropologische Humunismusu と表現している。

42) 教育思想を扱う文献の分析において、神を含む宗教観、あるいは価値論・文化・死生観の相違には慎重である必要があろう。当該文献の背景にある宗教観を、そのまま現代の日本にそのまま当てはめるのは無謀であし、それは本意ではない。ここでは、これを教育についての語りを素描するための不可避な手続きとして取り扱った。

43) Diesterweg, A.F., ditto, S.8.

44) Diesterweg, A.F., ditto, S.8.

45) Diesterweg, A.F. (1832) Wort zur Eröffunung des Berlinschen Seminar für Stadtschulen, SW, 2:467.

46) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.286.

47) Vgl. Diesterweg, A.F. (1844) Wegweiser, 3.Aufl.,G.D.Bädeker, S.122.

48) Diesterweg, A.F. (1836) Die Lebensfragen der Zivilsation, Schriften und Reden, Wolk und Wissen, S.119.

49) cf. 照本祥敬, op.cit., 25), p.62.

50) Diesterweg, A.F., a.a.O., 45), S.467.

51) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.21.

52) Diesterweg, A.F., ditto, S.34.

53) Diesterweg, A.F. (o.j.) Die Unterrichtsgegenstände von dem Standpunkte des Entwicklungsprinzips aus, SW, 2：924.

54) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.55.

55) Diesterweg, A.F. (1850) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer, 4.Aufl., S.7.　なお、彼がこの初出において明確に概念規定しているわけではない。ただ、この 3 行下に出現する「Selbsttätigkeit im Dienste des Wahren, Schönen, und Guten（真善美に仕える自己活動）」という表現は示唆的であるだろう。

56) Diesterweg, A.F. (1850：Hofmann, F. Hrsg. 1962) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer und andrere didaktischer Schriften, Volk und Wissen, S.62.
57) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.15.
58) Diesterweg, A.F., ditto, S.111.
59) 大家孝雄 (1985) ディースターヴェークの発達論―素質・教育・発達段階とその関連を中心に―, 大阪市立大学教育学論集, 11：45.
60) Diesterweg, A.F. (1852) Individualität, Subjektivität und Charakter, SW, 10：63.
61) 大西勝也 (2012) ディースターヴェーク、ヴィルマン、ヘルバルトの教育思想にみる個性論, 神奈川大学人文研究, 117：59.
62) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.3.
63) Diesterweg, A.F., ditto, S.4.
64) Bloth, H.G. (1966) Adolf Diesterweg：Sein Leben und Wirken für Pädagogik und Schule, Quelle & Meyer, S.15.
65) Vgl. Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.4.
66) Ahrbeck, R. (1979) Die allseitig entwickelt Persönlichkeit, Volk und Wissen, S.188.
67) Diesterweg, A.F. (1850：Hofmann, F. Hrsg. 1962) Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer und andrere didaktischer Schriften, Volk und Wissen, S.62.
68) Diesterweg, A.F., ditto, S.62.
69) Diesterweg, A.F. (1851) Was ist von jedem Lehrer dieser Zeit zu erwarten und zu fordern?, SW, 9：108.
70) Diesterweg, A.F. (1829) Der jetzige Standpunkt der Pestalozzischen Schule und das Treiben der After Pestalozzianer unserer Zeit, SW, 1：524.　なお、この著作において、彼は実用主義的な教育に対して「『ペスタロッチが唱えた調和的で全面的な教育』が虚しく響く」と吐露している。
71) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.100.
72) Klingberg, L. (1990) Diesterwegs Rede über die Lehrmethode Schleiermachers, Hohemdorf, G. / Rupp, H.F. (Hrsg.) Diesterweg : Pädagogik-Lehrerbildung, Bildungs Politik, Deutscher Studien Verlag, S.197-198.
73) Günther, K.H., a.a.O., 34), S.274.
74) Diesterweg, A.F. (1835) Wegweiser, 1.Aufl., G.D.Bädeker, S.43.
75)Diesterweg, A.F., a.a.O., 15), S.23-25.
76) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.32.
77) Ahrbeck, R., a.a.O.,66), S.193.
78) Vgl. Spranger, E.（1922）Lebensformen, Nax Niemeiyer, S.302.
79) 丸山圭三郎 (1981) ソシュールの思想, 岩波書店, p.93-96.
80) Diesterweg, A.F., a.a.O., 26), S.100.
81) Vgl. Spranger, E.（1922）Lebensformen, Nax Niemeiyer, S.252.
82) Diesterweg, A.F. (1852) Individualität, Subjektivität und Charakter, SW, 10：63.
83) 大西勝也, op.cit., 61), p.59.
84) Goethe Werke (1888), 2, Böhlau, S.83. 、あわせて Goethe Werke (1968) 2, Bibliotek Deutsche Klassiker, Aufbau verlag, S.128. cf. 松井利夫 (1996) ゲーテの抒情詩について, 東京外国語大学論集, 52：112.あわせて、登張正實 (1992) ゲーテの戯曲「タウリスのイフィゲーニェ」と詩「神性」, 日本学士院紀要, 47-3：108.
85) Diesterweg, A.F. (1850：Hrsg.Hofmann, F.) Wegweiser zur Bildung fr deutsche Lehrer, 4.Aufl., S.184.
86) ルカによる福音書, 第 10 章 41
87) Simmel, G. (1922) Schulpädagik, A.W.Zickfeldt, S.15.

［実践研究］

ハンドボール競技における防御戦略構築に関する検討

栗山　雅倫 *1

Examination of building a defense strategy in handball competition

by

Masamichi Kuriyama

Abstract

In Modern handball, tactics have been diversified, and it has become possible to see a wide variety and highly proficient performance in any aspect. This tendency is particularly noticeable in the attacking phase, and the construction of a defense strategy to deal with it has become an urgent issue. Therefore, the purpose of study, it is clarified the actual situation at the top level of domestic university female teams and to examine the construction of defense strategies. The main findings in this study are as follows.

1. Inducing mistakes in the opponent's attack by defense is not a direct means to control the goal, but it may lead to the reduction of the range of the opponent's attack and the creation of effective haste opportunities.

2. In modern handball, a high shot saving rate is a direct factor in controlling goals.

3. In modern handball, it is effective to make the control of the shoot prevention rate a central consideration in the defense strategy planning.

Ⅰ．緒言

球技における戦術の発達は、ある攻撃に対する防御の対応、さらに新たな攻撃への対応といった発達を繰り返す。會田[1)]は、トップレベルの大会における戦術の発達の過程は、その種目の系統発生そのものであるとし、それらがあらゆるカテゴリー、レベルに広がっていくと述べている。

Dietrich Späte ら[2)]は、現代におけるハンドボール競技のトップレベルにおいては、ゲームのあらゆる局面においてバリエーションが豊富であり、

＊1　東海大学体育学部競技スポーツ学科

進化を遂げていることについて言及している。特に攻撃局面における進化は著しいものであり、それに対峙する防御の課題について、シュート阻止率の低下やインターセプト等のシュート阻止以外のボール所有権獲得の出現が低下しているとした上で柔軟で積極的な防御の重要性を述べている。また、Jose M. Saavedra ら[3)]は、スコア分析により、インターセプトやゴールキーパーによるシュート阻止の、試合結果への大きい影響について触れているものの、これらに関する具体的な言及は他に多く見られない。

このような状況において、防御戦略の充実は喫緊の課題であり、戦略構想立案について整理することの必要性が高いと推察できる。そこで本研究では、国内大学女子トップレベルにより展開されるゲームの実情について明らかにし、防御戦略の構築について検討することとした。

Ⅱ．研究の目的

ハンドボール競技における、現代のゲームの様相をスコアの解析により俯瞰し、有効な防御戦略の構築を検討することを目的とした。

Ⅲ．研究方法

防御局面の実態をスコアから把握し、防御戦略の構築について検討した。スコアの収集については、調査対象となる試合の VTR の視聴により行った。また、正確なデータの収集には、ハンドボール競技の競技規則に関する適切な理解を要する為、公益財団法人日本スポーツ協会公認ハンドボール上級マスターコーチの資格を有する者の監修の元、T 大学女子ハンドボール部に所属する部員 2 名によりデータ収集を行い、その後に他の 2 名により同等の方法で確認した。

1. 調査対象

関東学生ハンドボールリーグ女子 1 部リーグ

1）2019 年度秋リーグ全 28 試合

2）2020 年度秋リーグ全 28 試合

2. 調査項目

1）得点・失点

調査対象の 2019 年度秋リーグ全 28 試合、および2019 年度秋リーグ全 28 試合における各チームの得点と失点の平均値と標準偏差を調査した。

2）ミス誘導

相手チーム攻撃のシュート以外のボール所有権喪失（パスインターセプト、ドリブルスティール、反則によるミス）を“ミス誘導”とし、チーム毎の平均値と標準偏差を調査した。

3）シュート阻止

相手チームによるシュート数から相手チームのゴール数を引いた数を阻止数とし、阻止数を相手チームシュート数で除したものをシュート阻止率として算出した。チーム毎のシュート阻止率について、平均値と標準偏差を調査した。

4）ミス誘導と失点の関係

ミス誘導と失点の関係性について、相関を調査した。

5）シュート阻止と失点の関係

シュート阻止率と失点の関係性について、相関を調査した。

3. 統計処理

各指標は平均値と標準偏差で示した。統計解析には、IBM SPSS Statistics 20 を用いて、Kruskal-Wallis 検定により有意性を確認したのち、多重比較には Dann-Bonferroni の方法を用いた。シュート阻止率、ミス誘導、失点の関係性の検討には、ピアソンの積率相関係数を求めた。有意水準は 5%未満とした。

Ⅳ．研究結果

1. 得点・失点

図 1 に、2019 年関東学生ハンドボール秋季女子 1 部リーグの全試合における、順位毎の得点平均と失点平均を示した。得点平均においてチーム間の有意差は認められなかった（$p=0.154$）。一方、失点平均においてはチーム間の有意差（$p<0.05$）は認められ、多重比較の結果、1 位チームと 6 位、7 位、8 位チームの間にそれぞれ有意差（$p<0.05$）が認められた。

また、得点、失点ともに順位との緩やかな関係性が見られ、4 位以下のチームは、いずれも失点

が得点を上回った。

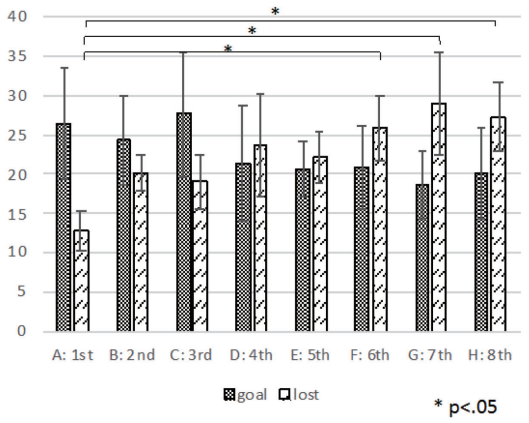


図１．チーム別　得点・失点平均（2019 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図２に、2020 年関東学生ハンドボール秋季女子１部リーグの全試合における、順位毎の得点・失点平均を示した。得点平均においてチーム間の有意差は認められなかった（p=0.305）。

一方、失点平均においては、全チーム間の有意差が認められ（p<0.05）、多重比較により 1 位チームと 8 位チームの間、2 位チームと 8 位チームの間にそれぞれ有意差（p<0.05）が見られた。

また、4 位以下のチームにおいては、失点が順位に影響を及ぼした可能性が示唆された。

2019 年と 2020 年の関東学生ハンドボール秋季女子 1 部リーグ戦においては、5 位以下の順位の変動があったが、いずれも順位と失点の間における関係性が見られた。

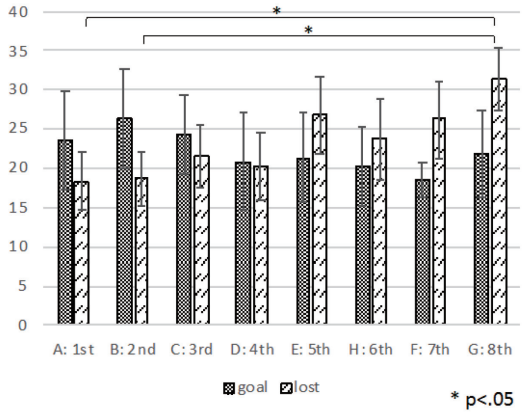


図２．チーム別　総得点・総失点（2020 年関東学生秋季女子１部リーグ）

2. ミス誘導

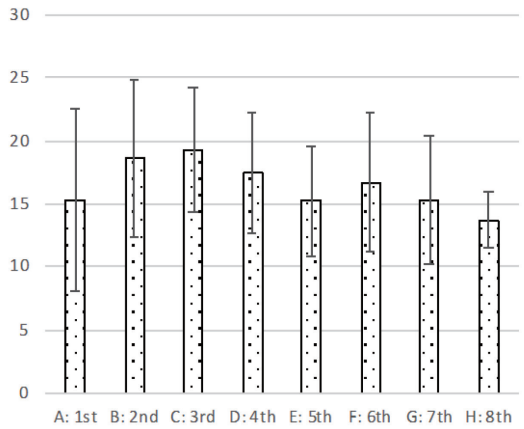


図３．チーム別　ミス誘導数（2019 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図３に 2019 年関東学生秋季女子１部リーグの順位毎のミス誘導数平均を示した。

上位チームと下位チームの間にゆるやかな傾向の違いが見られるが、有意差は認められなかった。

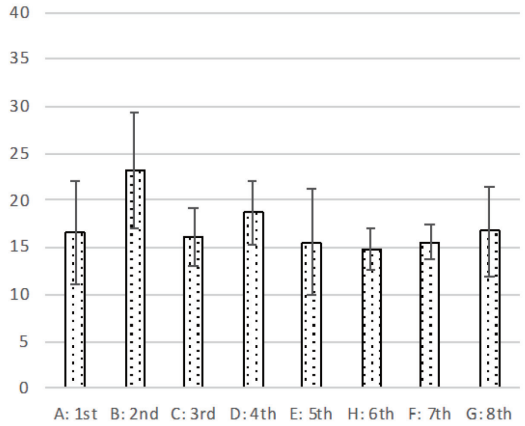


図４．チーム別　ミス誘導数（2020 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図４に関東学生秋季女子一部リーグの順位毎のミス誘導数平均を示した。

２位チームの B とすべての他チームの間に異なる傾向が見られるが、2019 年度同様、有意差は認められなかった。

3. シュート阻止

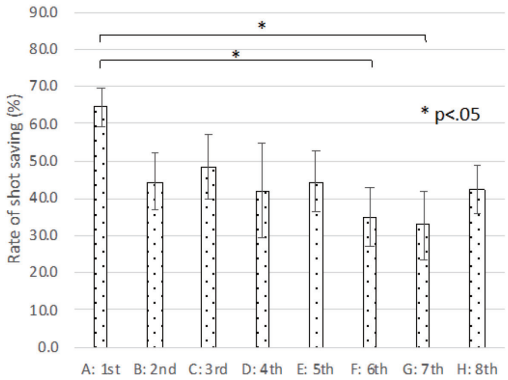


図５．チーム別シュート阻止率（2019 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図５に 2020 関東学生秋季女子一部リーグの順位毎のチーム別シュート阻止率を示した。

全チーム間に有意差（$p<0.05$）が認められ、その後の多重比較により、１位チームの A と６位チームの F および７位チームの G との間にも有意差（$p<0.05$）が認められた。総じて上位チームと下位チームの間に顕著な差異が見られた。

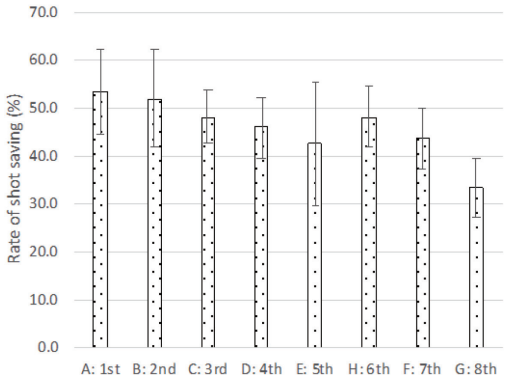


図６．チーム別シュート阻止率（2020 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図６に、2020 年関東学生秋季女子１部リーグの順位毎のチーム別シュート阻止率を示した。全体的に順位と阻止率の間に緩やかな関係性が見られ、全チーム間に有意差（$p<0.05$）が認められた。また、多重比較においては有意差が認められなかった。

4. ミス誘導と失点の関係

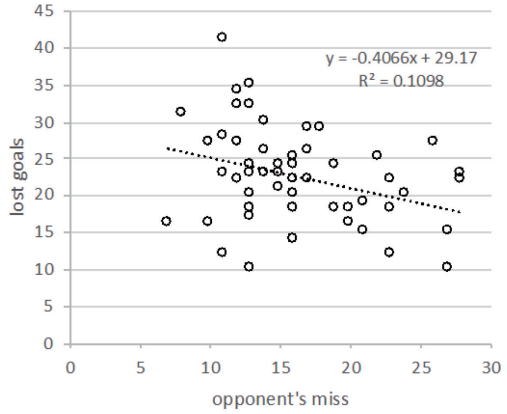


図７．ミス誘導と失点の関係（2019 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図７に、2019 年関東学生秋季女子１部リーグにおける、ミス誘導と失点の関係について示した。

ミス誘導と失点の間に有意な相関（$r=-0.33$,

p<0.05）が認められた。

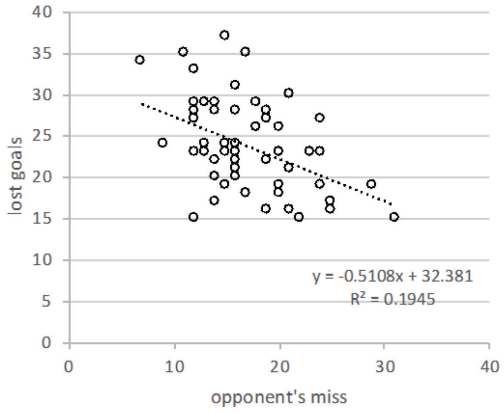


図８．ミス誘導と失点の関係（2020 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図８に、2020 年関東学生秋季女子１部リーグにおける、ミス誘導と失点の関係について示した。

ミス誘導と失点の間に有意な相関（r=-0.44，p<0.01）が認められた。

5. シュート阻止率と失点の関係

図９に、2019 年関東学生秋季女子１部リーグにおける、シュート阻止率と失点の関係について示した。シュート阻止率と失点の間に有意な相関が認められた（r=-0.87，p<0.01）。

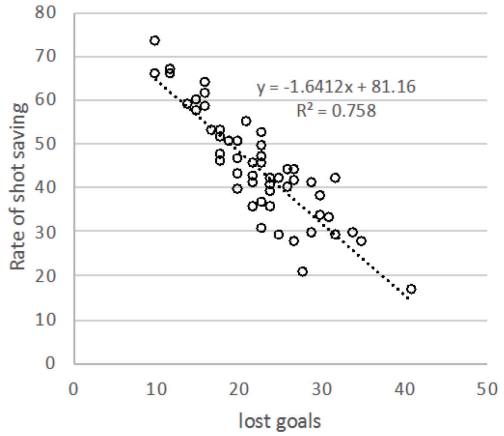


図９．シュート阻止率と失点の関係（2019 年関東学生秋季女子１部リーグ）

図１０に、2020 年関東学生秋季女子１部リーグにおける、シュート阻止率と失点の関係について示した。シュート阻止率と失点の間に有意な相関が認められた（r=-0.87，p<0.01）。

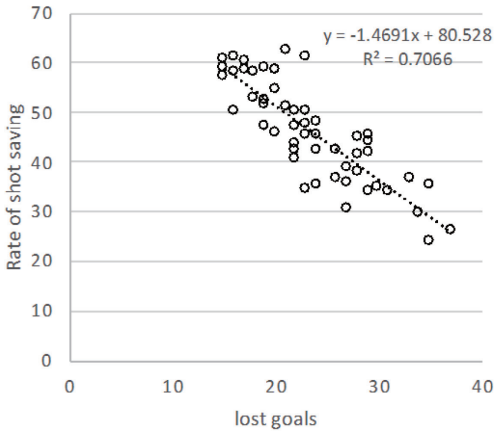


図１０．シュート阻止率と失点の関係（2020 年関東学生秋季女子１部リーグ）

Ⅴ．考察

1. 防御パフォーマンスの重要性

本研究における調査結果より、国内大学女子トップレベルにおいて、防御パフォーマンスのゲーム結果に及ぼす影響の大きさが示唆された。効果的な防御パフォーマンスの必要性については、複数の知見[3）4）5）6）]が見られる。また、フランス代表チームは、男子チーム女子チームの共通したモットーとして、“Attack wins you games, defence wins you titles.” という概念を掲げ[7）]、防御の重要性を強く認識している。今回の調査結果はそれらを支持するものとなった。

得点を競い合うハンドボール競技において、より多くの得点を獲得する高い攻撃パフォーマンスの確保と、失点をより抑制する高い防御パフォーマスの確保の双方が必要であるが、防御パフォーマンスの効果性に焦点をあてることによって、ゲーム結果をよりコントロールし得る可能性が示さ

れた。

2. 防御パフォーマンスにミス誘導の有効性

図３および図４より、チーム間におけるミス誘導の差異が見られた。しかしながら、チーム成績との明確な関係を見出すことはできなかった。また、図７および図８より、ミス誘導と失点における統計的に有意な相関を見出すことができた。

以上より、本調査においてはミスの誘導が防御パフォーマンス結果に好影響を及ぼすことが確認できた。

ゲーム結果は、攻撃の効果と防御の効果の関係性の中で決定づけられるため、ミスの誘導率が直接ゲームを決定づける大きな要因とは断言できないものの、失点抑制につながる一要因である可能性が示唆された。

相手側のミスを積極的に誘導する、パスインターセプト、ドリブルスティール、あるいはパスやドリブルの牽制行動などの防御パフォーマンスは、攻撃する相手への影響があることは明確であり、相手攻撃の展開の自由度を狭めたり、心理的プレッシャーを与えることが考えられる。

八尾ら[8]は、相手の速攻に対する帰陣する局面での防御戦術の重要性についても言及し、Dietrich Späte[2]らは、現代ハンドボールにおいて柔軟で積極的な防御の必要性は高いとし、攻撃における様々なパフォーマンスが進化した現代ハンドボールにおける、バリエーション豊かな防御パフォーマンスによる対応が不可欠であるとする他、Balint Elena[9]は、予測的な防御機能の重要性について言及している。また、相手チームのミスを誘導することが、速攻機会の創出、および速攻機会の有効化に極めて有効であるとの知見が散見される[10][11][12]。

すなわち、相手チームのミスを誘導することは、ゲームの勝敗を決定づける直接的な要素ではないものの、相手攻撃の幅を抑制する効果や、速攻機会への効果性の増幅などによる、失点抑制への効果性が考えられることから、ゲーム結果へのポジティブな影響を及ぼす重要な要因であることが考えられる。

3. シュート阻止率のゲームへの影響

図５および図６より、シュート阻止率がチーム成績に明らかな影響を及ぼしていることが確認された。また、図８および図９より、失点数との間に統計的に有意な相関があることが認められた。これらの調査結果より、高いシュート阻止率のゲームに与えるポジティブな影響は明確であることが示唆された。

相手攻撃のミスの誘導が、ゲーム結果に好影響を及ぼす直接的な要因でないことに対し、シュートの阻止率が失点抑制のための極めて直接的な要因であり、ゲームの勝敗に強く影響を及ぼすことが明らかになった。防御戦術も攻撃戦術等と同様に、時代の変遷とともに幅広くなっており、シュート阻止以外のボールの所有権獲得も多岐にわたる。しかしながら、現代のハンドボールにおいて、シュート局面への対峙をゲーム構想立案における中心的な考察事項におくべきことは否めない。

4. シュート阻止率を考慮した防御戦略構築の有用性

シュート阻止率は、ゴールキーパーのパフォーマンス能力に大きく依存することは明らかであるが、防御活動全般の戦略性によるシュート阻止率のコントロールすることの重要性が考えられる。

Dietrich Späte[2]らの報告では、2019 年の男子世界選手権において、ゴールキーパーのセーブ数が低下しており、コートプレーヤーによるプレーのバリエーションや習熟性がより豊かになったことに起因していると言及している。今日の実情において、ゴールキーパーの個人的なアプローチだけに委ねるだけでは、シュート阻止率の向上を担保することが不十分であり、その傾向は強化されてきていることが推察できる。

會田[13]は、ゲーム構想はチーム構成メンバーの身体的、精神的、技術・戦術発達段階に大きく影響されると示しており、チームの事情により取り組み可能な個別の防御戦術は異なる。同様のことは攻撃構想にもあてはまり、速攻機会の多用が、より有用となるチームもある。それらを踏まえた防御戦略構想の立案が必要となるが、その中心的な検討事項にシュート阻止率のコントロールを据

えることが望まれる。

Ⅵ．まとめ

本研究より、以下の知見を得た。

1．防御による相手攻撃のミスの誘導は、失点抑制のための有効な手段であり、相手攻撃の幅の抑制や、有効な速攻機会の創出につながる可能性がある。

2．現代ハンドボールにおいて、高いシュート阻止率は、失点を抑制する直接的な要因となっている。

3．現代ハンドボールにおいて、防御戦略構想立案にシュート阻止率のコントロールを中心的検討事項とすることは有効である。

本研究は、今日的なハンドボールとして、国内大学女子トップレベルをスコアより俯瞰し、防御戦略構想の立案に寄与することを試みた。結果として、一定の知見を得ることはできたが、定量的なゲームの観察にとどまった。今後の展望としては、対象とするレベルを拡大するとともに、質的なゲームの観察をともないながら、本研究と同様の課題に取り組むことがあげられる。

文献

1) 會田宏（1994）ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究．スポーツ運動学研究，7，pp.25-32.

2) Dietrich Spaïe・Paul Landure・Jorge Duenas・Jochen Beppler (2019) Overall Analysis -More Quality in the game-. Special Edition of the IHF Terchnical Magazine，pp5-31.

3) Jose M. Saavedra・Sveinn Þorgeirsson・Milan Chang・Hafrún Kristjánsdóttir・Antonio García-Hermoso (2019) Discriminatory Power of Women's Handball Game-Related Statistics at the Olympic Games(2004-2016). Journal of Human Kinetics，62，pp221-229.

4) 栗山雅倫・平岡秀雄（2008）個人戦術的能力評価に関する考察-防御局面に着目して-．東海大学スポ-ツ医科学雑誌，20，pp. 15-21.

5) 八尾泰寛（2017）ハンドボール競技の攻撃からみた防御様相について：リオデジャネイロオリンピックから．東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要，52，pp.173-180.

6) 八尾泰寛（2019）ハンドボール競技における防御方法の一考察：連続得点・失点時に着目して．東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要，54，pp.117-121.

7) Paul Landure（2016）Standing strong in defence is in France genes, Analysis22. https://pol2016.ehf-euro.com/news/single-news/detail/News/standing-strong-in-defence-is-in-french-genes/

8) 八尾泰寛（2009）ハンドボールにおける攻撃のミスプレーについて．東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要，44，pp.43-48.

9) Balint Elena（2013）The Importance of Anticipation in Increasing the Defense Efficiency in High Performance Handball. Procedia - Social and Behavioral Sciences，76，pp.77-83.

10) 河村レイ子・大西武三・水上一（1985）ハンドボールの速攻に関する研究．大学体育研究，7，pp.63-69.

11) 仙波（2020）ハンドボール競技における勝敗の要因-点差に着目して-．環太平洋大学研究紀要，16，pp.187-192.

12) クンスト＝ゲルマネスク・中村一夫訳（1981）ハンドボールの技術と戦術，ベースボールマガジン社，p.191.

13) 會田宏（2016）私の考えるコーチング論．ハンコーチング学研究，29，pp.79-84.

［実践研究］

スノーボード用チタン製センターディスク使用と技術習得との関連性に関する研究
～テキストマイニング分析から技術習得補助具としての有効性を検討する～

内藤堅志*1*2・瀧澤憲一*3・藤沼到*4・須藤桂*5
・今村佑良*4・粟國朝嗣*4

Studies on the relationship between the use of titanium center discs for snowboarding and skill acquisition.
Examining the effectiveness as an auxiliary tool for learning snowboarding skills from text mining analysis

by

Kenshi Naito, Kenichi Takizawa, Itaru Fujinuma, Katsura Suto, Yura Imamura, Tomotsugu Awakuni

Abstract

This study examined whether the use of the newly developed titanium center disc for snowboarding is effective for technical acquisition. The subjects of the study are 5 professional snowboarders and 3 intermediate level snowboarders, all of whom are freestyle snowboarders. The analysis was a text mining analysis using KHCoder3. And the subject of analysis is a video that the research subject introduces the titanium center disk on SNS (social networking service). The result. What was common to both the advanced level and the intermediate level was "force transmission", which contributed to accurate board operation. A characteristic statement at the intermediate level was that "snowboarding accelerated". Acceleration techniques are the skills needed to step up to an advanced level. It can be said that it is meaningful to be able to experience that skill. The characteristic remark at the advanced level was "torsion, carving turn". It is possible to refine these skills by using a titanium center disc. It is thought that using a titanium center disc is effective for learning the skills of "acceleration", "torsion", "carving turn", and "force transmission (Snowboarding operation)".

＊1 （公財）大原記念労働科学研究所　＊2 東海大学体育学部非常勤　＊3 LATE project
＊4 Pro Snowboarders Association ASIA　＊5 Salomon Japan

Ⅰ．はじめに

スノーボードは 1 枚の板（ボード）に両足を固定して滑走するために，上達する上でバランスがポイントとなる．日本スノーボード協会（以下 JSBA）ではスノーボード教程の中でバランスのスポーツと明言し,バランスの定義を「滑走時に作用する外力に対応する，能動的な運動による調整力」としている [1]．また，全日本スキー連盟（以下 SAJ）でも技術の習得課程でバランスを重要視している [2]．このようにバランスが重要であるが故にスノーボードはマテリアルのスポーツと言われ，マテリアルの選択やセッティングによって上達の度合いが変わるとされている [3]．スノーボードはアルパイン系モデルとフリースタイル系モデルとに大別できるが，どちらのモデルも基本的にボード，バインディング，ブーツから構成されている．マテリアルは毎年開発が行われ，各メーカーともに軽さ，強さ，反発力，復元力を追求して操作性，レスポンス，コントロール，疲労軽減を追求している [4-8]．

スノーボードの研究に関しては様々な研究が行われている．具体的には傷害や雪崩などの安全に関する研究 [9-11]やターンやオーリーなどの技術研究 [12-15]，技術研究を行うための測定機器の研究 [16-19]，板やバインディングなどの構造に関する研究 [20-25]，トレーニングやコーチングに関する研究 [26-28]，パラリンピック選手用の下腿切断者用装具の研究 [29]などである．

本研究は新たに開発したフリースタイル用チタン製のセンターディスクをスノーボーダーが試乗し，その発言・会話に対して計量テキスト分析を行いスノーボード技術習得ための補助具としてのチタン製センターディスクの有効性を検討した．

Ⅱ．チタン製センターディスクについて

センターディスクとはバインディングのパーツである．フリースタイル系モデルのバインディングの構造はベースプレート，ヒールカップ，ハイバック，トウストラップ，アンクルストラップ，センターディスクから構成されている（図 1）．バインディングの役割はスノーボード（板）とブーツ（足）を固定することにある．そして直接スノーボード（板）とバインディングを固定（結合）させているパーツがセンターディスクとなる．センターディスクの役割として，バインディングとボードを連結する足の角度（アングル）の調整，スノーボーダーの力を板に伝える，雪面の情報をスノーボーダーに伝えるなどの役割がある．

図 1. バインディングの構造とセンターディスク

一般的なセンターデイスクはプラスチック,マグネシウム，アルミニウムなどの素材からできている．本チタン製センターディスクはチタンの特性を生かして軽量（比重 4.51 で銅の約 1/2，鉄の約 60%），高強度（重さあたりではアルミニウムの約 3 倍，鉄の約 2 倍の強度）[30]，薄い形状となっている．なお一般的なセンターディスクとの比較を表 1 に示した．

表 1. センターディスクの比較

	素材	重さ（g）	厚さ（mm）
チタン製センターディスク	チタン	45	1.0
U社センターディスク	プラスチック	67	10.0
FO社センターディスク	アルミニウム	93	9.0
FU社センターディスク	プラスチック	67	10.0

＊比較ディスクはノーマルサイズ．厚さは最も厚い部分を測定．

Ⅲ．方法

1．対象者と対象データ

研究対象者は表 2 に示すよう上級者（Pro Snowboarders Association ASIA プロスノーボーダーおよび JSBA 有資格者）5 名，中級者 3 名である．なお表中に参考として研究対象者の技術スタイル及び競技スタイルを JSBA のカテゴリーに従って示した．技術スタイルのグラウンドスタイルとはオーリーやノーリーやスピンなどのグラウンドトリックを中心とするスタイル，エアスタイルとはスノーパークなどのキッカーやテーブ

ルトップなどでジャンプをするスタイルである．競技スタイルのHPはハーフパイプ,SSはスロープスタイル，SJはストレートジャンプ，SXはスノーボードクロスの略である．なおレベル及びスタイルの判定はJSBAのC級インストラクター資格を有する労働安全衛生・事故調査・技能研究を研究分野とする研究者及び Pro Snowboarders Association ASIA プロスノーボーダー資格を持つ共同研究者が行なった．

表 2．研究対象者の特性

スノーボーダー	レベル	スタイル及び競技スタイル
A	上級（プロスノーボーダー）	グラウンドスタイル,HP,SS,SJ
B	上級（プロスノーボーダー）	HP,SS,SJ
C	上級（プロスノーボーダー）	SS,SJ,SX
D	上級（プロスノーボーダー）	HP,SS,SJ
E	上級（JSBA公認スロープビルダー）	エアスタイル,SX
F	中級（JSBA1級）	エアスタイル
G	中級	グラウンドスタイル
H	中級	HP

＊プロスのボーダーの肩書は現在・元も含む

今回は研究対象者が SNS（social networking service）上でチタン製センターディスクを試乗している８本の映像を分析の対象とした（表 3）．なお研究対象者全員がチタン製センターディスクを使用するのが初めてであった．また試乗する際にはチタン製センターディスクの素材について説明をしたが，使用効果や取り付け方法について説明はしていない．

表 3．分析対象データ

映像	出演者	映像の時間	文字数
1	A	17分31秒	約6700字
2	B	3分31秒	約850字
3	C	7分4秒	約1400字
4	DとF	８分12秒	約3700字
5	DとF	７分15秒	約3000字
6	E	13分22秒	約4000字
7	EとH	15分30秒	約4800字
8	EとG	13分37秒	約4200字

2．分析方法および分析手順について

本研究は分析対象映像の発言および会話の文字起こしを行い，計量テキスト分析のフリーソフトウエアである KH Coder3 を用いて分析を行った．計量テキスト分析とは内容分析の一種で,質的データ（文字データ）をコーディングによって数値化し,計量的分析手法を適用してデータを整理,分析,理解する方法である[31)-34)]．またHK Coder の開発者である樋口は言葉を計量的に分析する意義を,データ検索による新たな気づき,機械的な分析結果を第三者に提示することで研究手法が批判・検討・検証を行うことができ信頼性の向上につながる[35)]と述べている．本研究の分析手順はKH Coder を開発した樋口が推奨する手順に従い行なった[31)]．以下に本研究の具体的な分析手順を示す．

1)対象データのトランスクリプション:研究対象者がチタン製センターディスクを試乗している映像のトランスクリプト化．

2)前処理の実行(同義語句の統一)：トランスクリプションされた文章を確認して同義語句の統一を行なった．同義語句の統一に関してはバイン･バインディング・ビンディングを「バインディング」に,テク・基礎・テクニカルなどスノーボードの基礎を学ぶ人を表す言葉を「テクニカル」に，板・ボードなどスノーボード本体を表す言葉を「板」に，ダイレクト・直接など雪面の情報が伝わる様子を「ダイレクト」に,軽量・軽い・超軽量など重さに対する表現を「軽い」に統一した．

3)データーのテキスト化：トランスクリプト化したデータをKH Coder3 で処理をするためにテキスト形式(.txt)によるファイルの作成を行なった．

4)強制抽出：KH Coder3 分析を行う前に強制的に抽出する語句の設定を行なった．KH Coder3 の分析では茶筌（IPADIC：著作権、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座松本研究室）の形態素解析の結果をほぼそのまま利用しているために,KH Coder3 の品詞体系も茶室の品詞体系に準じている．そのためにスノーボードの専門用語であるトーションを“トー”と“ション”に分解してしまい不十分な分析となる．今回は KH Coder3 の機能である「語の取捨選択」機能を使い,オーリー,トーション,グラウンドトリック,ショートターン,逆エッジ,バタートリックの強制抽出を行なった．なお以上の作業はJSBA の C 級インストラクター資格を有する労働安全衛生・事故調査・技能研究を研究分野とする研究者及び Pro Snowboarders Association ASIA プロスノーボーダー資格を持つ共同研究者が行なった．

5)分析：今回の分析はKH Coder3 が有している頻出語機能，共起ネットワーク分析機能を用いて行

った．頻出語機能とはデータ内で多く出現していた語を抽出する機能である．共起ネットワークとは，出現パターンの似通った語，すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークである．円は語(node)をあらわし,語の出現数(frequency)に応じて円のサイズが変化する．また円と円を結ぶ線は共起関係をあらわし，共起の程度（係数：coefficient)に応じて線の太さが変化する[31,36,37]という共起を可視化した図である.なおKH Coder3が有している多次元尺度構成法,階層的クラスター分析,共起ネットワーク,自己組織化マップの分析機能の中から,共起ネットワーク分析を選んだ理由は今回の対象としたデータの情報量(大きい,小さい),情報の普及の程度（非常に広く知られている,そこまでは知られていない)との関係から共起ネットワーク分析を選択した[31]．

共起ネットワーク分析は初めに「語と語分析」を行い全体の傾向を把握した．その後スノーボーダーの技術レベルを外部変数に用いて「語と外部変数見出し分析」を行った．さらに共起ネットワークの分析結果をKH Coderの機能であるKWICコンコーダンス（抽出語が使われている文脈検索）で検討を行った.共起ネットワーク分析で対象とする言葉に注目し,KWIC コンコーダンスで言葉の使われ方を元のテキストで確認することにより，言葉がどのような使われ方をしてどのような意味を持つのかを考察するためである[38,39].さらに本研究は元のテキストを事例として紹介する際，発言したスノーボーダーが特定できるようにしている.この理由であるが本研究はスノーボードのマテリアルを使用することによる技術習得貢献への有効性を検討しているためである．技術の習得過程において,上級者と中級者が語っていることや,感じていることの水準や内容は異なっており，理解の水準も異なる．植田[40]は「選手のレベルに合った内容を理解できる言葉で伝えることは競技力向上のために必要」とし,狩野[41]も「技能・技術が上達していない段階では要領を言葉でいっても受け手には理解されない面もある.しかしある程度上達してくるとかなり難しい技術上の言葉を理解できるようになる」としており，研究の有効性から元のテキストをスノーボーダーと共に紹介をした.

Ⅳ．結果および考察

今回の分析対象の総抽出語数は 6,333 語で分析に使用した語数は2,450語、解析文は430文であった。

1.頻出語分析

データ内に多く出現していた語の上位 150 位を表4に示した．最も多く出現していた言葉は板で出現回数は 48 であった．次いで感じ（出現回数39)，思う（出現回数36)，凄い（出現回数36）であった.

2.共起ネットワーク分析

1)語と語分析（全体分析：図2)

共起ネットワークの分析は，最小出現数5，最小文書数 1，共起関係の種類「語-語」，描写する共起関係の描写をJaccard係数により上位60，語と語を結ぶ線は「強い共起関係ほど濃い線に」の設定を行い，Subgraph分析を行った（以上デフォルト設定）.

分析の結果であるが語の数(node)は56,線(edge)として描写されている共起関係の数が90，社会ネットワーク分析における密度（density）が0.042であり[31],比較的強く結びついている語のグループ（Subgraph）の数は10であった.なお，図中のCoefficientはJaccard係数で測定した共起の程度に応じて線の濃淡を変化させる機能で，Frequencyは単語の出現回数を表し出現回数(表4)が大きくなると円のサイズも大きくなる機能である．出現した10のSubgraphの特徴を以下のように解釈した.

Subgraph1：チタン製センターディスクを使用することで「生じた変化」に関連するグループ.

Subgraph2：チタン製センターディスクを使うことで生じた変化の中で「滑りの技術」に関するグループ.

Subgraph3：チタン製センターディスクを使うことで生じた技術的な変化の中で内力（スノーボーダー自身の運動によって板や雪面に力をかけること）[1]を板に伝えやすいことを述べているグループ.

Subgraph4：チタン製センターディスクの素材であるチタンに対するイメージに関するグループ.

Subgraph5：チタン製センターディスクを取り付

表 4. 頻出語

出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語
48	板	9	プレート	5	ジブ	4	キッカー	3	オーリー
39	感じ	9	今回	5	スノーボード	4	ショートターン	3	グッ
36	思う	9	実際	5	ターン	4	ネジ	3	グラウンドトリック
36	凄い	9	多分	5	パーク	4	ブーツ	3	スピード
28	言う	8	加速	5	ビックリ	4	意味	3	スピン
28	良い	8	硬い	5	ヤバイ	4	感	3	トー
27	プレートピア	8	全然	5	引き上げる	4	見える	3	トリック
26	ディスク	8	薄い	5	角度	4	行く	3	ドレイク
25	軽い	7	なんか	5	楽しい	4	使える	3	ヌルヌル
25	使う	7	エッジ	5	気	4	出る	3	バージョン
25	変わる	7	ドライバー	5	見る	4	出来る	3	バーン
18	力	7	悪い	5	効く	4	上級	3	メリット
17	チタン	7	結構	5	効果	4	状態	3	易い
17	トーション	7	低い	5	好き	4	吹っ飛ぶ	3	引っ張る
17	分かる	7	動き	5	高い	4	操作	3	回す
15	自分	7	入る	5	取り付ける	4	大きい	3	掛ける
15	人	7	普通	5	柔らかい	4	調子	3	気持ち
15	本当に	6	アングル	5	上がる	4	伝える	3	技
14	バインディング	6	センタリング	5	乗る	4	伝わる	3	逆エッジ
14	今	6	テスト	5	特に	4	動かす	3	金属
14	飛ぶ	6	ビス	5	付ける	4	動く	3	軽量
13	カービングターン	6	逆	5	怖い	4	動作	3	元
13	感じる	6	試す	5	本当	4	反応	3	固定
12	違う	6	正直	5	明らか	4	飛べる	3	行う
12	滑り	6	絶対	5	面白い	4	不思議	3	今後
11	感覚	6	足	4	SP	4	欲しい	3	今日
11	穴	6	捻る	4	あ	3	あっ	3	最後
11	付く	6	変える	4	そうですね	3	あの	3	作る
10	滑る	5	じゃあ	4	はい	3	その	3	持つ
9	めちゃくちゃ	5	アイテム	4	びっくり	3	まあ	3	時点

ける際の困難さに関するグループ.

Subgraph6：チタン製センターディスクを勧める対象（人）に関するグループ.

Subgraph7：チタン製センターディスクの薄さと軽さに関するグループ.

Subgraph8：試乗の準備や試乗したいコースに関するグループ.

Subgraph9：チタン製センターディスクの欠点を述べているグループ.

Subgraph10:チタン製センターディスクを使用することで生じた変化の発言に関するグループ.

以上となった．次に各グループの詳細を述べる.

Subgraph1 では,「思う」「言う」「プレートピア（チタン製センターディスクの商品名)」「ディスク」「使う」「変わる」などの発言が多く含まれていた．具体的な内容を KWIC 検索の一例で示す.なお会話の後にある（　）はスノーボーダーとレベルを表している.「正直,使うまではこのディスクだけで滑りが変わるとは思ってもいませんでした（A：上級)」,「夕方でバーンがボコボコなんですよ.でも跳ねさせられちゃう感じが弱い.本当だったらもっとバタバタってバタつかされて崩されると思うんですけれどもその感覚が弱い(D:上級)」,「正直言って僕も悔しい,こんなにも変わるとは思ってもいなかった（E：上級)」,「チタン製センターディスクを履いた時に感じます気のせいかと思った.足の裏と雪面が近く,地べた感が凄いなと思った.（F：中級)」などが一例である．チタン製センターディスクを使用することで生じた変化の内容は対象者により様々ではあるが，上級者・中級者ともにその変化を感じ取ることはできると思われる.

Subgraph2 では,「トーション」「カービングターン」「感じる」「エッジ」「動き」などの発言が多く含まれていた．このグループは Subgraph1 で示したチタン製センターディスクを使うことで生じた変化の中で，滑りの技術に関する発言のグループといえる．その理由は Subgraph2 のトーションと

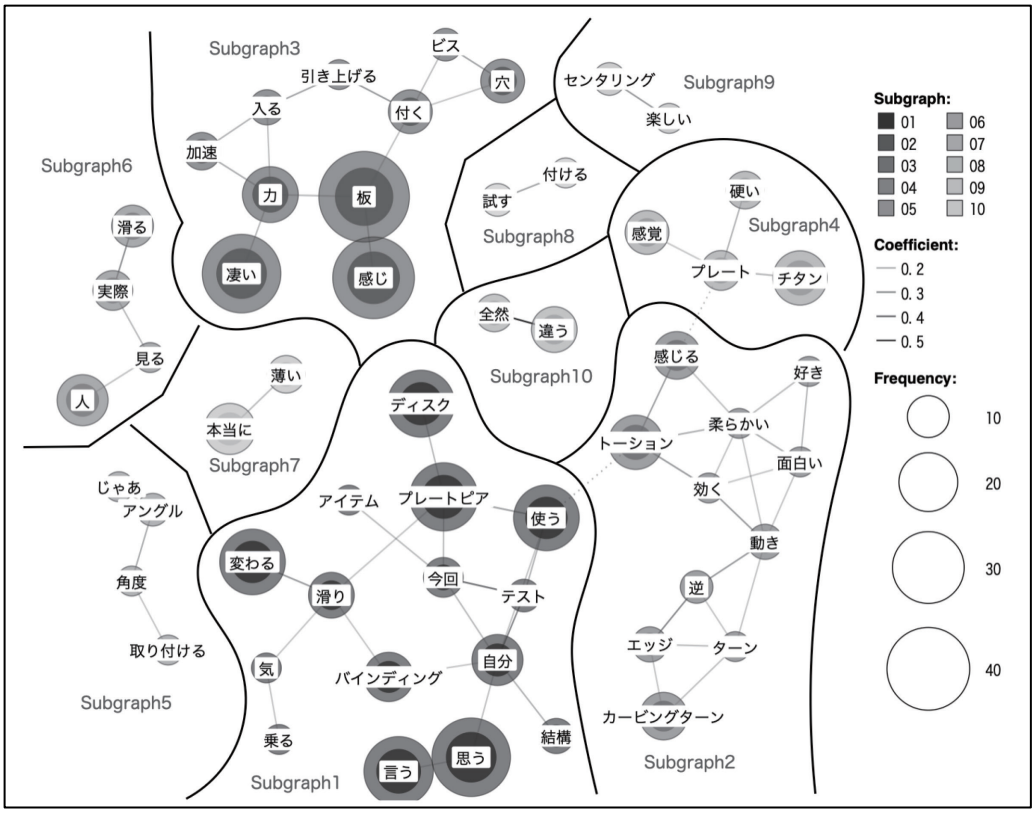


図 2. 共起ネットワーク（語と語分析：全体）

＊図中の囲み線は研究者が追記

Subgraph1 使うが点線で結ばれており，この意味はトーションという語が Subgraph1 に弱いながらも関連性があると推測されるからである[37,39]．なおトーションとは本来は板を捻ったときの剛性・強度のことを指すものであるが，スノーボードでは内力で板を捻る（操作）という意味でも使われている[42]．本研究ではトーションを内力で板を捻る（操作）の意味において解釈する．

具体的な内容を KWIC 検索の一例で示す,「板のトーションを必要とする滑りはなんでも上達するような気がする．ターンの動きにも向いている，そしてキッカーであればキッカーの踏切の時にグッとトーションを使って足場を作ってスピンをしていく，ジブ（注：ジビング．JIBING．人工物を利用した自由な遊びの意味）であればレール，ボックスに乗った時にトーションを使って逆エッジにならないようにするなどそういったトーションを使うスノーボードの滑りであればなんでも上達できると思う（A：上級)」,「板を捻るのがあまりにも簡単すぎる.柔らかく感じているというよりは，深く曲げ過ぎてしまう感覚．凄くトーションが掛かる（E：上級)」,「チタンプレートを付けている状態と外した状態でカービングターンをすると明らかに違う（C:上級)」,「少し柔らかいバーンですけれども硬かったらスペシャルなカービングターンができそうな感じがする（F:中級)」が一例である．Subgraph2 の概要を述べると，チタン製センターディスクを使うことにより板を捻る（トーション)ことが容易に行えるようになる.その結果，グラウンドトリックやジビングの際に板のエッジを効果的に使ったり逆に解放したりすることが容易になったり，テクニカル系ではズレの少ないカービングターンが行いやすくなると考えられる．指導教程や指導書などでも，ボックスでのライディングにおいてエッジを使うことは転倒のリスクにつながるので[43]エッジが掛かりそうな時は解

放することが必要であることや，テクニカル系のカービングターンを行なう上でも内力によりトーションを使うことは有用とされている[42,44]．

Subgraph3 では，「板」「感じ」「凄い」「力（ちから）」「付く」「加速」などの発言が多く含まれていた．このグループの力と付くに関しては出現回数が板，感じ，凄いよりは低いが 4 つの語と結びついており特徴語であると考えられる[36]．次に特徴語を中心に KWIC 検索を行なったので一例を示す．まず力に関する例であるが「センターディスクが硬いので板，軽い力で板を捻るトーションを凄く使いやすい．またセンターディスクが歪まないので実際に力をグッと伝えている感覚があるのでカービングターンで踏んでいる時もしっかり乗れているな，エッジグリップ力があるなと感じた（A：上級)」，「板をちょっと持ち上げただけで力の伝わり方全然違う（E：上級)」，「慣れれば勢い余って転倒した力を，体を回転させる力に変えることができる（G：中級)」，「少ない力で加速ができる（H：中級)」などであった．次に付くに関する例であるが「板が付いてくる．上に引き上げるのが軽くなった感じ（A：上級)」，「なんだろう？板が雪面に吸い付いている．上手く表現できない（E：上級)」，「両足をつけたのですけれども，なんか俺吸い付くような気もします(F:中級)」，「ビスと板が直にくっ付いているこの薄さで．本当に動かしやすい（G：中級)」などが一例である．加速に関しては「本当に加速しやすいです(H:中級)」などであった．また力と加速が両方使われていた発言に「板から力が逃げないので減速せずに，どんどん加速する（B：上級)」があった．以上 Subgraph3 は特徴語である力に関連しており，軽い力でトーションが可能，ノーマルセンターディスクよりも力が板に伝わる，操作がし易いなどスノーボーダー自身の内力を板に容易且つ正確に伝えられることが述べられている．また後述するが Subgraph4 には同じスノーボーダーの発言で元のセンターディスクに戻したら加速しなくなったという発言もあり，チタン製センターディスクの力を伝える性能が高いことが推察できる．

Subgraph4 は Subgraph3 と類似している内容であり，発言は「チタン」「感覚」「プレート」「硬い」の 4 つが含まれていた．KWIC 検索の一例は「プレートが歪まないので，伝えている感覚がある（A：上級)」，「自分のセンターディスクに戻したら、加速が全く無かった．最後に自分の（センター）ディスクに交換して滑ったがプレート全体が(沈黙)結構イライラした（H：中級)」などであった．プレートとはベースプレートのことでチタン製センターディスクに変えるとベースプレート全体の硬さの感覚も変化することが推測される．また Subgraph4 の「プレート」が点線で Subgraph2 の「感じる」と繋がっており，関係性を KWIC 検索から検討したが Subgraph1「使う」と Subgraph2「トーション」との関係性のように特徴的で意味のある関係性を見出すことはできなかった。

Subgraph5 では，「アングル」「じゃあ」「角度」「取り付ける」の 4 つが含まれていた．KWIC 検索の一例は「酷評できる点はアングル角度です，アングル角度の調整が難しかった．あとはメリットしか見つからなかった（D：上級)」，「取り付ける上でアングル角度が分かりにくい（E：上級)」などである．このグループはチタン製センターディスクを取り付ける際の困難さに関するグループといえ，チタン製ディスクの短所を表している．取り付けが困難な理由として，研究対象者がチタン製センターディスクを試乗した時はまだ試作品であったため通常センターディスクについている，アングル角度を調整する目盛りがない状態であった，そのためにこのような結果になったと考えられる．

Subgraph6 は，「人」「滑る」「実際」「見る」の 4 つが含まれていた．このグループはチタン製センターディスクを勧めたいレベルやスタイルについて述べられている.具体的な発言内容を KWIC 検索の一例で示すと「例えばグラウンドトリックをやっていると，稀にノーマルディスクが割れる人がいます．何故かというと物凄い力で板を引き上げたり，捻ったりする動作を何回も繰り返すからです．パワフルな人はディスクが陥没して割れることがあります，そのような経験のある人はこのディスクは良いと思う.(A：上級)」、「板に取り付ける穴が 4 ヶ所固定式なのでセンタリングができない．センタリングは必要ないという人やスノーボードを快適に滑りたい，少しでも上達したい人に

はお勧めです（D：上級)」,「パークを滑っている人は使った方が絶対有利です．中級以下の方でも違いが実感できる人は実感できると思う(E:上級)」などの発言であった．

Subgraph7 では,「本当に」「薄い」が含まれており，チタン製センターディスクの薄さと軽さに関係するグループである．KWIC 検索の一例は,「チタンにするって、薄くて軽いの（A：上級)」,「もう本当に薄い(E:上級)」,「ディスクが薄くなり，ジャンプとかしたら足が痛かなと不安です．(F：中級)」などチタン製センターディスクの薄さと軽さが傑出している内容であった．

Subgraph8 は「試す」「付ける」が含まれている内容で試乗に関する内容であった．KWIC 検索の一例は「大きなバーンでより踏んでみて試してみたい（B：上級)」,「みんなに絶対試してもらいたい（D：上級)」などである．

Subgraph9 は「センタリング」「楽しい」が含まれた内容で，Subgraph5 と類似したチタン製センターディスクの短所に関する内容であった．KWIC 検索の一例は「ビス穴がもう固定なので，センタリングをするためのバインディングを前後にずらす機能が付いていない．(A：上級)」、「センタリングができると絶対買です（H：中級)」などチタン製センターディスクの欠点に関するグループである．チタン製センターディスクは通常のディスクと異なり（図１）板に取り付ける４つの穴が固定式である．そのために板に取り付けたバインディングを前後に調整するセンタリングが出来ない．センタリングとはブーツの中心とスノーボードの横幅を調整する[3),45)]ことである．センタリングの調整を行うことでヒールターン中に踵が雪面に接触するドラグ（drag）を防止したり，爪先・踵からエッジまでの距離を調整したりすることでトウサイド・ヒールサイドのターン中に適切なエッジングが可能となる．

Subgraph10 は「違う」「全然」が出現しており,Subgraph1 と同様にチタン製センターディスクを使用することで生じた変化に関係するグループである.Subgraph10 の特徴は Coefficient（Jaccard 係数：0.54）が図２の中で最も強い結びつきとなっている（濃い線）.具体的な発言内容を KWIC 検索の一例は「持った感じは元々の既存ディスクと比べて然軽さが全然違う．後で測ってみようかなと思うが重さがまず軽い(A:上級)」,「両足付けたのだが違う．板と一体感が増した気がする．凄い，全然違う（D：上級)」,「ディスクを変えたら滑りが変わるなんて想像できない．でも履いて板をちょっと持ち上げただけで全然力の加わり方が違う（E：上級)」,「滑りが全然違う．道具で変わる（H：中級)」などである．

2) レベル別分析：語と外部変数見出し分析（図３）

次に上級と中級,両レベルにおけるチタン製センターディスクの有効性を検討するために，スノーボーダーのレベルを外部変数として共起ネットワークの「語–外部変数・見出し」分析を行なった．分析の設定は最小出現数５，最小文書数１，共起関係の種類「語と外部変数見出し」，描写する共起関係の描写を Jaccard 係数により上位 60，語と語を結ぶ線は「強い共起関係ほど濃い線に」の設定にて分析を行った．

上級者と中級者の異なり及び共通して強い結びつきの語を図３に示した．まず両レベルに共通して結びつきの強い語は「板」「感じ」「思う」「言う」「良い」などであった．上級者に強い結びつきの語は「使う」「プレートピア（チタン製センターディスクの商品名)」「トーション」「カービングターン」「バインディング」などで，中級者は「本当に」「加速」「結構」「薄い」「低い」などの語と結びつきが強かった.なおこれらの語に対して KWIC 検索を使い元の文脈でどのように使用されているのかを確認して，スノーボードの技術に関連する語を抽出した．

まず両レベルに共通していたスノーボードの技術に関する語は「力」であった．全体分析の Subgraph3 で述べたようにチタン製センターディスクを使うことによりノーマルディスクよりも力（荷重）を確実に板に伝えることが可能となる．その結果トーションが使いやすくなったり，板を確実に撓ませたりすることが可能となり，中級者の加速や上級者のトーション及びカービングターンの発言につながったと推測される．

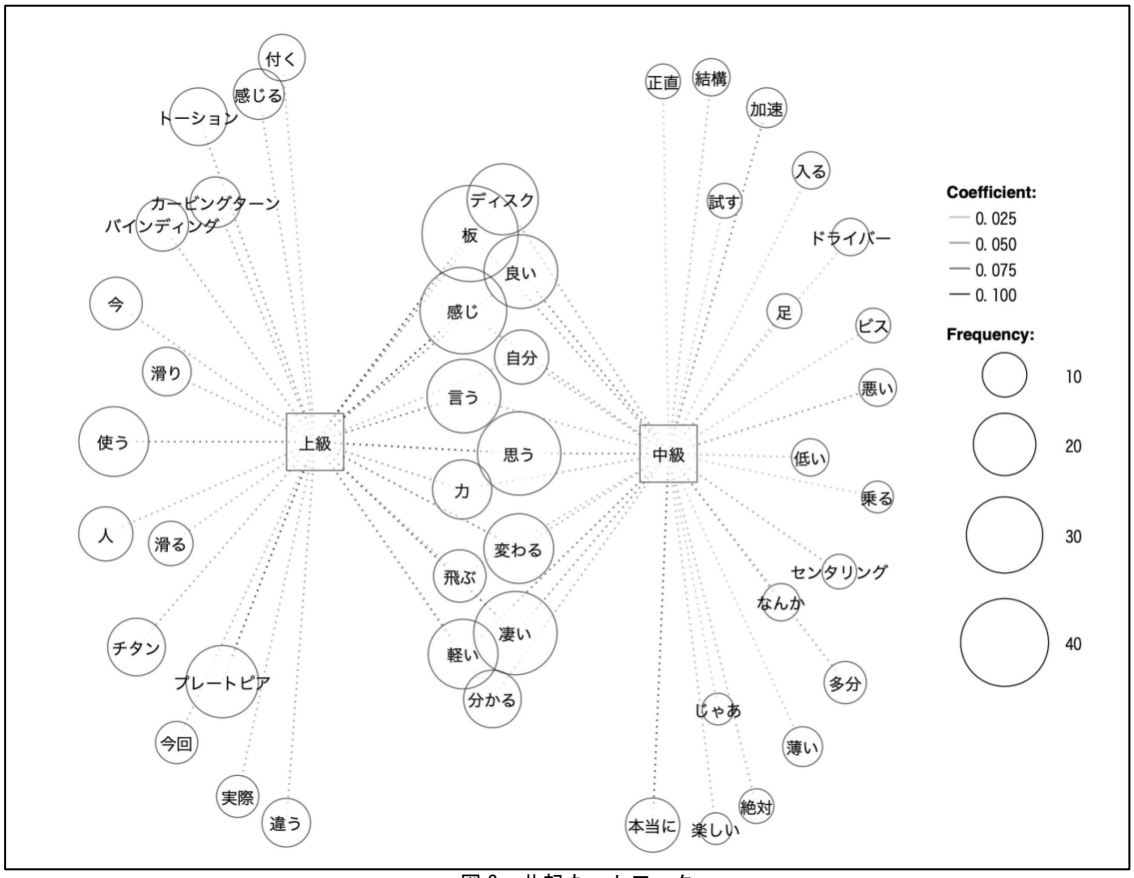


図 3. 共起ネットワーク
（語と外部変数見出し：レベル別）

中級者の「加速」であるが，加速は上級者が具備している技術要素の一つであり中級者が習得しなければならない技術の一つである．その理由は，JSBA では 1 級検定のフリーライディングの着眼点に「斜面状況にあったボードコントロール，流れの良い運動と滑走」があり，A 級・B 級インストラクター検定にも「コントロールされたスピード」という項目がある[46]．すなわち減速は減点の対象となり，外力（重力，遠心力，雪面抗力，摩擦抵抗，空気抵抗，地形変化）が影響する状況下で速度維持や減速した場合には加速しなくてはならない場面も生じる．また SAJ の日本スノーボード教程では採点競技であるハーフパイプの採点方法として「回転数が高く，ジャンプが高いほど採点は上がる」[47]としておりパイプ内で加速させることがポイントとなる．中級レベルのスノーボーダーHはハーフパイプを主なスタイルとしているので「加速する」ことに対して印象を持ったと推測される（Subgraph3 を参照）．このことから中級者がチタン製センターディスクを使用することで加速感を体験できると共に，ターンの山周りや落下での加速方法や板への荷重方法などを理解することが可能となり，加速の技術を習得するための補助となることが考えられる．

次に上級者の「トーション」「カービングターン」について述べる．先ずトーションに関しては、グラウンドトリックやカービングターンを行う際に先行動作として行われる．具体的にはスピンを行う際の足場固めであったり，カービングターンではソールがフラットな状態から角付へ移行する際，トーションを使い前足のエッジから雪面を捉えたりするものである．次にカービングターンに関し

ては前述のトーションを効果的に使えるようになると共に，Subgraph3 の「ノーマルディスクよりも力が板に伝わる」にあるように板のフレックス（柔らかさ、撓り）を効果的に利用できるようになることが窺える．上級者においてトーションが活用しやすくなるチタン製センターディスクを使用することはスキルアップに有効であると考えられる.その理由は JSBA スノーボード教程の上級者に「上級者になるとさまざまな技術の習得と熟練が必要になりますが，劇的なレベルアップが見込めなくなってくる段階です。実際の滑走だけではなく，視覚や理論も併用して技術習得の補助が必要」[48]と記載されているからである．このことは様々な方法でスキルアップを図ることが必要であり，チタン製センターディスクを補助具として使うことで上級者においてもスキルアップが行える可能性が示唆された.

Ⅴ．まとめ

本研究は新たに開発したフリースタイル用チタン製センターディスクの技術習得補助具としての有効性を検討した．方法はスノーボーダーが試乗し SNS 上で公開している映像に対して KH Coder3 を用いて計量テキスト分析を行い，共起ネットワークの「語と語分析」と「語と外部変数見出し分析」を行った．語と語の分析からは滑りや技術に関する内容と共に，勧めるべき対象や取り付け時の短所などに関する内容が抽出された．一方，語と外部変数見出し分析ではスノーボードの技術を中心とした内容が抽出された．具体的には「語と語分析」では 10 の Subgraph が出現し，Subgraph1 から 3 はディスクを使用したことにより生じた変化に関するもので，1 は感覚の変化，2 は滑りの変化，3 はスノーボーダーの内力の変化に関するものであった．また Subgraph4 は素材，Subgraph5 はディスク装着の困難さ，Subgraph6 は勧めるべき対象，Subgraph7 は薄さと軽さ，Subgraph8 は試乗，Subgraph9 はディスクの欠点，Subgraph10 は Subgraph1 と同様に感覚の変化であった.次に「語と外部変数見出し」であるが，レベル間で共通してみられた技術に関する変化は「力」であった．チタン製センターディスクを使用することで力（荷重）を適確に板に伝えられるというものであった．中級者で特徴ある語は「加速」であった．チタン製センターディスクを使用することで加速感を体験できると共に，加速のタイミングや板への荷重方法を理解することが可能となり，技術習得の補助となることが示唆された．上級者で特徴ある語は「トーション」「カービングターン」であった．上級者になると劇的なレベルアップは期待できなくなる．その中において板のトーションを効果的に使うことができること及び質の高いカービングターンが行えることは技術の向上が期待できると考えられる.

以上のことから中級者・上級者においては「力(荷重)」，中級者においては「加速」，上級者においては「トーション」「カービングターン」に関する技術の習得に対して，チタン製センターディスクは補助具として有効的であると考えられた.

Ⅵ．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界であるが,今回は中級者と上級者が対象であるために，初心者・初級者に対する効果は不明である.また本研究は SNS で紹介された 8 本の映像を分析しており編集者の恣意が含まれている可能性がある．そのために研究の信頼性を担保するため SNS や雑誌に対する先行研究[49,50]やプロスポーツチームや裁判事例などの先行研究[51-55],KH Coder の作者である樋口の「計量テキスト分析及び KH Coder の利用と展望」で紹介した応用研究[56]などを踏襲して研究デザインを決定した．今後は初心者・初級者を含めて検討するとともに，使用者の先入観を除外するためにダブル・ブラインド・テスト(double blind test;DBT)的な手法を取り入れることも必要と思われる．また上級者の多くが発言していた「トーション」に関しては運動学的解析や動力学的な解析を行い，スノーボーターが発揮しているトルクやタイミング等を定量的に示して検討する必要性がある.

文献

1) 日本スノーボード協会(2008)JSBA スノーボード教程.株式会社山と渓谷社,pp.6-9.

2) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社, pp.31,pp.43,pp.54,pp.62-63.

3) 日本スノーボード協会(2008)JSBA スノーボード教程.株式会社山と渓谷社,pp.32-33.
4) ヨネックス：
https://www.yonex.co.jp/snowboards/j-quality/
5) オガサカスノーボード：
https://www.ogasaka-snowboard.com/19-20-lineup.html
6) NOVEMBER SNOWMATERIAL：
https://www.novembermfg.com/nov-technology/
7) Union Binding Company Japan：
http://unionbindingcompany.jp/technology/materials_matter.php
8) FLUX：
https://www.flux-bindings.com/jp/products/xv/
9) 日本スノーボード協会(2008)JSBA スノーボード教程.株式会社山と渓谷社,pp.180-185.
10) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社,pp.92-101.
11) 浅井泰詞,菅谷沙由梨(2018) スキーおよびスノーボードにおける障害発生率と障害傾向-縦断的かつ横断的視点からの検討-,スキー研究,
Vol.15,No1,p.61-67.
12) 広瀬圭,土岐仁(2008)スノーボード・ターンの運動解析に関する研究,日本機械学会シンポジウム講演論文集,No08-23.
13) 伏見知何子, 近藤亜希子、千葉遥ほか(2018)スノーボード・オリー動作の運動学的解析に関する研究,スキー研究, Vol.15(No1),pp.1-9.
14) 佐藤稔雄,市野聖治(2010)スノー・ボードの角付の測定,スキー研究,7-1,pp.1-8.
15) 広瀬圭,土岐仁,近藤亜希子 (2013) 実滑走計測によるスノーボード・ターンの運動力学解析に関する研究,日本機械学会論文集,79 巻 800 号,
pp.897-907.
16) 杉本歩基,安井重哉,竹川佳成 (2015) スノーボーダーのためのセンサーデータに基づく技の収集支援システムの提案,エンターテイメントコンピューテイングシンポジウム.
17) 土岐仁,山田知明,長井力ほか(2006)スノーボード・ターンの運動解析に関する研究,日本機械学会論文集 (C 編) ,72 巻 713 号(No.05-0227),
pp.190-196.
18) 土岐仁,山田知明,穂苅真樹ほか(2007)スノーボード・ターンの関節負荷推定の一試み,スポーツ産業学研究,Vol.17(No.1),pp.33-44.
19) 広瀬圭,土岐仁(2010)スノーボード・ターンの運動計測と解析に関する研究,スキー研究,
7-1,pp.27-34.
20) 滝山康彦, 河合茂博, 坂田敏行(2003)スノーボーダー・スノーボードおよび弾性床面より成る連成運動系の強振動解析,日本機械学会東海支部第 52 期総会講演会講演会論文集,
No.033-1,pp.141-142.
21) 安藤伸哉,河合茂博, 細川健治ほか (2003) スノーボードターンに及ぼすスノーボードの機械特性の影響,日本機械学会東海支部第 52 期総会講演会講演会論文集, No.033-1,pp.143-144.
22) 多田憲孝,小林俊市(2004)スキー・スノーボードのための雪面抵抗力の研究～高速切削の場合～,日本機械学会　シンポジウム講演論文集, No.04-26,
pp.270-275.
23) 小田島信央,高柳一重,浅岡照夫(2004)スノーボード板への滑走時負荷の解析に関する研究,人間工学第 40 巻特別号,pp.228-229.
24) 谷口大樹,梶原成祐,内満大輔ほか(2007)スノーボードの振動特性比較,日本機械学会シンポジウム講演論文集, No.07-24,pp.27-30.
25) 細川健治, 坂田敏行(2005)ターン特性を考慮したズノーボードの設計変更に関する研究　(幅および厚さの変更),日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2005 CD・ROM 論文集,
No.05-15.
26) 長島康雄,竹澤稔裕,高瀬博ほか(2019)スポーツ指導者育成の視点からみたスキー・スノーボード実習,関東学園大学紀要,第 28 集,pp.12-19.
27) 竹田唯史,綿谷美沙子,近藤雄一郎ほか(2018)スノーボード選手の体力特性とトレーニングサポート実戦について,北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報,8 巻,pp.61-67.
28) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社,pp.120-125.
29) 中西義孝,笹川友彦,中島雄太ほか (2017) スノーボード用装具の開発,日本機械学会第 30 回バイオエンジニアリング講演会講演論文集.

30) 一般社団法人日本チタン協会
http://www.titan-japan.com
31) 樋口耕一(2014)社会調査のための軽量テキスト分析.ナカニシャ出版.
32) 金明哲(2009)テキストデータの統計学的入門,岩波書房,pp.244.
33) 小池太,小森伸一,山田亮(2018)海洋性レクリエーション活動を中心とした実習体験によって生起されるポジテォイブな感情・認識についての研究：大学生を対象にしたテキストマイニング分析にもとづいて,東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系,70,pp.137-161.
34) いとうたけひこ(2011)批判心理学の方法としてのテキストマイニング,心理科学,第32巻第2号,pp31-41.
35) 樋口耕一(2017)計量テキスト分析および HK Coder の利用状況と展望,社会学評論, 68(3),pp.334-350.
36) 田中信之(2018)初級文法クラスにおける授業引き継ぎ-授業記録の分析を通じて-,富山大学国際機構紀要,1,pp.1-11.
37) Frequently Asked Questions about KH Coder: https://khcoder.net/FAQ.html
38) 樋口耕一(2017)言語研究の分野における KH Coder 活用の可能性,計量国語,31巻1号,pp.36-45.
39) 樋口耕一.KH Coder 掲示板: http://koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?list=
40) 植田恭史(2004)コーチング研究〔III〕 ： 学生アスリートのコーチングにおけるコミュニケーション・スキル.東海大学紀要体育学部,33,pp.29-34.
41) 狩野広之 (1977) 行動と環境そして事象 （Ⅰ）対象の認知,労働科学,53(1),pp.1-11.
42) トーションを制する者がターンを制する：BACKSIDE「雪山への一歩」「生活向上の一歩」を後押しするスノーボード・ウェブマガジン：2016.08.18：https://backside.jp/howto-015/
43) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社,pp.82.
44) 青木玲(2018)THE 座学 青木玲カービング講習会教本,POTENTIAL CO.LTD, pp.9.
45) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社,pp.22.
46) 日本スノーボード協会(2008)JSBA スノーボード教程.株式会社山と渓谷社,pp.9-13(巻末 OFFICIAL HAND BOOK).
47) 公益財団法人全日本スキー連盟(2018)TOTAL SNOWBOARDING.株式会社山と渓谷社,pp.48.
48) 日本スノーボード協会(2008)JSBA スノーボード教程.株式会社山と渓谷社,pp.166.
49) 上ノ原秀晃(2014)2013 年衆議院選挙におけるソーシャルメディア-候補者たちは何を「つぶやいた」のか-,選挙研究〈特集 近年の国政選挙と政党・政治家・有権者の変容〉,30巻2号,pp.116-128.
50) 高史明(2015)レイシズムを解剖する：在日コリアンへの偏見とインターネット,Kindle 版,勁草書房.
51) 堀田秀吾(2010)レジスターから見た裁判官と裁判員の思考体系の差異,法社会学,第72号,pp.147.
52) 樋口耕一,KH Coder: for Quantitative Content Analysis or Text Mining：共起ネットワークにおける、凡例の意味（degree） #176：https://github.com/ko-ichi-h/khcoder/issues/176
53) 田中京子(2013) KH Coder と R を用いたネットワーク分析,久留米大学コンピュータジャーナル,28,pp.37-52.
54) 田邊哲哉,大島純,廣田雅春,石川博,横山昌平(2017)グラフ型データベースを用いたアクティブラーニングにおける会話分析システムの提案,DEIM Forum 2017, F4-3.
55) 大西孝之 (2013) プロスポーツチームの社会的責任:テキストマイニングによる概念モデルの構築,環境と経営,第19巻第2号,pp.1-20.
56) 樋口耕一(2017)計量テキスト分析及び KH Coder の利用と展望,社会学評論,68(3),pp.334-350.

［研究資料］

海外研修航海の意義
―価値ある教育プログラムとして―

吉原　さちえ*1

Significance of Overseas Educational Cruise
―As a valuable educational program―

by

Sachie Yoshihara

Abstract

In order to explain the significance of overseas educational cruise that has continued for half a century, the purpose of this study was to find out its value after organizing the uniqueness and immutableness parts of the educational program. There are three uniqueness part of overseas educational cruise. The first is the utilization of the marine research and training vessel "Bosei Maru", the second is the experience at sea and on the ground, and the third is the process for implementing an educational program. There are three immutableness parts. The first is two limited training routes, the second is the program content at sea and on the ground, and the third is the number of team officers and the composition. There are three significances of overseas educational cruise. The first is the value of an educational program that includes uniqueness and immutability. The second is that the founding spirit of Tokai University is at the root. The third is that we have continued full-body education since the first, based on the spirit of founding Tokai University. Tokai University founder Shigeyoshi Matsumae's four words, an educational program based on the spirit of founding, reminded us of the significance of overseas educational cruise. I hope that the value will be inherited and enhanced.

Ⅰ．はじめに

東海大学ではユニークな実践教育の場として大学が所有する実習船かつ国際航海旅客船でもある海洋調査研修船「望星丸」で,海外研修航海という独自性を活かした豊かなプログラム実施している.1986年の第1回航海以来,半世紀に渡って一度も途切れることなく歴史と伝統を継承する本研修航海を通じて訪問した地は70箇所にのぼり,航海日数は2306日,研修に参加した学生は4034名,団役員（教職員）は683名である.この航海は学校法

＊1　東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

人東海大学傘下の大学・短大生（第31回からは外国人留学生を含む）が学部学科の枠を越え，船という限られた生活環境に集い，大自然の中で様々なことを学び，各寄港地では現地の大学などと国際交流を実践し，国際的視野を広げる企画を実施している．2019年度第51回目の海外研修航海は，航海半世紀の歴史を踏まえ生涯の理想を求める船旅としての原点に立ち戻り，新たな一歩を踏み出す航海として出航直前まで準備を進めてきた．しかし，世界中で拡がりつつあった新型コロナウィルスにより，第51回海外研修航海は2020年2月10日（出航10日前）にやむなく中止が決定された．50年もの間，海外研修航海が継承されたのは本研修の価値や意義を分かち合う経験者の経験知の賜物である[1]．

そこで本研究の目的は，海外研修航海の教育プログラムとしての独自性と不易性を整理したうえでその価値を見出し，コロナ後の再開に向けて海外研修航海の意義を再明示することである．

研究方法は，主に第51回海外研修航海や松前重義関連資料並びに文献，東海大学ホームページに掲載されている活動記録を参考にし，教育プログラムとしての独自的並びに不易的な部分を整理する．そのうえで，海外研修航海の意義を説くことを試みる．

Ⅱ．教育プログラムとしての独自性

1．海洋調査研修船「望星丸」の使用

東海大学ホームページ海洋調査研修船「望星丸」[2]によれば，海洋調査研修船「望星丸」は，（2,174国際総トン）1962年に日本初開設の海洋学部の海洋実習および調査・観測のほか，学園全体としての海外研修航海，地域社会の青少年に対する海洋思想の普及活動を目的として航行している．大学独自の研究だけでなく，日本の海洋調査船の中でも総合的海洋調査機能をもつ調査船であることから，文部科学省，農林水産省等の各省庁，および大学研究機関より委託研究を受け，海洋に関する国家プロジェクトの調査船として数多くの調査研究を行い，そこで得られたデータは様々な分野で役立てられている．最近では，地球科学的な視点に立つ調査研究も多く行われ，環境問題や資源問題に新たな視野を拓くものとして，内外から高い評価を集めている．

海外研修航海はこの海洋調査研修船「望星丸」を使用し，1986年の第1回航海から2019年の第50回まで南太平洋やアジア諸国を巡りながら，船内の限られた生活環境の中で，教員や仲間との共同生活を通じて協調性を養い，より豊かな人間形成を図り，人間性を培うことを目的としている．本研修の特徴的な独自の教育プログラムの一部分である．

2．洋上と陸上における経験

1）洋上での3つの経験

多くの研修団員（学生と教職員）にとって海外研修航海は初体験である．普段の生活では簡単に飛行機で到着することができる場所にも，望星丸を使用することで何日もの時間をかけて陸上の目的地（寄港地）に辿り着く．

1つ目の経験は，松前[3]によると，全身体活動を通して自然の厳しさと美しさに気づくことである．大海原は時として船舶を引き裂くような荒波を起こし，また風が一切なく揺れを全く感じることない凪を生み出す．どちらも自然の一面であり，それらの環境下で自身や仲間の存在の大きさを肌で感じ，自然と共生することの尊さを己の経験として受け止め，一人の人間として大切なことに気づく．人間の自然に対する責任など，これから地球の中でどのように振舞うべきかなどを真剣に考え，研修中の行動の変化に繋がり，研修後も継続され続ける．

2つ目の経験は，本研修に参加した多くの学生・教職員が海洋調査研修船「望星丸」の内部を知る機会がプログラムの一つとして組まれていることである．具体的には，入港に際しての官庁手続きや船員事務管理などマネジメントを担う事務部について，船の操縦，船体の保守，積み荷の管理を行う甲板部について，食材調達・調理や食材保管場所の倉庫や調理場などを担う調理部ついて，ウェットラボ・ドライラボに分かれた各種観測機器類の管理・使用する観測部について，船を動かす根幹を管理運営する機関部について五感を使って学ぶことができる．

3 つ目の経験は，船内生活である．船内では基本的には規則正しい生活を送る（表 1）．6 時起床に始まり，点呼・体操後は，班ごとに学生食堂，階段，廊下（2nd），シャワー室・トイレ，廊下（Lower），後部甲板の掃除を毎日行う．掃除に関しては，寄港地に入港する際には大掃除が半日かけて実施される．7 時半から朝食，9 時から午前プログラム，昼食，13 時から 16 時半は午後プログラム，17 時から夕食，18 時から 21 時半ごろまでは各種ミーティング，点呼，22 時消灯が 1 日の流れである．比較的余裕があるようにみえるが，実際には行事や研修など学生主体の企画が多く，各自複数兼務していることから日々ミーティングや準備をしている状況である．また気象条件によっては体調不良になることもあり，陸上とは異なる環境で予定通り事が進まないこともある．船内生活は限られた空間で原則 1 部屋 8 人の共同生活送る．研修期間中は仲間と寝食を共にし、友情を育み，人との関わりや生きる知恵を得るために，非効率でありながらも時間をかけて答えを導きだすような努力と考察を重ねる経験をする[3]．日々便利なものに囲まれた陸上での日常生活とは全く異なり，人間味溢れた生活を船内で送る．

表 1：船内の 1 日の生活

時　刻	日　課
6:00	起床
6:30	点呼，体操，掃除
7:30	朝食
9：00～11：00	講座,イベント準備など
11:30	昼食
13：00～15：00	クラブ活動,調査発表など
15：30～16：30	
17:00	夕食
18:00	イベント準備
19:00	担当ごとの打合せ
20:00	班長会議
21:45	点呼
22:00	消灯

2）地上（寄港地）での経験

1986 年の第 1 回航海から 2020 年の第 51 回の航海まで海外研修航海の航路はアジアと南太平洋の 2 航路である．1996 年の第 28 回は世界一周をしている．第 1 回の航路はアジアであったことから，第 51 回は海外研修航海が始まって以来半世紀が過ぎ，原点回帰かつ新たな一歩を踏み出す意味でアジア航路に決定した．アジアと南太平洋航路の大きな違いは，行程の長さである．前者は日本から近距離のところに寄港地が点在しているため，行程日数が比較的短く，寄港地の数は多い．後者は赤道を越えて南太平洋諸国に向かうため，行程日数が長く，寄港地間の移動にも時間がかかり寄港地数は少ない．

地上（寄港地）での経験は第 51 回の研修計画を参考にして解説する（表 2）．

表 2：第 51 回海外研究航海で予定していた地上研修

寄港地		テーマ	研修方法
那覇	沖縄	歴史と文化	グループ別／全体
コタキナバル	マレーシア	自然と文化	全体／選択別／グループ別
バンコク	タイ王国	大学交流と文化	全体／選択別
ダナン	ベトナム社会主義共和国	歴史と文化	グループ別／選択別
基隆	台湾	歴史と文化	全体／グループ別
＜研修方法＞①全体：全学生が同研修を実施　②選択別：希望選択した研修を実施 ③グループ別：グループ別に研修の企画と実際			

第 51 回では東京を出港し横浜に帰港する 38 日間の海外研修航海期間中に合計 5 つの寄港地（4 か国）を巡る予定であった．1 つ目は那覇（沖縄）で，歴史と文化に触れることをテーマとし，少人数のグループや全体での研修予定していた．グループ研修は学生が自ら研修目的を考え行動計画を立て団役員の指導と確認の上で実施される．全体研修はあらかじめ研修団として考案したプログラムである．2 つ目はコタキナバル（マレーシア）で，自然と文化をテーマとし，全体，選択別，グループ別での 3 つのタイプの研修を予定していた．コタキナバルでは比較的時間の余裕が取れたことと研修生が自ら行動できる範囲の治安が良好であることから，地上での研修スタイルの幅を拡げることを試みた．選択別研修は，その中で複数のプログラム（2-3 つ）を用意し，研修生が事前に選択し参加する仕組みである．3 つ目はバンコク（タイ王国）で，大学交流と文化がテーマであった．大学交流は東海大学がアジア諸国における国際貢献の象徴とする一つのタイ王国・モンクット王ラバカン工科大学（以下，KMITL と略す．）で日本語を学ぶ学生との交流を予定していた．前学長の髙野教授[4]は，東海大学は大学が果たすべき使命として当時（2011），「教育」「研究」「社会貢献」に加え，「国際貢献」を明確に掲げ，アジア諸国をはじめ諸外国に向けて積極的な学術支援の取り組みを，国際交流・国際貢献を通して世界で活躍できる教養人を育成していくことが求められていることに照し合せて説明した．さらに，この考えは創設者・松前重義博士が掲げた建学の精神に通じるものとし，「松前博士は，建学当初から『他分野を理解し，他分野

の人たちと協働できる能力が大切だ』と説いていたこと挙げ,自分自身と違うものを受け入れるということは,まさに国際交流の基本である」と述べていた.海外研修航海の教育プログラムにも 2011 年の数年前から留学生も参加できるようになった.東海大学と KMITL の交流は長い歴史があり,1965 年に KMITL の前身であるノンタブリ電気通信大学の卒業生を編入学生とし別科日本語研修課程,工学部通信工学科に受け入れたことに始まる.その後 KMITL とは国際貢献から発展し,学術協定協力を結び幅広い学術交流を展開している [4).歴史的・学術的・人材的繋がりの深い KMITL との大学交流は第 51 回の中心的な地上（寄港地）研修の一つであった.4 つ目はダナン（ベトナム社会主義共和国）,5 つ目は基隆（台湾）で,歴史と文化をテーマに掲げいずれの寄港地でも 2 つのタイプの研修を予定していた.両寄港地ともに東海大学の同窓会（ダナンは 2020 年に設立）があり,多くの卒業生が活躍している.とくに台湾に関しては歴史的に親日国であるため,治安も良く,公共交通機関も日本のシステムを取り入れ充実していることから,第 51 回の最終寄港地における研修学生に対する主体的な教育プログラムとしてグループ別研修を考えていた.

地上（寄港地）での経験は第 51 回の寄港地研修を例に挙げた.いずれの寄港地でも学生の主体性を意識し,教育要素を含む経験ができる研修を用意していた.

3. 教育プログラム実施に向けたプロセス

第 40 回以降,教育プログラムの基本的な枠組みは,航路が南太平洋でもアジアでも大きく変わらない.しかし,学生と団役員は毎回異なる顔ぶれになる.そのため教育プログラムを遂行するにあたってのプロセスは各回で新たに練り直し構築している.構築方法は各々異なり,舵取り役は団役員の中で副団長という役職に就いた教員が概ね務める.例えば,副団長がプロセスの枠組みを決め,内容を団役員が考える場合もあれば,プロセスも内容も副団長を中心としながら全団役員が役割分担しながら決定する場合もある.両者にはそれぞれにメリットとデメリットがある.前者のメリットは短時間で決定事項が生み出せる一方,デメリットは副団長の負担が他の団役員よりも非常に大きくなる傾向が強い.後者のメリットは全団役員が共通理解のもと役割を分担しながらプロセスを歩みことで情報共有がしやすい一方,デメリットは副団長以外の団役員も通常の授業や業務以外に本研修に対し研修以前から多くの時間を割いて協力してもらう必要がある.第 51 回は後者の方法を取り,教育プログラム実施に向けて全団役員でプロセスを歩む方法を選択した.その結果, 本研修が本格的に始まる以前に団役員間では情報共有だけでなく相互理解も深めることができ,研修団の中での他者承認が各々の意識向上に繋げられた. また第 51 回は 1986 年の第 1 回から半世紀の歴史を歩み続けた海外研修航海の新たな一歩として,「原点に戻る」「新たな第一歩」[5),「歴史を踏まえ,歴史を作る」[6) という言葉を念頭に置き本研修直前までプロセスを積み重ねてきた.

Ⅲ. 教育プログラムとしての不易性

1. 研修航路

海外研修航海の航路はアジアと南太平洋の 2 つである（表 3）.

表 3：海外研修航海の航路と航海回数

航路	回数	備考（内訳）
アジア	9回	第1回,2回,5回,15回,19回,25回,45回,46回,51回
南太平洋	41回	アジア航路の回と第28回を除くそれ以外の回
		第50回は記念回として航路と空路
世界一周	1回	第28回

全 51 回の海外研修航海のうち,アジア航路は 9 回,南太平洋航路は 41 回,世界一周は 1 回（1996 年,第 28 回）である.研修航路は,南太平洋航路が全体の 4 分の 3 を,アジア航路が 4 分の 1 を占めている.第 1 回と第 51 回のコースである（表 4）.

表 4：第 1 回と第 51 回のコース

回	コース
第1回	東京－那覇－基隆－香港－バンコク－マニラ－父島－東京
第51回	東京－那覇－コタキナバル－バンコク－ダナン－基隆－横浜

コースを比べると,重なる寄港地が那覇,基隆,バンコクと寄港地の半数を占める。選択された寄港地を見ても第 51 回は第 1 回の歴史を踏まえて,新たな一歩としての歴史を創るためにふさわしい寄港地研修が計画されていた.海外研修航海を 50 年の間一度も途切れることなく継続し,航路を 2 つに限定し積み上げてきた研修諸国との関係は,

言うまでもなく教育プログラムの「変わらない」良さから生み出される「継続－繋がり－信頼」を築く一側面である.

2. プログラム内容

1）洋上プログラム

研修学生が自ら企画運営する洋上プログラムは,大きく研修と行事に分けられる（表5）.

表5：洋上プログラム（研修と行事）の内容（第51回）

項目		内容
研修	洋上講座	団役員及び望星丸士官による専門分野（全13回）
	外国語講座	ネイティブ団役員による実践英語（全8回）
	一次救命処置	医師・看護師団役員による救命救急
	調査	寄港地（歴史・自然・文化）と航海（望星丸・船内業務）
行事	スポーツ大会・大学交流 洋上卒業式・卒業生を送る会・Farewell Party・その他	
	クラブ	English&Fishing・韓国文化・シネマ＆カフェ・音楽 Bosei Memory・女子力アップ・トレーニング＆海洋観測・球技 かるた＆テーブルゲーム・洋上オリンピック＆パラリンピック

研修は,幅広い教養と基礎知識を身に付けるための多岐な分野に渡る洋上講座,英語コミュニケーション力を磨く語学講座,救命救急,調査（寄港と船内)が設けられている.これらの中で寄港地調査は地上プログラムの寄港地研修を充実させるために,学生自身が事前調査・実際（研修）・事後報告という一連のプロセスを通じた学びがある.行事は,スポーツ大会,大学交流,洋上卒業式,卒業生を送る会,Farewell Party とクラブ活動がある.いずれも学生が主体で企画・運営する.

洋上での活動は,出航前に事前に企画内容を凡そ決定し,必要な道具や材料を限られた予算の中で揃え,荷積みを行う必要がある.実施直前の最終打ち合わせや予行練習などは船上活動になることから出航前の準備が非常に重要である.船上では気象条件により日程や実施場所の変更に臨機応変に対応する場面がしばしばある.

2）地上（寄港地）プログラム

地上プログラムは寄港地研修と大学交流の2つである.まず寄港地研修は地上（寄港地）での経験（Ⅱ.2-2)）で先述したが,研修方法は全体・選択別・グループ別の3つのタイプがある.そのうち全体は全研修学生が同じ内容で研修するのに対し,選択別は3-4の選択肢があるため研修内容に違いが生じる.グループ別研修は 5-6 人の少人数で自由に計画を立て行動するため多様な研修内容が展開される.第51回を例にすると,表2のように寄港地が沖縄・コタキナバル（マレーシア)・バンコク（タイ王国)・ダナン(ベトナム社会主義共和国)・基隆（台湾）の5つあり,テーマに歴史・自然・文化を示したように寄港地には世界遺産が多く,民族の歴史や文化,自然環境に直接触れることで各々が人間を取り巻く環境に対して考察し,思考の幅を広げることに繋がることを期待していた.さらに学生が多面的に物事を捉えるために,寄港地調査では,寄港地の数に合わせたグループを編成し,自ら調べ発表することを通して,より深く考察するきっかけを各自持つことができる時間を用意した.その目的は寄港地研修を充実したものにするために,各寄港地について詳細な調査を事前に出航前と船上で行い,発表を通して研修団全体で共有し理解を深めることができることである[7].具体的な内容は自然環境・歴史・文化・観光地・産業・信仰や宗教・その他国によって異なる政治・経済・社会について多面的な観点から詳細に調査する.自然であれば動植物や気候を,文化であれば戦争（沖縄戦やベトナム戦争）も含む一側面ではなく包括的に捉え文献・各種資料・インターネットを駆使して情報収集し整理する[7].発表は発言者にとっては聴講者がいることで分かりやすく伝達するための工夫を凝らすことで,自身での深い理解へと繋がる.聴講者は自らの思考に留まらず新たな発見や気づき,興味関心の広がりが促される.寄港地調査から得られた知識や考察は,実際の研修で人類普遍の課題へと考察が広まり,前学長髙野教授[4]による「これからの時代の国際交流は,日ごろからともに学び,ともに働く,すなわち“協働”でなければならい」という意味に非常に近い部分で研修ができ,グローバルな視点を培う一役を担っている.また PDCA サイクルを活かし事後報告を様々な発表形式で行うことで振り返りと改善点が見つかり,次の寄港地調査の内容や発表に繋がる相乗効果が得られる.地上プログラムの一つの寄港地研修は事前調査や事後報告と連動し,プロセスを踏むことでより有意義な学びの機会となる.

次に大学交流はアジア航路の場合は特に東海

大学にとってもアジア地域にある大学と数多くの協定を結ぶ中で,タイ王国・モンクット王ラバカン工科大学（KMITL）は地上（寄港地）での経験（Ⅱ.2-2)）で先述した通り,1965年から前身大学からの留学生が東海大学に入学した時以来長い歴史を共に歩み築き上げてきた絆と信頼を背景に持つ中で第51回はその歴史の1ページに足跡を残す機会であった[4)6)].次の時代における世界経済の牽引役としての動向が国際的にも注目されるASEAN 諸国を始めとしたアジア諸地域であり，その中で若者同士の交流や,多様な歴史・自然や文化を持つアジア諸国での国際交流は極めて大きな意味を持つとともに大きなチャンスと位置付けていた[3)].

3. 団役員数と団役員構成

第40回から第51回までの団役員数と団役員の構成である（表6）.

表6：団役員数と団役員構成（第40回以降）

回		第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回	第51回
団役員数		15	14	14	14	14	14	13	13	13	14	14	15
内訳	団長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	副団長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	医師	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	看護師	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	教員	7	6	6	7	9	7	6	6	6	7	7	7
	職員	3	3	3	2	0	2	2	2	2	2	2	2

団役員数は第40回が15名,第41回から第45回は14名,第46回から第48回が13名,第49回と50回が14名,第51回は15名である.団役員の構成は団長と副団長が各1名,医師が2名(航海日数の半分で入替えのため,前後半1名の配置）,看護師1または2名(第51回は医師と同様に前後半入替えのため各1名）,教員が6-7名,職員が2-3名である.医師と看護師を除いた団役員(団長と副団長を含む）は7キャンパスと1フィールドに広がる大学19学部と短大から万遍なく選出されたため,多岐に渡る分野から団役員が構成される.各団役員は個人としても異なる背景を持つため,例えば洋上プログラム中の洋上講座は,多彩な魅力的かつユニークな内容に溢れている.団役員数と団役員の構成は過去十数年ほとんど変わらない.医師と看護師が研修を通して帯同していることは海外研修航海にとって安全を確保する上で最も不可欠である.各回の選出された団役員の顔ぶれにより,唯一無二な団役員のイメージが作られる.

Ⅳ. 海外研修航海の意義

1. 教育プログラムとしての価値

海外研修航海の教育プログラムとしての独自性と不易性に着目しこれまで述べてきた.独自性には海洋調査研修船「望星丸」の使用,洋上と陸上における経験(洋上での3つの経験,地上(寄港地）での経験）を,不易性には研修航路,プログラム内容（洋上プログラム,地上（寄港地）プログラム）,団役員数と団役員構成を挙げた.教育プログラムにおける独自性は私立大学としての東海大学の価値を高め,不易性は東海大学の歴史,信頼と誇りを築き上げ,アジア諸地域並びに南太平洋諸国での価値を生み出している.

2. 東海大学の建学の精神

海外研修航海は東海大学の創立者松前重義が掲げた四つの言葉を踏まえた教育プログラムである.松前重義は自らの人生の中で,内村鑑三と出会い彼の思想に深く感銘を受け,また敗戦後の国の復興を教育によって成し遂げた近代デンマークの歩みに心打たれ,「国造りの基礎は教育にあり,教育を基盤としてより良き社会として平和国家を築こう」と決意したとされ,デンマークの国民高等学校の教育を模範としながら東海大学の原点となる「望星学塾」を開設し,四つの言葉を掲げた[8)9)10)].

若き日に汝の思想を培え
若き日に汝の体躯を養え
若い日に汝の智能を磨け
若き日に汝の希望を星につなげ

これらの言葉は東海大学の建学の精神であり,変わることのない一貫した東海大学の教育の方針である[11)].人道主義,人格主義に基づく正しいものの考え方,見方を確立させる思想教育が極めて大事とし,身体を鍛え,知能を磨くとともに,人間・社会・自然・歴史・世界等に対する幅広い視野と思考力,一人ひとりが人生の基盤となる思想を培い,心を通い合わせることができる豊かな心を持ち,人生の意義について共に考えつつ将来という希望の星に向かって生きていこうと語りかけている[11)12)13)14)].東海大学は創立者の精神を受

け継ぎ,明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性を持った人材を育てることで「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ,現在も歩み続けている[14)15)16)].また国の行方も人類の将来も,これに携わる人間の思想に左右されることを身をもって体験した松前重義は,兼ねてから目指していた「思想を培う教育、文科系と理科系の相互理解をめざした教育」を東海大学のなかで実践した[17)18)].お互いに理解し合える要素を学生時代に養うこと,つまりは互いがそれぞれの立場を尊重し合って手を握り,前進してゆく態勢がつくれれば,日本という国の発展が助長されると考え,大学の方針に入れたのである[17)].松前重義が教育に託したものは,人類の幸福と平和の実現に向かって,明日の歴史づくりを担う人材の育成であった.松前重義が生きた当時も今も現代社会の変化は激しく,私たち人類の未来にも様々な難問が横たわっているからこそ,高い理想をもって未来をみつめていくことが,いま私たちに最も求められているという意味が「希望を星につなぐ」に込められている[19)20)21)22)].

3. 海外研修航海と建学の精神

海外研修航海のねらいは東海大学の海洋調査研修船「望星丸」と使用して海外の諸国を訪問し,多様な自然や文化に触れることで,国際的な視野を獲得し,実体験に基づく世界観と人生観の確立を目指している.また船内という限られた空間と環境の中での共同生活を通して,豊かな人間形成を図ることであるとする[23)].これらは創設者の松前重義が掲げた四つの言葉,「建学の精神」に合致している.第51回海外研修航海は2019年12月から世界中に一気に広がった新型コロナウィルスの感染が原因で,2020年2月に中止を決定した.1年が過ぎようとする今も第3波というこれまでに経験のしたことのない感染者拡大に直面している.まさに目まぐるしく変化する社会の中でどんなに時を経ても変わらない普遍的な存在としての海外研修航海は,若者が兼ね備えている無限の可能性を信じ,高い理想を持ち歩み続けることの価値を踏まえ,半世紀に渡って一度も途切れることなく継続してきた.その歩みは「希望を星につなぐ」に込められた意味を十分に踏まえて体現してきた証である[5)].このように海外研修航海は建学の精神として受け継いできた創設者の意志を引き受け,歴史を積み重ねてきた.

Ⅴ. まとめ

本研究では半世紀に渡って継続してきた海外研修航海の意義を説くために,教育プログラムとしての独自性と不易性を整理したうえでその価値を見出すことを目的とした.

海外研修航海の独自性は3つある.1つ目は海洋調査研修船「望星丸」に乗船し,船内の限られた生活環境の中で共同生活や寄港地での研修など非日常性を有していることである.2 つ目は洋上と地上の経験である.洋上では全身体活動を通して自然の厳しさと美しさに気づくこと,海洋調査研修船「望星丸」の内部を知る機会がプログラムの一つとして組まれていること,規則正しい船内生活を送ることの3つである. 地上ではアジア諸国と南太平洋諸国ともに東海大学と繋がりを重視し教育要素の含む寄港地研修を用意していることである.3 つ目は教育プログラムの実施に向けたプロセスにメリットとデメリットがあり,かつ各回の団役員の構成メンバーによって遂行方法が異なることである.海外研修航海の不易性は 3 つある.1つ目は研修航路がアジアと南太平洋の2つの航路に限定されていることである.研修諸国とは将来性のある国際交流・国際関係を築いている.2つ目は洋上と地上におけるプログラム内容である.洋上プログラムは研修と行事があり,学生にとって新しい知識や興味関心が持てる講義や,学生の主体性を生かした準備・企画・運営できる内容がある.地上プログラムは寄港地での研修に留めるのではなくPDCAサイクルを活用し,事前調査や事後報告をすることで全体でより理解を深め,研修中を通して評価・改善をすることを意識している.3つ目は団役員数と団役員構成である. 団役員数は15 名前後であり,医師と看護師が研修中随時帯同し,教職員は全学19学部と短大から万遍なく選出され,多岐に渡る分野から団役員が構成される.

海外研修航海の意義は3つある.1つ目は独自性と不易性を含む教育プログラムとしての価値である.2 つ目は東海大学の建学の精神が根底にあることである.3つ目は変化の著しい現代社会に生き

る若者に対し,自身の可能性を信じ高い理想を持ち歩み続ける建学の精神を踏まえ,第 1 回の海外研修航海からこれまで全身体活動的教育を継続してきたことである.

Ⅵ. 結びに

1986 年の第 1 回に始まる海外研修航海は,半世紀に渡って「望星丸」という船を活用しながら非日常性を有した教育を通してその価値を構築してきた.2020 年 2 月に予定していた第 51 回は,世界中に拡がった新型コロナウィルスにより止むを得ず中止する決断を下した.この機に東海大学の創設者松前重義の四つの言葉である建学の精神を根底に置いた教育プログラムである海外研修航海の意義を改めて意識し,見直すべきことは精査したうえで改善していくことが,再開後の海外研修航海の価値を高め,継承し続けていくことの一助となると期待する.

参考文献・資料

1) 吉原さちえ (2020) ,海外研修航海の継承～恒常性と独創性に着眼して～,イベント学会「第 23 回研究大会」,https://eventology.org/congress,デジタル抄録掲載準備中

2) 東海大学ホームページ,海洋調査研修船「望星丸」, https://www.u-tokai.ac.jp/about/research/facilitiesbouseimaru/ (最終閲覧日 2020 年 12 月 20 日)

3) 松前義昭 (2020) , 海外研修航海第 51 回見開き A3 冊子, 「人生の糧となる経験と感動、そして友情を」東海大学チャレンジセンター, p.4

4) 髙野二郎 (2011) , TOKAI 161 号,特集 1 アジア諸国の大学・公的機関との連携を通じて～活性化する国際的学術交流～,東海大学学園校友会,p.4

5) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 1. はじめに 1.4 海外研修航海企画委員会委員長挨拶 松前義昭,学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり,第 51 回海外研修航海実行委員会,p.3

6) 山田清志 (2019) ,学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり,第 51 回海外研修航海実行委員会,p.4

7) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 3. 研修 (3.4 寄港地事前調査) ,学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり,第 51 回海外研修航海実行委員会,p.23

8) 松前重義 (1986) ,東海大学出版会,東海大学の精神,pp.3-4,pp.8-9,p.20.29.95

9) 松前重義 (1946) ,株式会社東海書房, 敗戦デンマークの復興を見よ,p.20,123

10) 松前達郎 (1986) ,学校法人東海大学,松前重義と望星学塾－その思想と行動,序 松前重義 東海大学総長・望星学塾塾長,pp.Ⅱ-Ⅵ

11) 松前重義 (1991) ,東海大学出版会,青春に生きよう－松前重義 望星学塾 講演集－,pp.140-141

12) 松前重義 (1986) ,東海大学出版会,東海大学の精神,pp.112-113

13) 松前重義 (1961) ,東海大学出版局,-東海大学昭和 36 年度 入学式における学長式辞- 建学の目的と本学の使命,p.8

14) 東海大学ホームページ,建学の精神, https://www.u-tokai.ac.jp/about/profile/spirit/ (最終閲覧日 2021 年 1 月 22 日)

15) 1 Mission Statement of TOKAI UNIVERSITY 東海大学の精神,東海大学学長室

16) 松前重義,白井久也 (1978) ,松前重義,わが昭和史,序

17) 松前重義 (1986) ,東海大学出版会,東海大学の精神,pp.16-17,p.20,pp.88-89,pp.132-134

18) 松前重義 (1961) ,東海大学出版局,-東海大学昭和 36 年度 入学式における学長式辞- 建学の目的と本学の使命,pp.3-4

19) 松前重義 (1986) ,東海大学出版会,東海大学の精神,pp.116-117

20) 東海大学ホームページ,松前重義と建学の精神, https://www.u-tokai.ac.jp/about/profile/spirit/spirit/ (最終閲覧日 2021 年 1 月 22 日)

21) 松前達郎 (1986) ,学校法人東海大学,望星学塾創立五十周年記念出版 松前重義と望星学塾-その思想と行動,pp.9-10

22) 篠原登 (1986) ,学校法人東海大学,望星学塾創立五十周年記念出版 松前重義と望星学塾-その思想と行動,p.65

23) 第 51 回海外研修航海実行委員会 (2020) 1. はじめに 1.1 海外研修航海のねらい,学校法人東海大学 第 51 回海外研修航海 研修のしおり,第 51 回海外研修航海実行委員会,p.1

［研究資料］

コロナ禍における地域住民を対象とした運動指導動画の動向

福田昌平*1・後藤里織*1・久保田晃生*2

The movement of exercise promotion videos target for local resident in COVID-19 pandemic.

by

Shohei Fukuda, Saori Goto, Akio Kubota

Abstract

The purpose of this study is to research the YouTube channels of prefectures and grasp the trends of exercise promotion videos. Under the influence of the COVID-19 pandemic, there is a secondary damage caused by lack of exercise. In this situation, local governments are working to eliminate the lack of exercise. Among them, I focused on exercise promotion videos on YouTube channels in prefectures. Eleven prefectures have uploaded exercise promotion videos, accounting for 23.4% of the total. There was no significant difference between the presence or absence of playlists and video views. In addition, there was no significant difference between the presence or absence of publication on the homepage and video views. In the future, I would like to research the recognition of exercise promotion videos and consider the exercise style required by local resident in COVID-19 pandemic.

Ⅰ．緒言

2019 年末に発症が報告された新型コロナウイルス（以下，COVID-19）により健康づくりにも影響が出ている．2020 年 12 月現在，健康づくりの活動やスポーツ活動は制限が緩和しつつあるが，施設によって時間や人数の制限，運動種目の制限がされており，COVID-19 の発症以前と比べると健康づくりの運動の自由度や質は低下していると考えられる．COVID-19 の影響で，従来のような生活を送ることが困難となり，ストレスや不安の増大が懸念される．このようなコロナ禍においての活動制限の不安要素に運動不足が挙げられている[1)]．

＊1　東海大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程　　＊2　東海大学体育学部生涯スポーツ学科

実際に，高齢者の身体活動時間が 2020 年 1 月と 4 月を比較すると大幅に減少したと報告されている[2]．2020 年 4 月に緊急事態宣言が日本政府より出されたが，その宣言中の自粛期間も含め，運動不足による健康への二次被害の問題が指摘されている．この問題への対応としてスポーツ庁は，運動不足による健康への二次被害を予防するためのガイドラインを掲載している[3]．ガイドラインでは，運動不足に加え，ウイルス感染への不安によるストレスの蓄積や，在宅勤務やオンライン授業の導入による座位行動の増加での腰痛・肩こりなどの疲労も健康二次被害として指摘している．このような中で，新しい生活様式でのスポーツのあり方が注目され，Information and Communication Technology（以下，ICT）の更なる活用が進められている．健康づくりの ICT の活用には主にメールや電話を用いた運動啓発や運動実践状況の確認，ウェアラブル端末を用いた身体活動量の測定がある．その他に，地方自治体はコロナ禍でも健康づくりのための運動を実施できるような「運動指導動画」を配信する方法も行っている．

ところで，大学生の行動変容に関して，運動・スポーツの情報入手方法は,「無関心期」以外は「インターネットの動画」であるという報告がある[4]．運動指導動画を用いての運動は，コロナ禍での運動不足解消の第一歩に適していると考えられる．近年，注目されている情報発信ツールに「ソーシャルメディア」がある．ソーシャルメディアは事業組織，行政，中間支援組織，市民など，多様な人たちとの情報交流を行うことができる．この情報が社会参画の契機となる可能性もあると言われている[5]．また，薮本らは情報提示順序の確定性・表現の多様性・信頼性の確保など 8 つの特性から企業・組織の動画活用の有効性を論じている[6]．地方自治体は導入のしやすさや，住民への普及状況を鑑み，ソーシャルメディアで動画共有サービスの一つである YouTube を積極的に活用している．YouTube は個人または団体でアカウントを持つことができ，撮影した動画をインターネット上に公開し，誰もが視聴することができる．都道府県も YouTube に各々のチャンネルを持ち，動画を撮影・編集し公開している．インターネットの利用において，YouTube 等の動画共有サービス利用率の合計加重平均は 76.8%[7] である．小寺（2011）は，「YouTube には利便性，情報性，再現性，社交性という効用が存在すると見ることができる．」[8] と述べており，これらは YouTube のメリットであると考えられる．さらにいつでもどこでも気軽に視聴ができること，運動指導動画であれば動作の確認が分かりやすく，動作の秒数や呼吸の確認もでき，視聴しながら行うことができる．

しかし，運動指導動画について，地域住民に認知・利用されているのかは十分に把握されていない．健康増進法では地方公共団体は健康増進に必要な技術的援助を与えることに努める，国民は健康の増進に努めなければならない旨が記載されている．したがって，地方自治体は健康づくりや身体活動促進のための施策を提示し実行を促す役割があり,住民はそのサービスを受ける権利がある．動画を用いた普及方法であれば，視聴されなければ健康づくりを進める上では意義が低い．また，視聴の目安となる動画の再生回数等について，都道府県間を比較したような報告は認められず，視聴させたい住民へ認知されていない可能性がある．

以上のことから，本研究では各都道府県の YouTube チャンネルについて，以下の項目の状況を調査し，運動指導動画の動向を把握することを目的とする．

・各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数
・YouTube チャンネル内の運動指導動画の有無
・YouTube チャンネル内での再生リストの有無
・都道府県ホームページでの YouTube チャンネルの掲載の有無
・運動指導動画の再生回数

Ⅱ．方法

1．主要概念の定義

1）運動指導動画

本研究での運動指導動画とは，自宅でできる体操・運動・ストレッチ・軽いトレーニングなどの健康づくりのための運動を目的とするものを指す．動画を視聴しながら運動を行うことが出来るものが対象である．

2）都道府県の YouTube チャンネル

各都道府県は情報発信のため公式 YouTube チャンネルを開設している．運動指導動画以外にも COVID-19 関連の情報や県議会の様子,観光地の PR 動画などが公開されている．

3）再生リスト

再生リストは公開された動画を種類やジャンルごとに分類し，整理するための機能である．運動指導動画は,「健康」や「健康づくり」のリストとして分けられていることが多い．

4）ホームページでの YouTube チャンネルの掲載

都道府県の公式ホームページではトップページに SNS（Social Networking Service）のページや YouTube チャンネルのリンクが掲載されているケースがある．このような掲載をすることによってアクセスがしやすくなることが考えられる．

2. 対象

対象は都道府県の公式 YouTube チャンネルに上げられている運動指導動画を対象とした．調査対象の動画は 2020 年 3 月 13 日から 2020 年 12 月 2 日までに公開された動画である．なお，2020 年 3 月 13 日は新型インフルエンザ等特別措置法の施行が可決された．

3. 調査方法及び統計解析

1）各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数と運動指導動画の有無，再生リストの有無，ホームページでの掲載の有無を調査した．

2）運動指導動画を公開している都道府県について，運動指導動画の本数とそれぞれの動画の再生回数を調査した．

3）運動指導動画を公開している都道府県について，再生リストの有無の二群に分け，動画の平均再生回数に有意な差が認められるか対応のない t 検定を行った．有意水準は 5%とした．

4）運動指導動画を公開している都道府県について，ホームページでの掲載の有無の二群に分け，動画の平均再生回数に有意な差が認められるか対応のない t 検定を行った.有意水準は 5%とした．

Ⅲ. 結果

1. 各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数と運動指導動画の有無

表 1 に各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数と運動指導動画の有無，再生リストの有無，ホームページでの掲載の有無を示した(2020 年 12 月 2 日現在)．

表 1　各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数と運動指導動画，再生リスト，ホームページ掲載の有無

都道府県	登録者数	動画	リスト	HP掲載
北海道	17,500			
青森	6,720			
岩手	24,800	○	○	○
秋田	8,610			
山形	3,240			
福島	12,800	○		○
茨城	137,000			
栃木	3,550			
群馬	17,600			
埼玉	5,580	○	○	○
千葉	3,460			
東京	145,000			
神奈川	26,300	○	○	○
新潟	2,450			
富山	1,280			
石川	406			
福井	1,640			
山梨	12,000			
長野	653	○	○	○
岐阜	788			
静岡	10,800			
愛知	1,340			
三重	1,730	○	○	○
滋賀	7,630			
京都	5,650			
大阪	5,630			
兵庫	2,470			
奈良	209			
和歌山	3,290			
鳥取	15,200	○	○	
島根	8,310			
岡山	13,500			
広島	4,450			
山口	668			
徳島	7,760	○	○	○
香川	8,600			
愛媛	7,590			
高知	5,670			
福岡	3,860	○	○	
佐賀	3,300			
長崎	1,410			
熊本	1,750			
大分	4,800			
宮崎	1,340	○		○
鹿児島	2,680	○		
沖縄	6,410			

宮城県はチャンネル登録者数非公開のため，表からは除外した．都道府県の YouTube チャンネルの登録者数の平均は 12,335.3 人（中央値 5,190 人）であった．運動指導動画をアップしている県は，岩手県，福島県，埼玉県，神奈川県，長野県，三重県，鳥取県，徳島県，福岡県，宮崎県，鹿児島県の 11 県であり，全体の 23.4%であった．

2. 運動指導動画を公開している都道府県の動画の本数と平均再生回数

表 2 に運動指導動画を公開している都道府県の運動指導動画の動画数と平均再生回数を示した（2020 年 12 月 2 日現在）．

表 2　運動指導動画を公開している都道府県の運動指導動画の動画数と平均再生回数

都道府県	動画数	平均再生回数
岩手	17	626.9
福島	5	24203.2
埼玉	3	449.3
神奈川	15	349.7
長野	9	314.1
三重	1	9551.0
鳥取	24	1665.8
徳島	4	722.5
福岡	3	474.0
宮崎	1	12.0
鹿児島	4	587.8

各都道府県の間には動画数，平均再生回数ともにばらつきがあることが分かる．

3. 再生リストの有無と平均再生回数

運動指導動画を公開している都道府県の再生リストの有無による動画の平均再生回数に関して，対応のない t 検定を行った．再生リストを設けていた都道府県は，岩手県，埼玉県，神奈川県，長野県，三重県，鳥取県，徳島県，福岡県であった．再生リストの有無と平均再生回数に統計的に有意な差は認められなかった（t=-1.60，p=0.14）．

4. ホームページでの掲載有無と平均再生回数

運動指導動画を公開している都道府県のホームページでの掲載有無による動画の平均再生回数に関して，対応のない t 検定を行った．ホームページで掲載があった都道府県は,岩手県,福島県，埼玉県，神奈川県，長野県，三重県，徳島県，長崎県であった．ホームページの掲載有無で動画の平均再生回数に有意な差は認められなかった（t=0.43，p=0.67）．

Ⅳ. 考察

本研究では各都道府県の YouTube チャンネルについて，5 つの観点から運動指導動画の動向を把握することを目的とした．各都道府県の YouTube チャンネルの登録者数について，平均が 12,335.3 人であった．平均である 12,335.3 人は日本人口に対して,約 10,000 人に 1 人しか登録していない割合だと考えられる．茨城県の「いばキラ TV」の登録者数と茨城県の人口の比を考えると,約 20 人に 1 人が登録している計算になる．これに比べると都道府県全体の YouTube チャンネルが認知されているとは言い難い．また，仮説として新型インフルエンザ等特別措置法の施行が可決されたことで,都道府県が運動不足の解消を促すために，運動指導動画を作成し公開することを想定していたが，実際は 11 県（23.4%）と少ない状況であった．一方で，運動指導動画を公開している都道府県は動画の本数にばらつきがある．また，鳥取県や神奈川県といった動画本数の多い都道府県は運動の種類や部位別に動画を分け，第 1 回，第 2 回などシリーズ化し動画を公開しているなど運動指導動画について積極的に公開していた．

再生リストの有無と運動指導動画の平均再生回数について，二つの間に有意な差は認められなかった．再生リストの有無が運動指導動画の再生回数の増加に影響はなかった．本来，再生リストはキーワードを検索した際，関連動画がまとめて上位に表示され，再生回数の増加に繋がるといった役割があるものの，十分にその役割が果たされていない可能性がある．また，ホームページでの YouTube チャンネルの掲載の有無と平均再生回数

についても，二つの間に有意な差は認められなかった．都道府県のホームページにYouTubeチャンネルの掲載があることで宣伝の役割となる．宣伝により動画を視聴しやすくなることが期待されたが，本研究の結果では再生回数の増加には影響していない可能性がうかがえた．

茨城県の公式YouTubeチャンネルの「いばキラTV」は都道府県の公式YouTubeチャンネルの中で動画掲載本数，総再生回数，チャンネル登録者数の3分野において2016年1月に日本一を達成している[9]．本研究において茨城県の公式YouTubeチャンネルには，運動指導動画は認められなかったが，47都道府県の中でも公式YouTubeチャンネルの視聴に繋げる動画広報が成功している県といえる．なお，茨城県では，マスコットキャラクターや人気の高い YouTuber の動画出演によって注目を集める工夫がなされていた．

YouTube など動画サイトの広がり，Web サイトでの動画公開，テレビ放送のデジタル化，携帯電話による新しい動画配信サービスなど映像コンテンツの活用は今後さらに加速する[10]．このように行政の動画広報は，社会のトレンドに合わせて，時代に適合したプロモーションを進めていくことが有効である．例えば，運動指導動画もその都道府県が出身である著名人を出演させることで注目を集めるような工夫が考えられる．また，視聴者が動画を視聴する際には，文章や単語よりもサムネイル（視認性を高めるために加工や縮小した画像）が優先されている[11]ことから，ターゲットや内容が伝わることに加え興味を抱かせるようなサムネイルを作成することも重要ではないかと考えられる．

今後の課題としては，都道府県が作成する運動指導動画について，地域住民に対しての認知度や必要性を詳細に調査し，コロナ禍での地域住民が求める運動様式や視聴してもらえる動画作成に役立てることが必要であると考えられる．

文献

1)橋元良明（2020）新型コロナ禍の中の人々の不安・ストレスと抑鬱・孤独感の変化．情報通信学会誌，38（1），pp.25-29.

2)M.YAMADA，Y.KIMURA，D.ISIYAMA，Y.OTOBE，M.SUZUKI，S.KOYAMA，T.KIKUCHI，H.KUSUMI，H.ARAI（2020）Effect of the COVID-19 Epidemic on Physical activity in Community-Dwelling Older Adults in Japan. A Cross-Sectional Online Survey，J Nutr Health Aging. pp.1-4.

3)スポーツ庁 HP 新型コロナウイルス感染対策スポーツ・運動の留意点と運動事例について．https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/jsa_00010.html（最終閲覧2020年12月8日）

4)藤田美幸（2020）ICT が促進及び維持する健康・スポーツに関する行動変容―大学生の健康・スポーツ行動に着目して―．情報経営，80巻，pp.165-168.

5)遠藤ひとみ（2011）わが国のソーシャルビジネスに関する一考察：アクティブシニアの多様な社会参画を中心として．嘉悦大学研究論集，53巻(2)，pp.45-62.

6)薮本直樹・土居陽佑・八重樫文（2019）企業・組織における動画の有効活用に関する研究：動画活用の戦略スキームと評価手法の検討．立命館経営学，58巻(2)，pp.135-147.

7)総務省平成28年度版情報通信白書.

8)小寺敦之（2012）動画共有サイトの「利用と満足」:「YouTube」がテレビ等の既存メディアに与える影響.社会情報学研究,16巻(1)，pp.1-14.

9)取出新吾（2017)日本一の行政動画広報「いばキラTV」の事例紹介．公共コミュニケーション研究，2巻(1)，pp.28-31.

10)栃窪優二（2010）インターネット時代の映像メディア研究―地域連携プロジェクトからの報告―．文化情報学部紀要，10 巻，pp.61-69.

11)佐藤亮介・田村良一（2019）YouTuber の動画における視聴者に選択されるサムネイル画像とタイトルの研究．日本感性工学会論文誌，18巻(1)，pp.139-145.

［実践報告］

COVID-19 に対応した健康・スポーツ科目における遠隔授業の組織的実践

川邊保孝*1・植村隆志*2・八百則和*2・與名本稔*2・小山孟志*3・小河原慶太*4

Organizational Practice of Remote Lecture for Health and Sports Classes during COVID-19 Pandemic

by

Yasutaka Kawabe, Takashi Uemura, Norikazu Yao, Minoru Yonamoto, Takeshi Koyama and Keita Ogawara

Abstract

The purpose of this article is to provide a report on Tokai University's practical online classes for health and sports subjects during the Covid-19 pandemic. These health-and-sports classes were conducted through a task-based learning style (TBL) in on-demand remote classes. This report indicated that these remote classes were beneficial as a learning system for both the knowledge and theory of sports science. However, our findings suggest that on-demand remote classes do not meet all the needs of our students and that regular face-to-face classes for first year students is necessary for their education.

Ⅰ．はじめに

2020 年に世界的に流行した新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)は日本においても甚大な影響を及ぼした。2020 年 4 月には緊急事態宣言が発令され、外出の自粛などの行動制限や社会・経済・教育活動における様々な制限により市民生活も大きな影響を受けることとなった。当然ながら Covid-19 は大学教育にも大きな影響を及ぼし、文部科学省(2020)によると 2020 年 5 月時点では全国の大学のうち 90.0%が遠隔授業によって授業を実施しており、従来の授業形態を大きく変更せざるを得ない状況となった。東海大学においても 2020 年度春学期の授業開始が 5 月 11 日に延期され、全ての授業を遠隔で実施することが決定された。

東海大学では健康スポーツ科目という名称で

＊1　東海大学体育学部生涯スポーツ学科　　＊2　東海大学体育学部競技スポーツ学科
＊3　東海大学スポーツ医科学研究所　　＊4　東海大学体育学部体育学科

体育実技科目が必修としてカリキュラムに位置付けられており、全国のキャンパスにおいてそれぞれの特徴を生かしつつ授業が展開されている。健康スポーツ科目は、“健康と体”とテーマに学ぶ「健康・フィットネス理論実習」と“生涯スポーツ”をテーマに学ぶ「生涯スポーツ理論実習」の2科目計2単位から構成されている。これらは、健康と体育・スポーツ活動の意義を学び、将来の人生をより豊かにできるようなライフスタイルを身に付けることを目標とし、「若き日に汝の体躯を養え」という建学の精神に則るとともに、「広く自らの歴史観、世界観、人生観を培い、社会に対する強い使命感と豊かな人間性を備えた人材を育成する」という東海大学の教育目標に寄与する科目として設定されている。また、健康・体力面だけでなく、初年次教育としての位置づけも併せ持ち、仲間とともに身体活動を体験することで、「友達づくり」や「仲間との信頼関係づくり」もねらいとしている。そのため、東海大学の全学生は、学科ごとに指定された健康スポーツ科目を第1セメスターと第2セメスターに履修することなり、その履修者は湘南キャンパスだけでも約 5,000 名にも及ぶ。また、これだけの大人数に対して必修の体育実技科目を展開するためには授業コマ数や担当教員の確保が必要となり、湘南キャンパスにおいては年間150コマ以上の授業が開講され、延べ350名の教員が本授業を担当している。これほど大規模に必修の体育実技科目を展開している大学は極めて稀である。2020年春学期はこの健康スポーツ科目も Covid-19 対策として遠隔授業で開講されることとなり、急きょ授業内容ならびに運営体制を変更することとなった。

本稿は、2020年度春学期に東海大学において実施された健康スポーツ科目の遠隔授業の組織的実践を記録するとともに、その実践を通して導かれた体育実技科目における遠隔授業の有用性と課題を明確化することを目的とする。この知見は、大学教育における新しい生活様式下での体育実技科目の授業内容ならびに授業運営にとって有益な示唆を与えるものとなるであろう。なお、健康スポーツ科目の授業形態は各キャンパスにおいて異なるため、本稿においては湘南キャンパスの事例を中心に取り上げることとする。

Ⅱ. 2020年度春学期における健康スポーツ科目の概要

2020 年度春学期の健康スポーツ科目は Covid-19 対策により遠隔授業として開講され、一般体育研究室特設サイト(以下、特設サイト) による課題提示と授業支援システム(以下、LMS) を用いたレポート提出というオンデマンド形式による課題学修型の授業として展開された。学生は、各自で特設サイトにアクセスし、掲載された「学修計画書」に基づいて授業内容や課題を確認し、教科書ならびに参考資料を用いて自己学修のうえ、LMS を用いてレポートを提出するというサイクルを毎週実施することとした。

学修計画書とは、単元ごとの「テーマ」「授業目的」「教科書該当ページ」「キーワード」「学修の進め方・内容」「課題」「参考資料」「レポート評価基準」といった授業に必要な情報をまとめたものであり、教科書の内容に沿って作成した。特設サイトを通じて毎週日曜日に学生に配信を行い、この学修計画書によって全履修者が統一された内容で学修を行うことが可能となった(資料1)。

授業内容については、14回の授業回数を維持したうえで、教科書の内容を網羅する形で各単元のテーマを設定した(表1、表2)。基本的には、教科書を基本とした座学による課題学修であり、健康・フィットネス理論実習においては一部運動を実技による課題を取り入れたが、生涯スポーツ理論実習では実技を取り入れなかった。理由は、オンデマンド型の遠隔授業においては、学生の体調や体力・技能レベル等を把握できないうえに、当時は外出自粛などの行動制限の程度が不透明であり、学生の安全性が十分に確保できないと判断したためである。また、他大学の体育授業で散見された学生の運動実践を動画等に記録して提出させるような課題については、学生のインターネット環境の確保や大容量のデータをやり取りするインターネットシステムの整備が不十分であったため見送ることとした。

遠隔授業における教材は、健康スポーツ科目に用いるために東海大学一般体育研究室で編集した

教科書「健康・フィットネスと生涯スポーツ 三訂版」(大修館書店) を引き続き使用した。加えて、WEB サイトや NHK オンデマンド等の動画教材を参考資料として学修計画書によって提示した。学生自身が独自で参考資料を検索することも認め、その場合は出典を明示するよう指示をした。一方で、海外にいる学生の教科書購入は一つの課題となった。出版社からの情報提供により、海外からも注文が可能な WEB サイトを学生に伝えて教科書購入を促すとともに、参考資料を提示して課題回答を求めるなどの対応を行った。

また、運動制限のある学生や自身の障害や特性から通常の授業での履修が困難な学生を対象として「個別クラス」を開講していたが、遠隔授業への切り替えに伴い、実技を行わなくても学修を進めることができるため、2020 年度春学期については開講を取り止めた。なお、学生からの要望があった場合には開講できる体制は整えていたが、学生からの要望はなかった。

レポートは大学が導入していた LMS を用いて、WEB システム上から提出させた。レポート提出期限は曜日時限関係なく統一を図り、学修計画書の提示(毎週日曜日 21:00) から 2 週間後(月曜日の 0:00) に設定した。レポートの評価は、提出による基礎点と内容による実習評価点によって構成され、評価基準や点数の配分を学修計画書に記載して学修課題の明確化と透明性の確保に努めた。

出欠席の確認については、レポートの提出をもって出席として扱い、シラバスの規定通り全授業回数の 2/3 以上の出席がある者を成績評価の対象とした。成績評価は、単元ごとのレポートの合計点により行った。定期試験は、対面・遠隔いずれにおいても試験環境を整えることが不可能であったため実施しなかった。

健康・フィットネス理論実習　学修計画書　(第 2 回)

【テーマ】　健康スポーツ科目の意義と QOL

【目　的】
- 東海大学における健康スポーツ科目の意義について考える。
- 健康や QOL の概念を理解したうえで、自らにとっての健康・QOL について考える。

【教科書】　はじめに　P2-3 健康と QOL

【キーワード】　健康、QOL

【学修の進め方・内容】
「健康」の概念は非常に幅広い。健康については、WHO(世界保健機関)憲章による「健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に病気あるいは虚弱でないことでない」といった定義が有名である。しかし、完全に良好な状態はありうるのであろうか。障害や病気があったとしても生きがいを持ち満足感の高い生活を送る人もいるし、人々は多かれ少なかれ不安やストレスを抱えて生きている。このように健康とは定義が難しく正解はないとも思える。

近年 QOL (Quality of Life) という概念が注目されている。QOL とは、「生活の質」や「人生の質」などと訳され、単に身体面の健康のみに着目する概念ではなく、各種視点からの「人間のより良い状態」を意味している。

また、多くの人々が QOL の高い生活を送るためには、健康に関わる制度・環境づくりも必要不可欠である。東海大学では「QOL の向上に資する人材育成」を推進しており、今後の大学生活における学修の方向性を考えるうえで「QOL」や「健康」について適切に理解することが必要である。そこで、本授業ではまずは教科書の該当ページならびに参考資料をしっかりと読んだうえで、健康や QOL に関する基本的な考え方を理解してもらいたい。

スポーツ庁の調査によると、運動・スポーツ習慣がストレス解消と生活の充実につながるといった報告もある (参考資料より)。一方で、運動嫌いや苦手な者にとっては、スポーツ活動以外の様々な活動が生活の充実やストレス解消につながるであろう。つまり自分にとっての健康の考え方を整理するとともに他者の健康に対する考え方を共有・尊重することが必要である。本授業を通じて、自らにとっての健康や健康を支える要素、QOL の高い状態とはどのようなことか考えるきっかけとなることを期待する。

【課　題】
教科書を踏まえて WHO が分類する QOL を構成する要素を説明するとともに、参考資料を踏まえて「東海大学における QOL の定義」を説明しなさい。また、教科書や参考資料をもとに健康や QOL の理解を深めたうえで、自分にとっての健康な状態もしくは QOL の高い状態について、あなたの考えを述べなさい。

＜提出期限：5 月 3 1 日(日)　授業支援システムのアクセス日時に注意すること＞

【参考資料】
(1) スポーツ庁が考える「スポーツ」とは？Deportare の意味すること
https://sports.go.jp/special/policy/meaning-of-sport-and-deportare.html
スポーツ庁 WEB 広報マガジンデポルターレ (2018 年 3 月 15 日)
(2) 学長挨拶 (東海大学の考える QOL)
https://www.u-tokai.ac.jp/about/message2/

【参考：NHK オンデマンド】
NHK スペシャル 私たちのこれから「#健康格差 あなたに忍び寄る危機」

【レポート評価基準】
(1) レポート文字数 600 字以上、文章の体裁が整っており、誤字脱字等が少ない【1 点】
(2) WHO による QOL 概念を構成する要素について説明がされている【1 点】
(3) 東海大学における QOL について説明がなされている【1 点】
(4) 自分にとっての健康もしくは QOL の高い状態に関する意見が書かれている【1 点】

＜提出期限：5 月 3 1 日(日)　授業支援システムのアクセス日時に注意すること＞

【やってみよう：本時の運動の実践】
猫背は見た目が格好悪いというだけでなく、首や肩の凝り、腰痛などの体調不良の原因となる場合もあります。次のサイトを参考に、猫背の改善や予防のストレッチを無理のない範囲で実践してみてください。
有賀誠司 (2018) 背中を伸ばして猫背を予防しよう. 高校生新聞オンライン
https://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/4449
有賀誠司 (2018) 背中から肩を伸ばして姿勢を正そう. 高校生新聞オンライン
https://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/4446

資料 1　学修計画書サンプル

Ⅲ．授業運営体制と授業運営説明会

湘南校舎における健康スポーツ科目は、1 年次生ならびに再履修者の合計約 5,500 名が履修する大規模な科目である。2020 年度春学期は 80 コマの授業が開講され、のべ 180 名の教員が担当した。そのため、遠隔授業への切り替えにあたり、授業内容の統一と授業の質の担保が課題となった。また、多数の教員が関わるため学生への情報提供を一元化する必要があった。その課題に対応するために、一般体育研究室の構成教員によりプロジェクトチームを立ち上げて授業内容の検討と授業運営を行った。プロジェクトチームは 5 名で構成され、全体統括、学修計画書の作成、学生対応、特設サイトの運営、LMS の設定、学生・教員への情報発信などの業務を分担し、授業運営体制を整えた。学生に対する授業内容の提供はすべてこのプロジェクトチームが担い、その他の授業担当教員は提出されたレポートの採点業務を中心に担当することとなった。

また、健康スポーツ科目の授業担当教員への情報提供のため、授業期間中の毎週土曜日に全 14 回の一般体育授業運営連絡会を web 会議にて実施した。連絡会の様子は動画にてレコーディングを行い、特設サイトの教員専用ページから随時視聴できるようにした。主な内容は以下の通りである。

① 授業課題の説明
② 課題採点のポイント解説
③ 学生からの質問と回答
④ 授業担当教員からの質問と回答
⑤ LMS の使い方の説明
⑥ 大学からの最新情報

連絡会を開催することで、担当教員が授業内容やレポート採点、学生への対応について共通の理解を持つことができた。また、実際の授業で起こっている事例や問題点、その解決策を共有することができた。

Ⅳ．健康・フィットネス理論実習の授業内容と変更点

健康・フィットネス理論実習は、健康的な生活習慣を身につけることに重点を置き、健康に関する理解を深めるとともに、自己の体力に応じたフィットネスの実践能力を習得することを目的とした科目である。2019 年度までは、ガイダンス(1 回)、体力測定(2 回)、健康づくりのための運動の理論と実践(9 回)、健康に関する知識や考え方を学ぶための講義(2 回）の計 14 回の授業により構成され、さらに定期試験として筆記試験を実施していた。自己の体力に応じたフィットネスの実践能力を習得することを重視していたため、授業内容は実技を中心に展開されていた。具体的に学生は、まず体力測定を実施したうえで、エアロビクス運動、筋力トレーニング、コンディショニング運動(ストレッチングやコーディネーショントレーニング)という 3 つの運動領域について理論を学びながら運動を実践する形態をとっていた。

しかしながら、2020 年度春学期については遠隔授業に伴い、理論の理解を重視した課題学修を中心として展開し、実技(運動の実践)は最小限にとどめた。授業内容の構成はガイダンスとまとめ(2 回)、建学の精神と健康スポーツ科目の意義に関する学修(1 回)、教科書等をもとにした健康・体力・運動実践に関する課題学修(8 回)、3 つの運動領域に対応した課題学修(3 回)の計 14 回となり、定期試験は実施しなかった(表 1)。

遠隔授業における実技については、3 つの運動領域の単元において、実践方法や運動強度の設定方法を提示したうえで、学生自身が無理のない範囲で運動を実践し、その感想を課題として提出させた。しかしながら、Covid-19 による社会情勢や学生の健康状態などにより実技を実施できない場合を想定し、実技に替わる課題も併せて提示して、実技を行わなくてもレポートが提出できるよう選択肢を用意した。一方で、毎回の学修計画書には、教員が外部媒体に掲載していた既存の WEB サイト(写真や動画)を活用し「やってみよう！本時の運動実践」として健康づくりのための運動プログラムを提示して運動の実践を促した。「やってみよう！本時の運動実践」については、健康管理のツールとして学生に活用してもらうことを目的としたため成績評価には加えなかった。

Ⅴ．生涯スポーツ理論実習の授業内容と変更点

生涯スポーツ理論及び実習は、生涯を通じたスポーツライフスタイルの獲得に重点を置き、スポーツの持つ「おもしろさ」などを学び、ライフステージに応じたスポーツの楽しみ方と実践能力を修得することを目的とした科目である。

2019 年度までの授業形態としては、ガイダンス(1 回)、生涯スポーツに関する講義(1 回)に加え、２種目のスポーツを 6 回ずつの実技授業を通して学習し、実技授業においては適宜それぞれの種目のルールや戦術などの理論の講義を実施していた。

しかし、2020 年度春学期においては、理論の理解を重視した課題学修によるオンデマンドによる授業を展開した。授業内容は、まず、授業前半は、ガイダンス(1 回)、建学の精神と東海大学における QOL を通して健康スポーツ科目が開講されている意義を理解する内容(1 回)、スポーツの概念や本質的な価値に関する内容(1 回)、「する」「みる」「支える」「知る」といった様々なスポーツの楽しみ方を理解する内容(4 回)について学修を進めた。授業の後半からは、スポーツの実践として「球技・集団」「個人・ネット競技」「個人競技」「アウトドアスポーツ」「武道」といった分類で各種のスポーツ種目の歴史や特徴、ルール、基本技術、ゲームの楽しみ方を中心に広く学修した(5 回)、13 回目の授業では、これまで学んできた内容を踏まえ、大学生活においてどのようにスポーツを楽しみ、卒業後も生涯にわたってスポーツにどのように関わっていくかを自分のキャリアや将来像と関連して考えさせる内容とし(1 回)、最後に次学期の健康スポーツ科目の説明を行った(表 2)。

学修計画書は、教科書の内容に沿って、教科書の執筆者とも相談したうえで作成した。各単元で受講者に学修してもらいたいテーマや目的、学修の進め方を明確にした上で、課題を提示した。この学修計画書には参考とする教材として、教科書以外に NHK オンデマンドや参考となる動画、関連した Web サイトなどを掲載し、受講者が課題に対して自ら考え、主体的に課題に取り組めるようにした。

従来は受講者が選択した２種目のスポーツ種目の実技を中心に授業を展開していたが、2020 年春学期については、設備や用具が自宅では十分に用意できないことや体力や健康状態の把握が十分に実施できず受講者の安全性が担保出来ないことから、実技は実施しなかった。

表 1　健康・フィットネス理論実習における授業内容

	2019年度まで	2020年度春学期
第1回	ガイダンス	ガイダンス
第2回	●体力測定1（ 屋内種目）	健康・ スポーツ科目の意義と QOL
第3回	●体力測定2（ 屋外種目）	運動・ 休養と健康
第4回	講義1（ 健康とフィット ネスについて）	食事と健康
第5回	●エアロビクス運動1（ 基礎）	喫煙・ 飲酒・ 薬物乱用と健康
第6回	●エアロビクス運動2（ 応用）	生活習慣病
第7回	●エアロビクス運動3（ 発展）	体力と は
第8回	●筋力ト レーニング1（ 基礎）	ト レーニングの基本原則と実践方法
第9回	●筋力ト レーニング2（ 応用）	●エアロビクス運動の理論と実践
第10回	●筋力ト レーニング3（ 発展）	●筋力ト レーニングの理論と実践
第11回	●コンディショ ニング運動1（ 基礎）	●コンディショ ニング運動の理論と実践
第12回	●コンディショ ニング運動2（ 応用）	こころの健康と運動中の安全管理
第13回	●コンディショ ニング運動3（ 発展）	自らの日常生活と健康
第14回	講義2（ まとめ）	来学期の健康スポーツ科目について
定期試験	有	無

●は実技を含む

表 2　生涯スポーツ理論実習における授業内容

	2019年度まで	2020年度春学期
第1回	ガイダンス	ガイダンス
第2回	●1種目目 曜日時限ごとに開講された下記の種目より、適宜選択する。 サッカー、卓球、柔道・護身術、テニス、陸上競技、剣道、ソフトボール、ラグビー、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、ハンドボール、空手道、ゴルフ	健康・スポーツ科目の意義とQOL
第3回		スポーツと生涯スポーツ
第4回		スポーツの楽しみ方（する）
第5回		スポーツの楽しみ方（見る）
第6回		スポーツの楽しみ方（支える）
第7回		スポーツの楽しみ方（知る）
第8回	日常生活とスポーツ（講義）	スポーツの実践（球技･集団）
第9回	●2種目目 曜日時限ごとに開講された下記の種目より、適宜選択する。 サッカー、卓球、柔道・護身術、テニス、陸上競技、剣道、ソフトボール、ラグビー、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、ハンドボール、空手道、ゴルフ	スポーツの実践（個人･ネット競技）
第10回		スポーツの実践（個人競技）
第11回		スポーツの実践（アウトドアスポーツ）
第12回		スポーツの実践（武道）
第13回		大学生とスポーツ（まとめ）
第14回		来学期の健康スポーツ科目について
定期試験	無	無

●は実技を含む

Ⅵ. 遠隔授業特設サイトと授業支援システムについて

1. 特設サイトと LMS の活用

2020 年 4 月 3 日、2020 年度春学期授業の開始が 5 月 11 日に延期されることと同時に、開講授業は原則インターネットを活用した授業(オンライン授業等）で行われることが大学公式ホームページより発表された。それから約 1 ヶ月間で「東海大学体育学部遠隔授業特設サイト」を整備し、5 月 7 日に約 5,500 名の健康スポーツ科目履修者に公開した。特設サイトには、学生へ授業内容・課題を提供するほか、授業の進め方、担当教員への情報提供､学生の相談窓口などの機能を持たせ、レポートの提出と採点のみ LMS を使用した。

2. 特設サイトの必要性

全学部必修科目である健康スポーツ科目を遠隔授業で実施するにあたり、運用上の問題点は以下の通りであった。

① 遠隔授業でも提供する授業内容や採点基準を一定に保つ必要がある。

② LMS では､ファイルサイズの大きいリッチコンテンツを提供できない。アクセスが集中すると、システムがダウンしてしまう可能性がある。

③ LMS の利用について学部ごとに利用制限が設けられたため、授業曜日時限と LMS 利用時間帯が一致しない。また､1 日 90 分の LMS 利用時間内では、動画を閲覧する、必要な情報を調べてレポートを作成するなどは難しく、実際の学修や課題への取り組みは､LMS 外で行える必要がある。

④ 教員によって IT リテラシーが異なるため、授業実施や採点の方法に複数のツールは使わず、できる限りシンプルにする必要がある。

これらの問題を解決するため、一般体育研究室が運営する特設サイトを作成することとした。学内のシステムに依存しない特設サイトから授業内容・課題を全履修者に対して同時に提供することで、授業の平等性を保ちつつ、アクセス制限や授業曜日時限の問題を解決することができた。一方、学内の LMS は履修登録システムとリンクしているため､レポートの採点から成績算出まで行える。そのため、レポートの提出と採点には LMS を使用することで、授業担当教員が使うツールを統一し、採点業務の円滑化を図るとともに、IT リテラシーの差による影響を最小限に抑えた。

3. 特設サイトの構成と運用

特設サイトの作成には、ホームページ作成ツール「jimdo」を使用した。サイト名称を「東海大学体育学部遠隔授業特設サイト」とし、体育学部の科目と一般体育科目の情報を掲載するサイトとした。一般体育関連の主なページと内容は、以下の通りである。なお、それぞれのページにはパスワードを設定しており、履修者もしくは担当教員しか閲覧できないようにした。

① 遠隔授業の進め方

シラバスに即したページ構成にすることで、遠隔授業用の新しいシラバスとして使用した。内容は、授業形態や成績評価、授業計画などである。

② 授業課題

最新の授業課題のページは毎週日曜日の 21 時に更新し、次週の学修計画書を掲載した。なお、学修計画書については、テキストと PDF ファイルを掲載した。それまでの授業課題は過去の課題ページにアーカイブし、いつでも振り返って学修ができるようにした。

③ 問い合わせと FAQ

問い合わせページのフォームに質問を入力すると、一般体育研究室委員のメーリングリストに連絡が届くよう設定した。問い合わせ内容に対しては個別に回答を返信するとともに、FAQ に匿名で掲載した。FAQ は適宜更新を行い、学生が担当教員や一般体育研究室に問い合わせなくても問題を解決できるよう配慮した。

④ 教員専用ページ

教員専用ページには、次回の課題、課題採点のポイント、LMS の操作方法、成績の付け方、担当教員一覧、学生からのコメント・質問の対応について、学生からの問い合わせ内容一覧、毎週実施した授業運営連絡会の動画、教員用 FAQ などを掲載した。健康スポーツ科目の授業担当教員が授業内容や採点について、共通の理解を持ち、滞りなく授業運営ができるよう適宜更新を行った。

4. 特設サイトの利用状況

図 1 は特設サイトを閲覧したユーザー数とページビュー数を週別に表したものである。週毎のユーザー数は平均 5,467 名であり、ほとんどの履修者が毎週サイトを訪問していたと思われる。また、ページビューについては、平均 47,309 ビューであったが、週を追う毎に減少している傾向が見られる。これは、徐々に見るべきページがはっきりしてきたため、特定のページ(最新課題のページ)を確認するようになったためと思われる。

図 2 は、特設サイトに訪れた際に使用していたデバイスの割合である。約半数の学生がモバイル端末やタブレット端末を使用していたことが見て取れる。特設サイトは基本的に PC で見ることを前提に作成していたが、スマートフォンなどで見ることも考慮してサイトを作成する必要性が示唆された。

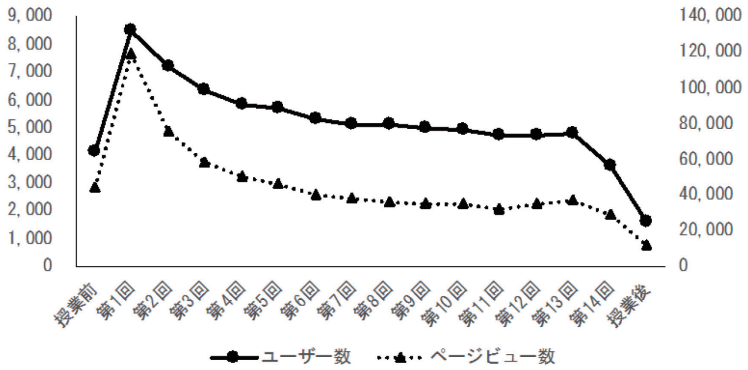


図 1 特設サイトの週別ユーザー数とページビュー数

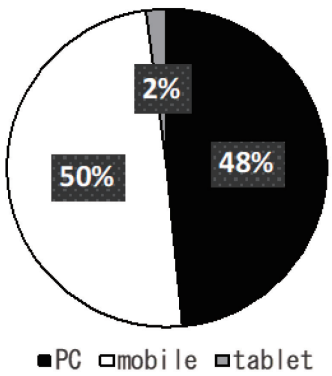


図 2 使用デバイスの割合

Ⅶ. 学生からの問い合わせ対応について

健康スポーツ科目に関する学生からの問い合わせについては、特設サイト内に設定した専用フォーム(資料 1) もしくは一般体育研究室宛のメールアドレスを用いて受け付けた。教員による回答のばらつきを避けるため、一般体育研究室のプロジェクトチームメンバーが一括して対応することとした。春学期期間中の問い合わせ件数は全 205 件であった。

主な質問内容については、以下の通りであった(図 3)。

① LMS の使い方

最も多い問い合わせとして全体の 34.6%を占めたのが、LMS の使用方法であった。「LMS の使用時間帯など制限があったためページを開けない」、「レポートを作成しているうちにタイムアウトしてしまった」といった内容が散見された。

② 課題内容

次に多い問い合わせが全体の 34.1%を占めた課題内容であった。「どのように課題を作成すればよいのか」、「課題を間違えて作成してしまった」などの内容が散見された。

③ パスワード

3 番目は、全体の 12.1%を占めたパスワードに関する内容であった。「課題ページに入るパスワードがわかりません」、「パスワードを教えてください」といった内容が散見された。

④ その他

その他、授業の進め方(7.3%)、教科書(4.3%)、ホームページ(3.9%)、課題提出(2.4%) に関する問い合わせがあった。

学生からの問い合わせ時期については、授業開始当初の 5 月中旬の 73 件(35.6%) がもっとも多く、その後、徐々に問い合わせが減少していった。授業開始当初は特設サイトの情報の周知が不十分であったうえに、学生も LMS 等のシステムの操作が不慣れであったため、問い合わせが殺到したことが想定される(図 4)。

資料 2 特設サイト問い合わせフォーム

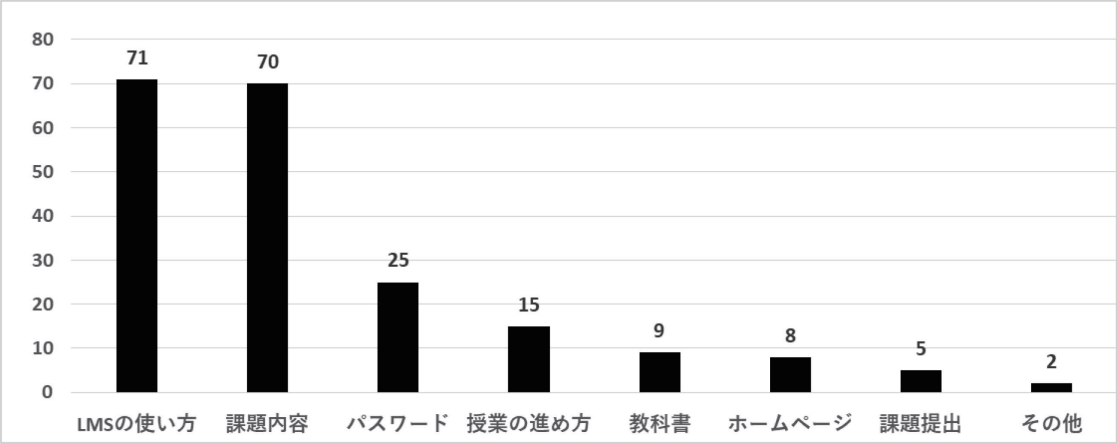


図 3　内容別問い合わせ件数

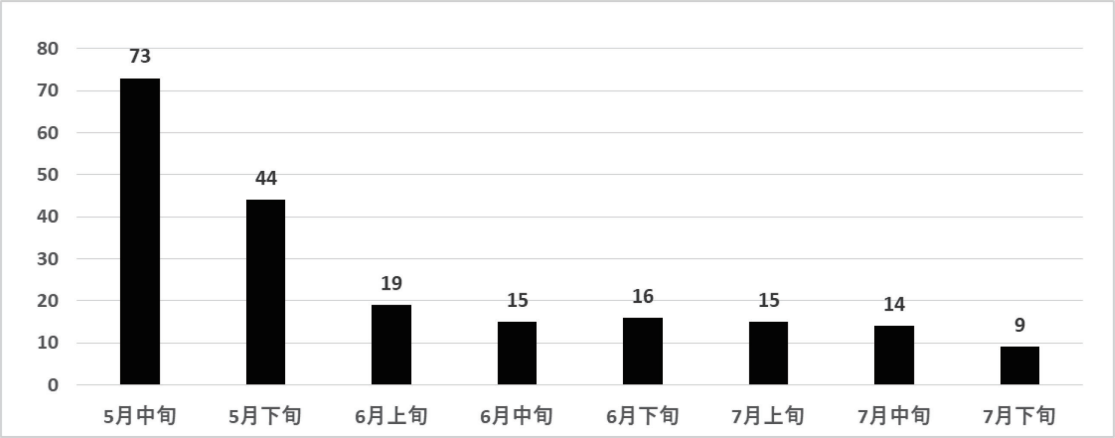


図 4　問い合わせ件数の推移

Ⅷ. 遠隔授業の有用性と今後の課題

1. 遠隔授業の有用性と課題について

Covid-19 への対応として急きょ導入された遠隔授業であったが、教科書の内容を詳細に扱うことが出来たため、健康や身体運動に関する知識や理論、スポーツに関する知識や理論を体系的に学修するうえでは有益であったと考えられる。また、レポート課題については、教科書等を中心にして知識や理論をまとめる課題とともに、運動実践を伴う課題や、自身の生活や経験を振り返る課題、社会情勢や具体的事例を調べる課題などを組み合わせて提示したことにより、知識・理論と実践の相互関係について理解を深めることが出来たのではないかと考えられる。これは用語の暗記などの知識に偏りやすい筆記試験や過去の運動経験が大きく影響する実技試験による評価を補完する意味でも重要であろう。また、高等学校までに経験してきた保健体育科の授業とは一線を画した大学という高等教育機関における体育授業の在り方を考えるうえでも重要である。そのためにも授業で扱う内容の専門性・実践性・学際性を高める必要があるだろう。一方で、2020 年春学期の遠隔授業は、各種の制約のため学修計画書によるオンデマンド形式の授業となり、動画資料の配信、教員の専門性を生かした解説や質疑応答などに対応できていない。学生の興味関心や学習意欲を高めるためにも、リアルタイムでの講義の実施や動画資料の提示などの工夫が必要である。また、今回の遠隔授

業においては実技の導入が限定的となり、実技科目としての意義を十分に果たせたとは言い難い。オンラインでの実技授業の可能性もあるが、体力・経験にばらつきが大きいうえに、学生の健康状態の把握が難しく、授業配信のシステム上でも5000 人を超える大規模授業での導入には限界がある。今後は、対面授業における感染症対策や遠隔授業との併用方法を具体的に検討する必要があるだろう。

2. 初年次教育としての健康スポーツ科目の価値について

健康スポーツ科目は初年次教育の一環として「友達づくり」を授業目的の一つとしているが、2020 年度春学期に実施したオンデマンド形式の遠隔授業では学生間の交流機会を設けることが出来ず、その目的を達成することが出来なかった。学生間の交流を生むためにも、対面形式の実技授業を設けることが必要であると思われる。また、オンライン形式による遠隔授業を設けることにより、ネットワーク上での交流が可能かどうかも検討する必要がある。

3. 教員の業務分担と専門性について

2020 年度春学期については、授業内容の統一と情報提供の一元化を図った結果、授業担当教員はレポートの採点とフィードバックが業務の中心となった。教員は健康づくりの運動や各スポーツ種目に対する高い専門性を有しており、学生のニーズに対応するうえでもその専門性を生かした授業展開が必要である。特に 2022 年度から始まる新カリキュラムでは、生涯スポーツ理論実習において実技中心の授業と講義中心の授業を設定し、学生が興味関心に応じて選択できるようにすることを検討している。その際には、学生の興味関心を高めるとともに高い学習効果を生むためにも、教員の専門性を生かした授業を展開する必要がある。

4. 特設サイトの有用性について

2020 年度春学期の遠隔授業を実施するための問題に対しては、特設サイトは十分有用であったと言える。しかし、その内容は、統一された遠隔授業を展開するうえで有効な方法に過ぎない。

本来の健康スポーツ科目は実技科目である。2021 年度以降、対面授業と遠隔授業を併用して行うためには、感染症対策などでグループ分けが必須であると考えられる。今後は、全履修者に対して一括で情報を提供するのではなく、グループ毎のスケジュールに沿って授業を実施できるよう、授業課題の提示方法を根本的に見直す必要があると考えられる。また、円滑に学修を進めるうえでも、履修者への特設サイトの周知や誘導は課題である。LMS やシラバス、時間割等において特設サイトに誘導する工夫が必要である。一方で、5,000 人を超える履修者に対して滞りなく平等に情報や授業課題を提供したり、多数の教員が LMS を操作することで生じるミスを減少させたりするためにも、引き続き特設サイトは有用であると思われ、コンテンツや情報提示の工夫改善を進める必要がある。

文献

1）文部科学省(2020) 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 .https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf （参照日 2021 年 1 月 31 日）

2）東海大学一般体育研究室(2020) 健康・フィットネスと生涯スポーツ三訂版.大修館書店

［実践報告］

World Congress on Science and Football 2019 の研究動向と海外トップチームの練習視察報告

八百　則和

Reports of Research Trends in World Congress on Science and Football 2019
And Visit Training Sessions of Professional team in Australia

by

Norikazu Yao

Abstract

This article shows the trend of research in World Congress on Science and Football 2019 in Melbourne. Various kinds of studies were conducted in any research fields. Practical research methods for footballs were shown in a workshop, these studies tend to be more applied to training or tactics structure in professional sports. In addition, the author visited training sessions in professional rugby league team, Melbourne Storm. The training intensity were high in contact training session, and the session was around 60 minutes. It was permitted to have interviews for two coaches, head coach and defense coach.

Ⅰ．はじめに

例年、ラグビーフットボール（以下ラグビー）のワールドカップがある年に World Congress on Science and Football（以下 WCSF）が開催されている。この WCSF ではサッカー、ラグビーフットボール（ユニオン：15 人制、リーグ：13 人制）、オーストラリアンフットボール、アメリカンフットボールなどのフットボールと名前がつくスポーツを中心とした学術大会である。2019 年はオーストラリアビクトリア州のメルボルンで第 9 回目の大会が開催された。そこで、この報告では、この大会で発表されていた近年のラグビーの研究の動

＊1　体育学部競技スポーツ学科

向と様々な研究方法について興味深かった研究について報告する。

また、大会の会場となった Melbourne Convention and Exhibition Centre の近くには Melbourne Sports Centres という国際的なスポーツ大会も行われているスポーツ複合施設があり、また、その近辺には様々なプロスポーツのトレーニング施設が隣接している。今回、学会発表の前後でプロのラグビーチームの練習を見学することができたため、その時のトレーニングやその後のコーチとのミーティングについて報告をする。

Ⅱ. World Congress on Science and Football

1. 最近のラグビーの研究について

World Congress on Science and Football では、フットボールに関する様々な研究が行われていた。発表は、プレーヤーの健康とウェルネス、トレーニングとモニタリング、エリートアカデミー、コーチング、分析と統計、レフリング、スポーツの社会性と文化、ビジネスマネジメントと多岐の領域に渡っていた。

私もトレーニングとモニタリングの部門でラグビープレーヤーの身体組成とトレーニングに関する研究を発表した（写真 1）。発表時には、あまりアジアのラグビー選手に関する研究が行われていなかったからか、日本人の敏捷性やクイックネスについていくつかの質問を受けた。

その他の研究では、選手の身体に関することだけでなく、心理的な側面やゲーム中のパフォーマンスに関しても細かく分析がされていた。興味深い研究としては Neil Bezodis 博士のキックの戦術に関する統計の研究である（写真 2）。Neil 博士はラグビーのプレイスキックやスプリントのスタートに関するバイオメカニクス研究を行っている[1)2)]。今回の発表では、イングランドのプロフェッショナルラグビーにおいて、キックの種類とゲームの勝敗に関する研究を行っていた。

Neil 博士の研究は研究内容がスキルトレーニングや戦術の考案に活かされているようであった。実際に、プロチームのコーチやディレクターたちともミーティングし、チームのスタッフや選手に講演などを行っているようであった。ニュージーランド代表チームでもスポーツサイエンティストとして運動生理学やスポーツ心理学の研究者がスタッフとして活躍している。2015 年のラグビーワールドカップ時の日本代表チームでも、スポーツ心理学者である荒木香織博士がメンタルコーチとして活動しており、日本代表チームにリーダーの育成や選手に今までにないマインドセットを植え付け、大会での躍進を支えていた。

写真 1　発表時の様子

写真 2　Neil Bezodis 博士のポスター

2. ワークショップ

WCSF では発表やシンポジウムの他に実践的なワークショップなどが行われた。今回はキッキングパフォーマンスについての研究手法のワークショップであったが、Neal Smith 博士のサッカーのキックに関するバイオメカニクス的な研究について、キックをするときには軸足の膝が伸びて前に飛び跳ねるような動作がキックのパワーを生み出していると報告していた [3]。また、キックのパフォーマンスは、分析、気づき、調整、自動化、確信（自信）の行程を経ており、これを介入（実験）研究させて行った結果、ボールの加速度の向上が明らかとなったことと報告していた。

また、福岡大学の布目寛幸先生はボールのインパクトに関する研究 [4]を行っているが、今回のワークショップではハイスピードカメラにてボールを蹴った瞬間を撮影し、スイングスピードが速くなるにつれてボールと足の接触時間が短くなることを報告していた。また、その場でサッカーとラグビーのキックをハイスピードカメラで撮影し比較した。サッカーボールとラグビーボールではボールの形状が異なるため、ボールにかかる圧力が変わり飛距離や方向が異なることが報告された。特に、ラグビーの場合ではボールの置き方やキックティーにより、足とボールの接触面が変わり、ボールの軌道や速度、飛距離が変わることが明らかとなった。初めて自分のキックのスローモーションを見ることができ、大変興味深いワークショップであった（写真 3）。

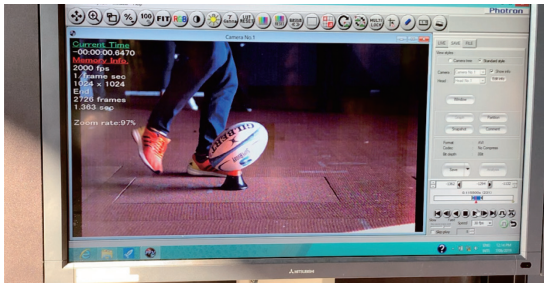


写真 3　キック時のボールインパンクト

このように、この学会で発表されていた研究のいくつかは応用・実践的な研究で、実際の指導現場やチームに還元されているようであった。

Ⅲ. トレーニング視察

1. 視察チームについて

トレーニング視察に関しては、メルボルン市内の中心に Melbourne Sports Centres という大きなスポーツ施設があり、様々なスポーツがこのエリアに集結している。オーストラリアには 4 つのフットボール（ラグビーユニオンとラグビーリーグ、オーストラリアンフットボール、サッカー）があり、このセンターにはこの 4 つのフットボールのプロチームの本拠地がこのエリアに集中しているものメルボルンの特徴でもある。それぞれのチームが隣接しているフィールドでトレーニングを行い、共有できるトレーニング施設は時間帯を分けてトレーニングを行なっている。

またすぐ隣には Melbourne Sports & Aquatic Centre (MSAC)という競泳や飛び込み競技、水球などが行えるプールがあり、またセーリングやカヌーなどオリンピック種目の競技に関してもヤラ川や近くの湖を利用してトレーニングが行われている。

写真 4　メルボルンスポーツセンター

今回の視察ではフットボール学会の前後の日程や合間の時間にこのメルボルンスポーツセンター内にあるプロのチームの練習見学やコーチとのインタービューを行なった。

すべての種目のトレーニングを見ることができたが、今回は日本ではあまり見ることができない 13 人制のラグビーリーグを中心に視察を行った。ラグビーリーグは 15 人制のラグビーユニオンよりもルールが簡素化されており、プレーが途切れることなく激しいコンタクトが繰り返されるため、高い身体能力と体力を要すると言われている。オ

ーストラリアでは 15 人制のラグビーユニオンよりも人気があり、また選手の年俸もラグビーリーグの選手の方が高いため、身体能力の高い若い選手たちがラグビーリーグのプロチームに流れてしまっている傾向がある。

今回メインで視察を行なったメルボルンストームは NRL（国内のプロリーグ）で 2006 年から 10 年以上プレーオフに進出しており、その間、8 回決勝に進出し、4 回優勝している。このチームの特徴としては Jr で育ったプレーヤーたちが活躍しており、その若い選手の育成についても高く評価されている。この視察の数日前にはラグビーのニュージーランド代表コーチが練習見学に来ていた。

写真 5　ストーム NRL 優勝トロフィー

2. 練習見学

1）ストーム練習見学

（1）トレーニングセッション 1

初日に見学したトレーニングセッションではディフェンスの練習を行っていたが、思っていた以上にコンタクトの強度が高い練習を行っていた。ケガ予防のためのトレーニングギアを装着していたが、それでもフルコンタクトに近いトレーニングを少人数のグループで休みなく 20 分ほど行っていた。3 種類のトレーニングを行なっており、1 つのドリルは 5〜7 分程度のものであった。試合 3 日前（1 日は移動日）でもかなりの強度であった。その後チーム全体のトレーニングとなり、コンタクト強度はさほど高くはなったが、その代わり 30 分ほど休むことなく動き続けており、かなりのランニングボリュームであった。その後もポジション別のトレーニングを 10 分ほど行なっており、すべての練習を合わせても 60 分ほどで終わっていた。練習時間は大変短かったが大変集中した中で高強度なトレーニングを行っていた。

【トレーニング内容】

ターゲット：ディフェンス強化

選手：26 名

コーチ 10 名程度（トレーナー含む）

① コンタクト練習 AT1 v DF3
（フルコンタクト）5 分

② 1v1 タックル
（フルコンタクト）5 分

③ 5v5—2 フェーズ
（フルコンタクト）10 分

④ チームディフェンス　30 分

⑤ ユニット　10 分
FWs：近場のアタック
BKs：ハイボールキャッチ、キックパス、アタック

写真 6　BKs ユニットトレーニング

（2）トレーニングセッション 2

2 日目のトレーニングはアタックにフォーカスを当ててトレーニングを行っていた。前日のトレーニングのようにコンタクト場面はなく、ボールハンドリングと動きの確認を行っていた。練習の途中に確認のため話し合う時間などもあり、すべてのトレーニングを合わせて 90 分ほどの練習時間であった。練習終了後、各自が自主的に練習を行なっており、それぞれの選手が試合に向けた準備をしていた。

【トレーニング内容】

ターゲット：アタック強化

選手：26 名

コーチ 10 名程度（トレーナー含む）

① 3 列パス（上がって後ろにパス）。
② 3v2（前を見てパス）
③ 2v1（30m ダッシュ。15m 付近に DF）
④ タッチ AD（13v13）
⑤ 2 フェーズ AT（8v8）
⑥ タッチ AD（13v 13）
⑦ 2 笛 AD

2. コーチとのミーティング

練習等の合間にヘッドコーチのクレイグ・ベラミー氏と DF コーチのアンドリュー・ブロワーズ氏とミーティングする時間を頂き、情報を共有することができた。

1）クレイグ・ベラミー

最初に、クレイグ・ベラミーヘッドコーチに以下の点について話をすることができた。クレイグはチームの結束力を高めるのが上手く、みんなが最後まで目標に向かって進むようにチームをまとめることができると評価されており、オーストラリアの様々な種目のコーチの中でも優秀なコーチの一人であると認められている。

（1）コーチング哲学について

クレイグコーチがコーチングで大事にしていることは「Hard　Work」で、皆がベストを尽くせるようにその環境を整え、もし選手でも、スタッフでもベストを尽くすことができない障害があるのであればそれを取り除いてあげることが重要であると話していた。そして、とにかくできるまでやる、やらせるため、様々な方法でアプローチしているとのことであった。特に、若いプレーヤーには物事をシンプルにしてあげることでハードにできるようになるとのことであった。

（2）育成年代への指導について

「もし、育成年代の選手たちにラグビーを教えるとしたらどんなことを教えるか？どんなことに注意するか？」という質問に関しては、特に育成年代の選手でもプロ選手でも教えることは変えておらず、「選手がいい人間になること」を考えて指導をするとのことであった。チームのことを考える、人のことを思いやれる、挨拶ができる人間を育てるとのことであった。

写真 7：Craig Bellamy ヘッドコーチ

実際に私がグランドで見学していると選手やスタッフが近寄ってきて、見ず知らずの私に自己紹介をしたり、挨拶をしたりしてくれていた。これは日本で日本ハムファイターズの 2 軍のキャンプに見学に行ったとき、多くの選手がわざわざ近寄ってきて挨拶をしてくれた。その中には大谷翔平選手もおり、自己紹介を含め挨拶をしてくれた。どの国でも、どの種目でも一流の選手は礼儀作法やマナーを携えていて、しっかりとした人間性を持ち合わせていた。

（3）ディフェンスについて

このメルボルンストームは、堅い守りで相手の前進を防ぎ、相手のボールを奪いそこから素早く攻撃に転じるディフェンスからゲームの流れを作るチームである。そのディフェンスについて、重要視していることを聞いたところ、体力的にも精神的にも「Tough」であることと話していた。これは、まずは身体が頑健、頑丈であることであり、身体接触が特にハードなラグビーリーグではコンタクトで怪我をしないような頑丈な身体が必要であると話していた。またタフな選手でないと痛いことや辛いことをしないで、逃げてしまうとのことであった。また、精神的には、劣勢になった状態でも最後まであきらめない、強い精神性を持った選手が必要であり、試合に出る選手の選考基準もこのタフな選手を選ぶとのことであった。いくらハンドリング（ボール操作）能力が優れていてもタックルしにいかない選手は選ばないし、選手

たちもそれがチームのカルチャーであることも知っているとのことであった。

（4）クレイグとのミーティングから

人間性の育成に関しては、国や種目、選手の年代にかかわらず、共通していることなのだと改めて考えらせられた。トップになり、そこに居続けるためには本当にその重要性を理解させ、常に選手と向き合わなければならないのであろう。クレイグヘッドコーチは練習中でも練習前後でも、とにかく選手と話している時間が多く、選手も気兼ねなく質問をしたり、確認をしたりしていた。選手とのコミュニケーションを大事にしているところは、前ラグビー日本代表、現イングランド代表のエディー・ジョーンズと同じであり、トップコーチに共通していることであると確信をもった。

2）アンドリュー・ブロワーズ DF コーチとのミーティング

（1）チームカルチャーとマインドセット

ディフェンスコーチのアンドリューブロワーズ氏とディフェンスのマインドセットについて 90 分ほど話をすることができた。

マインドセットを作るためにはまずはチームのカルチャー（文化）を知らなくてはならないとのことであった。自分たちのチームにはどんな選手やコーチが集まり、どんな環境の中にいるのかなどを正しく理解する必要があるとのことであった。集団には必ずその集団の文化があり、それをもとに固定化されたマインドセット（考え方・思考態度）が根付いているとのことであった。まずはこのチーム文化についてよく調べ､歴史や成り立ち、背景などのチームの特徴を知ることで彼らがどのようなマインドセットを持ち合わせているかを知ることが必要であるとのことであった。また、これはマインドだけに限らずスキルセット、タクティカルセットというように、それぞれの分野にわけられ、それもすべてチームの文化から成り立っているとのことである。指導者は選手のどのセットが足りていないかを理解することが重要であり、そのためにもその土台であるチームの文化、選手の育ってきた環境などについてよく知らなければならないとのことであった。

写真 8：Andrew Blowers　DF コーチ

（2）DF 強化について

先ほど述べたチームの文化からそれぞれのセットができているが、DF に関しては特にチームの文化が現れると考えているとのことであった。ラグビーのディフェンスにおいて重要なことはボールの奪回と相手の前進を防ぐことであり、状況に応じてどんなプレーを選択するかが重要であるとのことである。チームによっては、攻撃的に DF をして積極的にボールの奪回を狙うチームもあれば、とにかく相手の前進を防ぎ、相手がミスや反則、キックなどでボールを手放す時まで辛抱強くディフェンスをし続けるチームもある。ディフェンスはボールを持たないからこそ、さまざまなやり方でディフェンスすることができるので、チームのカラーが色濃く出るとのことであった。

また、タックルスキルに関しての練習方法やキーポイント､チェック項目など細かいスキルから、ボールを奪うまでの戦術やコミュニケーションの取り方など、ストームのスキルセット、タクティカルセットについて細かいところまで説明をして頂くことができた。

これらのミーティングを通じて、コーチング哲学やチームづくりの考え方、スキルや戦術、そしてそれらのトレーニングの方法などについて有益な情報を得ることができ、多くのことを学ぶことができた。

Ⅳ．まとめ

今回のオーストラリア、メルボルンでの学会発表では、多くの研究者と交流を深め、近年の研究の動向や新たな研究方法についての知識を得ることができた。

また、海外のトップチームの練習方法や戦術、チームづくりやコーチングの方法について知ることができた。

本研究は 2019 年度学部等研究補助金を受け実施されたものである。

1） Bezodis NE, Atack A, Willmott AP, Callard JEB, Trewartha G.(2019)Kicking foot swing planes and support leg kinematics in rugby place kicking: Differences between accurate and inaccurate kickers, European journal of sport science,19(4),pp451-460.
2） Bezodis NE, Walton SP, Nagahara R.(2019) Understanding the track and field sprint start through a functional analysis of the external force features which contribute to higher levels of block phase performance, Journal of sports sciences, 37(5),pp560-567.
3） Augustus S, Mundy P, Smith N.(2017) Support leg action can contribute to maximal instep soccer kick performance: an intervention study, Journal of sports sciences, 35(1),pp89-98.
4） 井上功一郎，布目寛幸，新海宏成，池上康男（2012）キック方向の変化がサッカーインステップキックのキネマティクスに及ぼす影響, Japanese journal of biomechanics in sports & exercise, 17,3pp. 110-125.

［その他］

Current Principles and Best Practices for Providing Effective Leadership in Sport and Leisure Management

by

Andrew Roomy（ルーミィ　アンドリュー）

Abstract

This paper will explore the process of developing a sport and leisure management CLIL-based leadership skills framework and rubric for a CLIL sport and leisure management course in leadership. It will attempt to do this in a way that integrates theory with practice by focusing on current principles and best practices in sport and leisure management. In order to establish a clear, concise, and comprehensive methodology by which to do this, it will look at the evolution of leadership models and how aspects of these models might be incorporated into a framework and rubric, which in turn would be used to develop materials based upon real-world case studies found in current literature.

Integrating Theory and Practice

One of the underlining premises of my teaching philosophy is that in order to master the field of sport and leisure management, students need to be able to integrate theory with practice. According to Wrenn and Wrenn (2009), “It is imperative that students in professional programs be able to put into practice what they have learned in the classroom.” (p.258) One approach to doing this is through the use of current principles and best practices in sport and leisure management. Regarding theory, and in this case, current principles, one way to facilitate the acquisition of knowledge, skills, and experience is through the use of frameworks and rubrics. Regarding practice, and in this case, best practices, one way to facilitate the acquisition of knowledge, skills, and experience is through task-based activities based upon real-world case studies. That said, it should be noted that since the English courses in our program use a content and language integrated learning approach (CLIL), these frameworks need to be simplified as much as possible in order to provide comprehensible input to our students. This is because the majority of the students in our program are EFL students and on average have a high-beginner to low-intermediate proficiency in English. As such, one of my responsibilities as an educator is to distill the complexities of sport and leisure management theory into simple and easy to grasp frameworks, rubrics, checklists, and case studies through which to teach theory and practice and therefore that is the approach I will be using in this paper. Since I am still in the

東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

preliminary stages of preparing teaching materials on leadership at this point in time, in this paper, I will attempt to establish a CLIL-based framework for leadership skills from which to later build materials on current principles and best practices for providing effective leadership in sport and leisure management from a pedagogical perspective.

Leadership as a Core Sport and Leisure Service

First of all, I would like to show how leadership skills fits into a general framework for the provision of sport and leisure management services. This is the framework I use to teach students about the basics of sport and leisure management in their first course in the English component of our program. Based upon my studies, current theory, and my research, these are the core services that sport and leisure managers provide. (See Appendix 1!) This framework was created by synthesizing several sports, recreational, and leisure delivery system frameworks, and in particular, The 10 Major Elements in the Modern Leisure-Service Delivery System found in Recreation and Leisure in Modern Society by Mclean and Hurd (McClean & Hurd, 2015). I believe that it is a simple but comprehensive model, which my students can use as the overarching framework by which to base decisions on how to allocate resources when providing these services as sport and leisure managers. From this chart, it can be seen that leadership is a core service provided by sport and leisure managers. Currently, in the CLIL component of our program, students take four courses in English, Introduction to Sports and Leisure, Event Management, Tourism, and Leisure Services. One of my goals for our program is to expand the CLIL component of our program to include a course on leadership and in this course provide students with current principles and best practices in leadership. On a related note, although one of my goals for the CLIL program is to base our curriculum on similar programs in the West, and in particular in North America, when I studied about leadership in the United States, most of the materials used was biographical in nature, such as a review of books by successful CEOs on how to be effective leaders. This approach certainly holds merit, but with regard to the leadership course, I hope to use a more quantitative approach, and by doing so, instill in students a scientific and quantifiable approach to management and leadership. Therefore, instead of focusing on famous leaders, I hope to use materials from sources such as the Harvard Business Review as the foundation for the course on leadership. By doing this, I believe that I can provide students with truly current principles and time-tested best practices.

Developing a Sport and Leisure Management CLIL-based Leadership Skills Framework

In order to create a current and practical CLIL-based sport and leisure management leadership framework, it is important to understand the evolution of leadership theory. According to Gosling, Maturano, and Dennison (2003), the evolution of leadership theory has traveled through several stages including the Great Man Theory, Trait Theories, Behaviorist Theories, Situational Theories, Contingency Theory, Transactional Theory, and Transformational Theory. (p.6) Each of these theories contains potentially useful concepts about leadership, so I will summarize them here. The Great Man Theory is the idea that great leadership is innate. In other words, it is something you are born with. As educators, when working with students, I think that we have all had experiences where we caught

ourselves saying to ourselves, 'this student is a natural leader'. I personally believe that this kind of stereotyping is problematic at best. As educators, I believe that we should try to put aside our preconceptions and avoid stereotyping or judging students. When I catch myself thinking that a student does not have what it takes to be a great leader, I stop myself, and ask myself, what can I do to provide this student with the knowledge, skills, and experience they need to develop their leadership skills. In addition, I try to expand upon and accentuate their leadership skills' strengths while at the same time addressing potential leadership skills' weaknesses. Understanding that outdated ideas of leadership, such as the Great Man Theory, still influence our concepts of leadership is a key step in arriving at a more useful and current framework by which to teach students about leadership. Therefore, from this theory we can show students the dangers of stereotyping themselves and others, while stressing the importance of recognizing how people's minds work in that many people still expect leaders to act a certain way and have a certain 'gravitas'. (Newton, 2020) By understanding how this theory affects people's behavior, students can better understand how to use this to their advantage. When I teach students about leadership, one of the points that I stress is that employees are always watching you as a leader. That is why it is important to 'walk the talk' or do as you tell others to do. (Boitnott, 2018) In order words, leaders should model the behavior they expect from the group by practicing what they preach. Therefore, our framework could include the kinds of modeling behavior a leader can use to address both 'the Bottom Line' and 'the Top Line'. In sport and leisure management, 'The Bottom Line' could be defined several ways including making a profit, providing basic public services, or meeting the needs of people with special needs. Although in business, 'the Top Line' means "gross figures reported by a company, such as sales or revenues" (Investopedia, 2020), here we are using it to talk about Convey's belief that transformational leaders should transform people and organizations for the greater good. (Stephen Convey as cited in Bolden, Marturano, & Dennison, p15)

The next theory, Trait Theory, also holds both positive and negative connotations for our framework. In this theory, leadership is broken down into individual traits that supposedly reflect the qualities of a great leader. (Gosling, Maturano, & Dennison) This a standard approach still used by many organizations. One of the issues with this theory is the assumption that people's personalities are rigid and do not change depending on the situation or state of mind of the individual. (Gosling, Maturano, & Dennison) Another issue is that traits can be difficult to define and measure. For example, how do we define brave and how do we measure 'braveness'. One thing we could consider when developing our framework is whether these traits might be useful for labeling and grouping observable and thus quantifiable behavior. For example, the act of treating people with respect could be grouped under the label of showing empathy and/or emotional intelligence. (Bariso, 2018) Instead of using a word like humble to talk about how to show empathy, we can modify these commonly used traits to describe leadership in a way that incorporate current trends in management and leadership and that focuses on quantifiable behavior. For example, treating employees with respect by taking time to listen to their feedback appears to produce positive outcomes such as building a positive work environment and culture. (Bariso, 2018) Therefore, if we were to include aspects of Trait

Theory in our framework, we might focus on how to use commonly used leadership traits as a means by which to label and group observable and quantifiable behavior that impacts both 'the Bottom Line' and 'the Top Line'.

The next group of theories, behaviorist theories, are more general theories about human behavior and do not only apply to leadership, but also to a whole swath of other fields. Since my first master's degree was in education, I have studied quite extensively about how these theories apply both to education and the CLIL approach. Regarding leadership, the basic idea is that instead of looking at the traits of effective leaders, we should look at their actual behavior. (Sharer, 2013) This ties in with my observations about Trait Theory, in that as sport and leisure managers, we want to use a scientific and quantifiable approach to leadership skills. One of the strengths of this approach is that it is potentially quantifiable in that we can sometimes measure these behaviors through observation. Therefore, if we were to include aspects of behaviorist theories in our framework, we could emphasize the importance of using a quantifiable approach in our framework through evaluating behavior in a systematic and scientific manner to determine the effectiveness of an individual's leadership skills.

The next two theories, situational leadership and Contingency Theory, focus on which style of leadership to use depending on the situation. In the Tannenbaum & Schmidt's Leadership Continuum, there are four main leadership styles, which "can be located along such a continuum." (Gosling, Maturano, & Dennison, p10). For CLIL purposes, I have simplified this model to three points, autocratic, democratic, and laissez-faire. (See Appendix 2!) Using a simplified version of their model, leadership approaches can be thought of as points on a spectrum with the autocratic approach being the leader telling the group what to do, the democratic approach being the leader negotiating with the group on what to do, and the laisses faire approach being the leader leaving it up to the group members to decide what to do. One of the strengths of this approach is that it shows the importance of adjusting one's leadership skills and approaches to the situation at hand. Therefore, if we were to include aspects of situational leadership in our framework, we could emphasize the importance of considering the various interactions between the leader, members of the group and the situations where these interactions occur when deciding on which style of leadership to use.

I would like to finish this section of the paper by comparing the two most current and commonly used leadership theories, Transactional Theory and Transformational Theory. Transactional Theory focuses on the relationship between the leader and the group and the mutual benefits that arise from their mutual 'contract'. This theory has long been the traditional model for leadership in many organizations. It focuses on 'the Bottom Line', clear roles, and hard data. In comparison, the Transformational Theory can be said to focus on 'the Top Line', or the greater good, be that society's greater good, the organization's greater good, or the group's greater good. According to Gosling, Maturano, and Dennison, this theory focuses on transforming people and organizations "with a sense of purpose that goes beyond a simple exchange of rewards for effort provided". (p.16) One of the strengths of the transactional and transformational theories is that these are current leadership practices used by many people and organization all over the world. (Gosling, Maturano, and Dennison) Therefore, if we were to

include aspects of transactional and transformational leadership in our framework, we could emphasize the importance of finding the perfect balance between 'the Bottom Line' and 'the Top Line'. This is especially true in sport and leisure management since so much of organizations' success depend on the customer or client's experience.

From a review of the evolution of leadership theory, a sport and leisure management CLIL-based Leadership Skills Framework should allow students to quantify their impact on both 'the Bottom Line' and 'the Top Line'. This impact is determined by their interaction with the group. Therefore, the framework should show that it is the leader's interaction with the group that determines the effectiveness of their actions on 'the Bottom Line' and 'the Top Line'. (See Appendix 3!) One way to do this might be a rubric that evaluates a leader's strategies and tactics and their impact 'the Bottom Line' and 'the Top Line'. A simple CLIL breakdown of tactics and strategies might start by stressing the difference between a manager and a leader. (See Appendix 4!) Then, these differences could be used to define leadership strategies and tactics in a CLIL-Leadership Skills Rubric. For example, a focus on people could be broken down into strategies such as motivating, rewarding, and discipling members of the group. Each of these categories could be further broken down into sub-frameworks and sub-rubrics. (See Appendix 5!) To test whether this rubric can be applied to current literature on leadership, I used key terms like motivating, rewarding, and discipling, to search the Harvard Business Review premium subscription for related books, articles, and resources. I also did a quick scan of the latest articles on leadership to see whether they could be integrated into this rubric. Since this project is still in its early stages, I recognize that this framework and the corresponding rubric will need to be revised and adjusted as I work my way through the thousands of articles on leadership in the HBR premium subscription database. However, this allows me to accomplish several objectives at the same time: one, I can test and revised my CLIL-based leadership skills framework and rubric by trying to incorporate real-world case studies into the framework and rubric; two, I can begin the process of building a collection of CLIL task-based 'best practices' case studies using current real-world cases from an authentic and relevant source, HBR; and three, I can learn more about leadership and thus share what I have learned with students using the CLIL approach.

Conclusion

Now that I have begun the process of establish a CLIL-based framework and rubric for leadership skills in sport and leisure management. The next step is to begin sifting through the thousands of resources connected to leadership in the HBR premium subscription database. Hopefully, this approach will allow me to categorize, sort, and adapt these resources to the needs of my students in an efficient and effective manner by having established a clear, consistent, and cohesive methodology by which to integrate theory with practice through current principles and best practices.

References

1) Bariso, J. (2018). Emotionally Intelligent People Know How to Earn Respect. Here's How They Do It. Retrieved from https://www.inc.com/justin-bariso/emotionally-intelligent-people-know-how-to-earn-respect-heres-how-they-do-it.html

2) Boitnott, J. (2018). Why It's Crucial to Walk the Talk as a Business Leader. Retrieved from https://www.entrepreneur.com/article/323457#:~:text=The%20core%20of%20%E2%80%9Cwalking

%20the,on%20the%20new%20changes%20too.

3) Gosling, B., Marturano, A., & Dennison, P. (2003). A Review of Leadership Theory and Competency Frameworks. Retrieved from http://www.rtuni.org/uploads/docs/A%20REVIEW%20OF%20LEADERSHIP%20THEORY%20AND%20COMPETENCY%20FRAMEWORKS.pdf

4) Investopedia (2020). Top Line. Retrieved from https://www.investopedia.com/terms/t/topline.asp

5) McLean, D., & Hurd, A. (2015) Recreation and Leisure in Modern Society. 10th Edition. Jones & Bartlett Learning

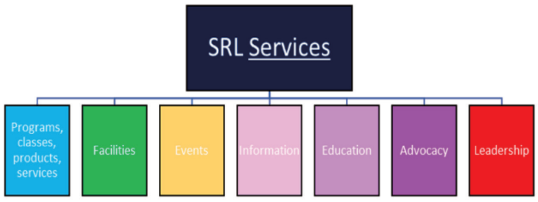
6) Newton, R. (2020). Gravitas Is a Quality You Can Develop. Retrieved from https://hbr.org/2020/09/gravitas-is-a-quality-you-can-develop

7) Sharer, K. (2013). How Should Your Leaders Behave? Retrieved from https://hbr.org/2013/10/how-should-your-leaders-behave

8) Wrenn, J., & Wrenn, B. (2009). Enhancing Learning by Integrating Theory and Practice. Retrieved from https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ899313.pdf

Appendixes

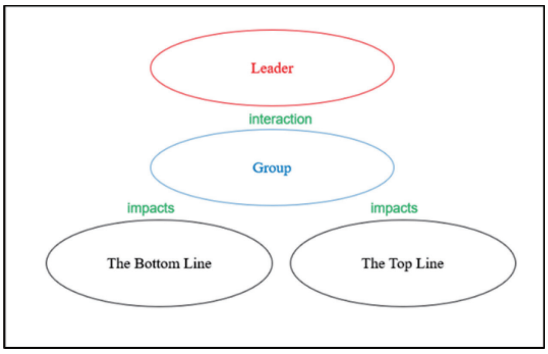
Appendix 1: The Provision of Sport, Recreational, and Leisure Services



Appendix 2: CLIL-based Leadership Approaches

Autocratic	Democratic	Laissez-faire
Do this!	*What do you think we should do?*	*Do as you like!*

Appendix 3: CLIL-based Leadership Skills Framework



Appendix 4: CLIL-based Differences Between a Manager and a Leader

The Differences Between a Manager and a Leader		
Managers focus on systems.	(vs)	Leaders focus on people.
Managers create goals.		Leaders create a vision.
Managers try to improve things.		Leaders try to change things.
Managers control risks.		Leaders take risks
Managers think short term.		Leaders think long term.

Appendix 5: CLIL-based Leadership Skills Rubric

CLIL-based Leadership Skills Rubric				
Strategies & Tactics		Impact on the Bottom Line	Impact on the Top line	Score
		Highly effective to highly ineffective (10 - 0)	Highly effective to highly ineffective (10 - 0)	
1. Focus on People	a. motivating members of the group			
	b. rewarding members of the group			
	c. discipling members of the group			

［その他］

心理サポートの実践と研究に関する思案

-日本スポーツ心理学会第 47 回大会キーノートレクチャーの振り返り-

武田大輔

Considerations on psychological support practice and research
-Reflections on the Keynote at the 47th Annual Conference of the Japanese Society of Sport Psychology-

by

Daisuke Takeda

Abstract

The purpose of this paper is to record in print what I am currently thinking about, which arose from my struggles with the practice and research of psychological support that I discussed at the conference. I argued that the challenge was how to express the materials with characteristics such as the "continuity of the one and only time" obtained in psychological support practice as case studies, and the value of papers that work on human activities. In order to achieve this, it is important to enrich the case studies, which play a role in the back-and-forth thinking process regarding psychological support practice and research. Finally, the paper concludes with an additional personal argument about the unique value of university bulletins.

Ⅰ．はじめに

筆者は 2020 年 11 月に行われた日本スポーツ心理学会第 47 回大会にてキーノートの演者を仰せつかった．そこで筆者の語った内容を振り返りながら活字に起こし，その記録を遺すことが本稿の目的である．大学教員の日々の取り組みを活字化して遺す試みは，将来的な学術的発展あるいは社会貢献へ向けた繋ぎ的役割として有益であると考える．論述の中には，本旨から外れた内容がところどころ散見されるが，語り手がその場その時に語ったことであるため,含めて記載した.それは，一見無駄に思えることに何らかの意味があると考えるからである．

さて，学会会長と筆者が担ったキーノートの大きなテーマは「科学としてのスポーツ心理学とその研究（者）倫理」であった．筆者は「実践経験から学問に貢献する,そして再び実践へ」と題し，筆者自身の専門的生業として自覚している心理サポートの実践を振り返り，そして本テーマに対しての私見を述べることで，自身の使命を果たそうとした．その理由は，スポーツカウンセリングやスポーツメンタルトレーニングといったアプロー

＊1　東海大学体育学部生涯スポーツ学科

チでもってアスリートに対する心理的支援を行う実践家としてのアイデンティティが大きいからである．研究者と指導者の2足の草鞋を履くコーチング領域の大学教員ならば，筆者の思いあるいは苦悩を理解されるかもしれない．

次節では，発表当日に示したスライド資料の見出しに沿って振り返りたい．

Ⅱ．実践経験から学問に貢献する，そして再び実践へ-キーノートの内容-

1．研究者としての未熟さの痛感～登壇の背景

筆者の登壇の経緯を最初に紹介する．きっかけは少し遡り2018年11月に仙台市で行われた公開講座であった．公開講座について補足すると，スポーツ心理学について，一般市民の方に広く知ってもらうための努力が学会として必要であるとの意向から，毎年1回いずれかの地域に対して3名ほどの学会員が訪れ,講座を開催するものである．内容については，スポーツ心理学の概要だけでなく，運動学習やスポーツ社会心理，健康スポーツ心理，あるいは実践に近い領域のメンタルトレーニングやスポーツカウンセリングなどの各専門領域について，できる限りわかりやすく伝えるものであり，2017年から始められた[註1)]．筆者は，第2回公開講座に，現スポーツ心理学会長である山本裕二教授（名古屋大学）と現理事長の筒井清次郎教授（東海学園大学）の二人の先生と一緒に参加した．この時に筆者は，お二人の話す内容に感銘を受けるのと同時に，自身の研究者としての未熟さを痛感したのである.これは鮮明に覚えている．何に感銘を受けたのかというと，二人の先生の話す内容が，ご自身がそれまでに積み重ねられてきた長年の研究の成果に基づいているということであった.「自分で気付けば運動はうまくなる」と「子どものやる気の育て方と発達に応じた体力トレーニング」がそれぞれのテーマであったが，スポーツ心理学に関する専門書やテキストを読んで，その内容を伝えるということでなく，またあるいはその時々の流行のものを伝えるということでもなく，ご自身の研究をベースに紹介しながら，一般の方々に伝わる言葉を選んでお話しされていたのである．その時に，本来，研究者あるいは教授とは,このような先生方のことを指すのだと感じた．

筆者の発表についてもそれなりの評価はいただいた．しかし，それ以上に心に引っかかること，あるいは情けなく感じていたことは，筆者の実践やその経験について，学術的に発表（論文化）できていないという思いだった．筆者自身を振り返ると，たしかに，多くの心理サポート実践を経験し，実践家としての専門的訓練も継続して積み重ねてきたという自負はある．たとえば，心理サポート実践の領域では，自身の実践を多角的に振り返る事例（ケース）検討という訓練の場がある．実践者のサポート事例を熟練した専門家が同席する集団の中で報告し，意見を求める場である．他の専門家の発表を聞きながら,“このクライエント[註2)]はそろそろ怪我をするだろう”，あるいは“そろそろ新たなパフォーマンスを構築するだろう”など，ケースが展開していく中で，今後起こりうることも予期できるようになってきた．いわゆる“ケースを読むこと”ができるようになった．もちろん，筆者自身の実践においても，目の前にするクライエントの内界（心の深層の様相）の動きも把握できる実力が備わったと思う．ところが，改めて自身を振り返ったときに，自身の実践を学術論文として発表できていない事実と向き合わざるを得なかったのである．さらには，現在の学術論文の価値基準の中で，どのように発表したら良いのだろうか，その方法すらわからないでいるという状態であった．

当初，筆者はこのキーノートの登壇を躊躇し，演者として相応しくないと考えていた．なぜなら筆者の考えるキーノートとは，一人の研究者が，ひとつのテーマにじっくりと向き合い，何らかの現象を深く掘り下げ，一貫した論を提示するという，縦方向への積み重ねのようなものであったからである．研究の積み重ねに乏しい筆者には相応しくないと考えていた．しかし残念なことに，それを理由に辞退する勇気もなかった．そのようなときに「今考えていることを好き勝手に話せばいいんですよ」との同年代の同志からの言葉に支えられ，それならば今日において筆者自身が苦悩していることを話そうと決意したのであった．

ここで今一度会長から提示されたこのキーノー

トの趣旨に戻りたい．

2．わからなさの共有，悩み続ける場～企画趣旨

ここでは，学会大会 2 号通信[1]と大会抄録集[2]に記載された山本会長による企画趣旨を契機に考えたことを述べる．

最初に「スポーツ心理学が社会に役立っているのか？」という根本的な問題提起をされた．たしかに，メンタルトレーニングといった言葉は広く知れ渡っているのかもしれない．しかし，それはすべてがスポーツ心理学の知見に基づくことによるのだろうか．なんとなくわかりやすいものや，それほど専門に学ばなくても理解できるだろう内容だけが切り取られ，そしてさらには，専門家が言うのだから正しいのだろうという印象に強く影響され，世の中に浸透している可能性の方が大きいように感じる.たとえば,目標設定技法などは,その言葉の意味や響きだけからも，スポーツの文脈でも，あるいはそれ以外の日常の文脈においても役立つだろうと，簡単に誰にでも想像できるため，何の疑いもなくメンタルトレーニングプログラムに組み込まれ，トレーニングが行われるだろう．しかし，強迫的なパーソナリティを持つ選手や，あるいは主体性に乏しく，他者に従順な生き方をしている選手などには，発達上の心理的課題をさらに深刻なものにしてしまう可能性もある．そのようなことは，あまり一般的には知られていないように思う．

次に会長は，科学界でのスポーツ心理学の認知度についても触れており，十分な認知はされていないと述べている．この指摘からは，一時期，世間で話題となっていた日本学術会議を思い出した．2020 年 6 月に，日本学術会議主催の学術フォーラムで「人生におけるスポーツの価値と科学的エビデンス」というテーマの会議が行われた．筆者としては，学術会議がスポーツや運動に関わるテーマを取り上げたことに驚き，Web 会議に視聴者として参加した．登壇者には，日本スポーツ心理学会会員はもちろんその他の体育・スポーツ科学，あるいは医学の有識者らがそれぞれの専門性からの知見を紹介していた．その内容はここでは触れないが，筆者が最も印象に残ったのは別のことであった．当時の学術会議の役職者のひとりが，会議の総括を語ったのだが，その内容から筆者は残念な思いに至ったのである．その内容とは，端的に言えば，体育・スポーツ科学の研究が学問として同じ土俵にはないといったことであった．筆者の個人的価値観に依る受け止め方であること，また発言者においては素朴な感想だったことを念のために加えておく．いずれにせよ，スポーツ心理学を含む体育・スポーツ界の学術的な発信の課題であると感じた．そもそも学術会議の委員会やそのメンバー構成をみれば，学術界における体育・スポーツ科学の位置づけが想像されるだろう．

今一度，スポーツ心理学会山本会長による問題提起に立ち返りたい．会員が研究者として，どのような貢献ができるのかという問いである．筆者の専門領域は繰り返し紹介したように実践ありきの領域である．会長によるこの問題提起は，メンタルトレーニングやスポーツカウンセリングを行う者は，実践者であると同時に研究者でもあり，実践を研究として積み重ねる必要があるということを示している．学術団体が認定する資格である認定スポーツメンタルトレーニング指導士は，研究もしなくてはいけないのである．ここに自称専門家との大きな違いがあり，責任の質に帰する．

残念ながら現状においては，心理サポート実践を主たる活動にしている会員によって発表された研究に対する苦言をよく耳にする．さらに耳が痛くなる指摘に,「基礎研究ができない応用研究者というのは,その応用研究を疑ってみる必要がある」や「後生でも読むことのできる論文がなければ,協調も競合もない」がある．これらの指摘に対しては，真摯に反省しなければならない．学会の場は，理想的には会長の言う「わからなさを共有して,一緒に悩み続けるための場」といった雰囲気・土壌のあるものになっていくことが望まれる．それ相応の研究テーマの設定や知見の積み重ねが急務である．少なくとも，心理サポート実践の実施報告のみを行い，試合の勝ち負けや選手のポジティブな自己報告でもって，実践者自身の活動を肯定的に評価し保障する場，あるいは承認欲求を満たす場ではあってはならない．さらには安易な研究発表を乱立させ，学術的業績の数量的荒稼ぎの

場ともなってはならない．

次項では，社会から信頼される学会としてひとつの指標となり得るエビデンスについて触れてみたい．

3. エビデンスの再考

今日においては，あらゆるところで「エビデンス」という言葉を聞くようになった．たとえば，新型コロナウイルスによってもたらされた新たな生活様式へ転換が求められる最近において，毎日のようにメディアに登場する専門家が，“このデータによると・・・”，“このデータをこのように読むと・・・”のように，おそらくエビデンスのあるだろう発表に基づき，国民にわかりやすく説明しようとしている．しかしながら，時には，“この専門分野の視点においては，○○であるが，別の観点からすると，△△といったように，このデータは信頼できない・・・”のように，多くの発表があるけれども，すべて完全に完璧に納得のいく，あるいは社会の動きを方向付ける決定的な研究はないようだ．それほど研究とは難しいものであるし，出てきたデータを解釈するのも簡単ではないと感じる．疫学などのように高い基準での科学的なエビデンスが重要とされる分野でも，解釈や理解が難しいことであるのに，人の心といった形のない曖昧なものを研究対象とする場合，あるいは心に限定することなく，人を対象とした研究領域においては，何をもってエビデンスと言っているのかを，研究者自身がまずは考えることが大切である．後にも触れるが，個人の主観や経験に基づいたものはエビデンスの担保された研究あるいは学術論文としては相応しくないとされる風潮がある．たしかに，現場の指導者が，自身の主観や経験にだけたより，“この子は殴って育てたから，大成したんだ”，“これは体罰ではない．本人も殴られて良かったと言っている”などのようなことを今でも耳にすることがある．これに対して，専門家が科学的根拠に基づいた理論や知見を丁寧に繰り返し説明し，なぜ暴力がいけないのかを説いていく必要はあろう．もし，指導者らの主観や経験に学術的エビデンスに基づいた知識が備われば，その指導者にとっても，その指導者に指導を受ける子ども達にとっても有益なことに繋がると期待できる．しかし一方で，それはエビデンスと言えるのかということもある．たとえば，どのような類いの雑誌に載っていても，それはすべてエビデンスと言えるのだろうか．あるいは著名な大学教授が言っていたから，それはエビデンスであるとなりうるのか．つまらない冗談のように読者は思うかもしれないが，実際にそのようなことは身の回りに起きている．新聞やインターネット上の記事などでは「この種のテーマに詳しい○○大学△△教授によると」という前置きがあり，わざわざカギ括弧で括られて，その教授が語ったとされるコメントが載っていることがある．その内容には，専門家でなくても言えるようなものもある．おそらく，その教授は掲載されたコメント以上のことを話されているのかもしれないが，世に出た記事には浅はかなところだけが切り取られて載っている．それでも，“著名な教授が言うのだから”，ということで世間の人々の信念や価値観の支えになっていく．これは専門家の発信するその責任の大きさを示している．

一方で，学術的なところでは，狭義の科学観が学術論文の発表に影響を与えていると思われる．当然ながら，科学の中で大切にされているのは，普遍性，論理性，客観性，再現性など，大学院教育を受けたものであれば，誰しもが学んできたものである． 筆者は，スポーツ心理学会の編集委員会委員を拝命し，業務の担当としては，筆者が専門とする応用あるいは臨床領域に関する投稿論文について，その内容を確認し，相応しい査読者を選定することにある．投稿された論文に関して，たとえば方法論においては，質問紙を用いたものや，インタビューを用いたもの，あるいは実践から得られたデータを用いたものなど多岐にわたる．当然ながら，普遍性，論理性を意識して，研究の構成を立てるのは大切なことである．ところが，客観性あるいは再現性などに強く意識が囚われてしまうと研究そのものが成立しなくなる．特に，現場で起こっていることを記述していく方法では，この狭義の科学観では研究の俎上にあげていくことすら難しいのではないかと考える．もちろん，安易な研究は論外である．たとえば，努力して有

機的なデータを得たにも関わらず，それを最小単位のユニットに分解し，トライアンギュレーションなどによってカテゴライズあるいは妥当性を担保しようする．そしてその結果，無機質なデータのまとまりとなり，そこから得られた概念が極めて抽象的となる．主張としては理解できるが，それがいったいどのように役立つのかといった印象に繋がる論稿もある．言い換えるなら，現場で起きている事象を“身をもって”感じているのだが，その実感にまで響かないのである．本稿では，特定の方法論や個別の研究を例に挙げることは控えるが，有機的なデータが，言い換えれば，人間の営みのリアリティに迫ることのできるデータが，本質から遠ざかり無機質なものとして捉えられることに，筆者は残念に思うのである．

では，どのように表現したらよいのだろうか．これがとても難しく，筆者自身も悩んでいる．執拗に繰り返すが，筆者の専門とする領域は実践ありきである．人と人との密な関係がベースである．したがって，研究資料は筆者の主観を通したデータとならざるを得ない．ところが，それを何の策もなく主観にのみ頼って表現することでは，何かが足りないとも感じている．“それはあなたの思い込みでしょう”とは言わせないような，主観を通して記述されたものだからこその価値を見いだす作業に日々取り組んでいる．

先に述べた狭義の科学観の支配はとても大きいと感じる．精神分析の始祖であるフロイトは，無意識の概念を提唱したことでよく知られている．フロイトを契機に，無意識というものがあるという前提でいくつかの理論が発展し，実際に治療場面などで役立ってきたことは多くの人が認めるところである．無意識のようないわゆる科学的なアプローチでは説明が難しい概念でさえ，フロイトは治療の実践においても，あるいは自身の論を展開することにおいても科学的な態度を終身に据えたようだ[3)]．そのくらい科学観というのは我々の研究活動に影響を与えているのだと思う．

エビデンスに戻るが，それぞれの立場で使っているエビデンスというものを，研究者自身が改めて考える必要がある．その思考の手がかりの一つに，研究者自身が分析しようとする資料の特徴を改めて考えることが挙げられる．当然のことであるとのお叱りを受けるかもしれないが，その当たり前のことを改めて考えることが求められていると思う．

次項では，筆者の専門性を整理しながら，筆者にとってのエビデンスをまとめたいと思う．

4. 筆者の専門性の整理-実践の基本的態度-

ここからは極めて個人的なことになってくる[註3)]．筆者にとって，アスリートへの心理的支援は重要な仕事である．スポーツメンタルトレーニングやスポーツカウンセリングを主な拠り所としているが，ここでは便宜的に「心理サポート」と呼んでいる．研究を行うにあたっては，心理サポートの実践を通じて体験したことから，研究のテーマを設定することになる．あるいは実践を行っていると必然的に研究テーマに導かれるとも実感している．したがって研究を行うにあたっては，心理サポート実践がないと成立しない．ところが，心理サポートでは，実践者自身が考えた仮説を確かめるために，実験的な手続きを行い検証するといった，いわゆる科学的な実証研究の手続きとはなりえない．実践であるため「目の前にする人（選手）」あるいは「目の前にするチーム」との関わりがある．深く密な対象との関係がベースにあり実践は行われる．人に関わるあるいは集団に関わるという生業のため，心理の専門家としての“基本的な態度”を自覚することは重要である．その態度の一部を担う心理支援の立場にはさまざまあり，認知行動，精神分析，分析心理，実存心理など多岐にわたる．実践者が何らかの理論をベースにするのは自然なことである．現在においては，いくつかの理論を折衷するような態度や信念をもつ実践家もいる．筆者自身はというと，この理論的ベースがそれほどはっきりとはしていない．スポーツ心理学会員の抱く筆者に対する印象には，ユング（分析心理）的な立場があるのかもしれないが，筆者自身はユング派であるとは恐れ多くて言えないと思っており，むしろその志向は微塵もない．現在においては，分析心理学を中心に学ばれた臨床心理士でさえも，純粋なユング派（ユンギアン）を自称する者は少数ではないかと思う．このあた

りは，心理臨床の歴史的流れにも関わることであるので，これ以上は触れない．元に戻って，やはり実践家としては基本的な態度を時折自覚する必要はあるだろう．あえて筆者自身が何を拠り所としているかといえば，臨床心理学で著名な河合隼雄先生の考えに大きな影響を受けていると言える．筆者が大学生の頃は，カウンセリングや臨床という言葉をまったく知らなかった．カウンセリングなどは，有識者であり先生と呼ばれる人達が，困った人に何らかの助言をするという程度にしか考えていなかったかもしれない．思春期での個人的なことでさらに告白すれば，カウンセリングとかそういった胡散臭いものに対する嫌悪感すらあった．ところが，大学3年生の終わり頃と記憶しているが，心理臨床とは異なる文脈で河合隼雄先生を知ることになる．筆者は当時，子ども達のサッカーの指導者をしていた．サッカーを通じて子どもたちが成長していく，社会性を身につけていくことに関心があった．子ども達の成長の魅力にのめり込むと同時に，何か子どものスポーツに足りないものがあるように感じていた．その時に，ある先生から河合隼雄先生の「子どもと学校」という文庫本を紹介された．それを読んだときにとても感銘を受けたのが，現在の仕事に繋がるきっかけのひとつとなった．少し話は逸れたが，とにかく筆者が河合隼雄先生に影響を受けていることは間違いない．そのため，実践を行う際には，河合先生の心理支援の基本的態度を意識している．その態度の対象は「目の前にいる人」，「関わる人」あるいは「チームという集団」でも同じ意味合いである．その目の前にいる人に対して，「いまできる最善のことは何か」をしっかりと考え，その人に役立つことをしていく[4]，といった極めてシンプルな態度である．ところがこれがとても難しい．“試合で緊張する”，“コーチと合わない”，“今までできていた技ができなくなった”，あるいは“漠然とメンタルトレーニングを教えてほしい”といった理由で選手は心理サポートを求めやってくる．これらを主訴と呼ぶ．専門家でなければおそらくこのような主訴に対して，“リラクゼーション技法を教えよう”とか，“ポジティブシンキングの方法を学ばせよう”などと，なんとなく役に立ちそうな心理技法をマニュアルに沿って指導するだろう．心理サポート実践の初学者が“テキストに書かれているメンタルトレーニングのパッケージを提供しているのに，どうも選手が変わらない”と平気で言うらしい．さらに残念なこととしては，“うまくいかないのは，選手が真面目にメンタルトレーニングをしていないからだ”とか，“メンタルトレーニングを実践しても変化がないのは，その選手のメンタルが弱いからだ”などと言う者もいる．実はこれは初学者だけに限らない．再び話が逸れてきたので本題に戻る．いずれの立場であっても，主訴を聴きその背景を尋ねていく．すると，“なぜこの人は今こんなことで苦しむのだろうか”，“苦しみを訴えてはいるけれども，それはある意味必然に感じる”，“この苦悩にはなんらかの意味がありそうだ”などという思いが生じてくる．そしてこのようなことを真剣に考えていけばいくほど，もっと根本的なものに直面することになる．目の前の人に役立つことを考えることは，人間存在の意味を問うような，哲学領域の人達が古くから立ち向かっている問題にも触れることになる．おそらく真剣に心理サポートに取り組んでいる専門家は，そのような哲学的な問いに対する葛藤に導かれる体験をしていると思う．またこれは，研究者としてのアイデンティティーが大きい者でも同じではないかと思う．研究者それぞれが大切にしているテーマに取り組み，何かがわかれば，同時にそれ以上にわらかないことが出てくる．それを繰り返すと，人間存在とは何かという類いの思いに辿り着くだろう．ただし，あまりに哲学的な問いへの探求にはまってしまうと，それこそ目の前にする人に対する仕事ができなくなってしまう．筆者はそのような危機を何度か経験している．考えざるを得ないけれども，実践家本人が壊れるギリギリのところで，距離を置くことも必要なことと感じている．

実践者それぞれの有する基本的態度に支えられて実践を行うのだが，研究に必要となる実践から得られるデータには特徴がある．その始まりは，何らかの主訴で心理サポートを求めてやってきた競技者に関わることである．そこには，筆者と競技者との唯一の関係性ができてくる．心理サポー

トの中で展開されるものは，他とは比較できない競技者と筆者との固有の関係性だからこそ生じた現象となる．この関係性を基盤とした人間同士の営みであるという特徴を活かして，研究テーマに取り組んでいく．また心理サポートは，一回で終わることはそれほどなく，複数回継続していく．長いものでは数年の関わりになることもある．その時々の一回のセッション（関わり）は再現することのできない一度限りのものである．その一回の関わり方次第で相手の動きが変わるし，また相手の反応によって，関わり手の側も何らかの影響を受ける．そして，その次の回に，さらにまたその次の回にと繋がっていく．当然ながら，やり直しはない．唯一無二の時間を競技者と共に過ごすということである．その一回に伴いまた次の展開がやってくる．その連続ということである．つまり，「唯一無二の時間の連続性」という特徴を持つのが筆者の得る資料である．そして，対峙する専門家と競技者のそれぞれが体験するその瞬間，空間はそれぞれにとって生の体験である．そして，スポーツ文化に身を置いてきた両者だからこそ，身体性を伴う関わりに含まれた“生の体験”は特異であろう．ここに体育・スポーツの独自性があると筆者は考えている．心理サポートの場で語られる競技者の体験は，その語られた時にはすでに経験となっているのかもしれない．当然ながら，体験の主体は身体性を備えた人間であり，語られた経験はすでに何らかの意識的な機能が加わっている．ところが，体験の方は，そこに「からだ」という漢字が備わっていることからも，競技者の身体体験はより生に近い，まさに体験そのものだと考えられる[註4)]．一般の人々よりも自身の身体との相互性の強いアスリートだからこそ，彼らの身体を通した体験というのは，生に近いという表現でいいのかはわからないが，心と体の総体としての人間の営みに近い感覚が得られているのではないかと考えている[註5)]．これは心理サポート実践の筆者の実感によるところが大きいのだが，大切な概念と捉えている．

学会の抄録集には，心理サポート実践から得られた主観による資料をどのように分析資料として扱い，どのようにアウトプットしたら良いのかがわからず悩んでいると記した[10)]．大きな括りでいうと質的研究，その中でも事例研究としてアウトプットすることになるが，研究としてまとめていく前段階の作業として，重要な位置づけとなる「事例検討」について次に触れる．

5. 実践の振り返りに不可欠な事例検討

実験により得た数値を，あるいは社会調査で得られたビックデータを統計的に分析するなどが，科学研究では主たる分析方法になっている．そして，テクノロジーが発展したことで，これらの分析装置はかなり高度な計算ができるようになっている．ところが，筆者の専門領域での主たる方法論は事例研究である．この場合は，先に示した分析装置とは異なり，分析装置が実践者自身であるというかなり特異な性質を持つ．したがって，分析装置そのものものをアップデートするためには，実践者自身がアップデートされなくてはいけない．これは単に実践経験を多く積めばよいという単純なものではない．実践者が訓練を積むことでしか，分析装置としての能力は向上しないのである．そしてこの訓練にあたるもののひとつが事例検討である[11)]．

すでに１項でも触れたが改めて事例検討に関わる一連の手続きを端的に説明する．まず実践者が自身の実践の様子を詳細に逐語化し，資料を作成する．その資料を経験豊富な者を含んだ複数名の専門家の集まる場にて読み上げる形で提示する．読み手の側は，語り手となる事例提供者の声を聞きながら，その資料を味わうことになる．すると，実践者とアスリートとの間でどのような関わりが行われていたのかを想像することができる．この読み手が想像することのできる資料を作成することが，実践家には求められる．その作業プロセスには，繰り返された省察を経て事例が“揉まれる”ことが必要となる[12)]．

ところで，事例検討を誤解している専門家もいる．スポーツに深く関わってきた者だからか，“勝ったから良い，負けたから失敗”のような二者択一的な考えが先行するようだ．心という見えない事象を扱うわけであり，そもそも単純な良し悪しを決定づけることは難しく，またさほど有益でな

い．そうではなく事例検討においては，提示された事例の中で，関わり手とアスリートとの間で展開された現象には，どのようなプロセスが流れていたのか,そこにはどのような意味があったのか,あるいはどのような物語が流れているのかなど,さまざまな視点からの読みや解釈が提示されるのである.それはどれが正しいと言うことではない.指定討論者のコメントがいかにも正解かのように受け取る人もいるようだがそれも違う．その場で提示されたさまざまな解釈や意見によって，事例の提供者だけでなく,聞き手の人達の“心が動く”ことが大切である．事例提供者の場合では，資料作成の段階で，提供者自身の読みなどができてくる．しかし，事例検討の場で，その読みに変化が生じてくる．自身では思いもよらなかったことが新たに加わったり，あるいは自身の読みにさらなる色合いがついたりなど，このような動きがあるからこそ，分析装置自身である実践者の能力が磨かれていくのである．聞き手においても同様である．他者の事例を読み，そこでの展開を想起することで，聞き手自身のサポート経験が喚起され，そしてそれをその他の視点から振り返るきっかけとなる動きが生じる.この動きが大切なのである.

このような事例検討の場を通過した後に，事例研究としてアウトプットされたものが，ひとつの価値ある論文として認められても良いのではないかと考える．事例検討を経て出版された論文は，おそらくは事例検討の場で提示された意見や解釈により何らかの加工が加えられ，ある種のテーマを考えるに相応しい内容としてまとめられている.読者がそのような論文を目にすることで，次の実践に活かされてもよいだろうし，研究活動におけるインスピレーションとなってもよいだろう．筆者の現状の課題としてはこの論文化である.

事例検討での体験について，それ自体を言葉にすることは難しいのだが，次のような例から想像してもらいたい.

6. こころとからだが動く

ここで紹介する例は，読売新聞の編集手帳というコラム（2020 年 10 月 17 日）にあった記事からである．この記事を読んでいた時に，事例検討や事例研究の魅力に似ていると直感的に感じたので紹介する．もちろん執筆者の記者は，異なる文脈でこのコラムを書かれている．このコラムでは，北村薫さんという作家さんの著作の一部を用いられており，それは小学生の書いた詩であった.

＜ある小学生の詩＞

ぼくが　くりのいがいがを　手でもったら　とても　いたかったよって　ママにはなしたら　ママが　いたそうねって顔をしかめた　ママってかわそうだね　おはなしをきいただけで　いたくなるなんて

＜北村さんの感想＞

嘲笑とは最も遠い心の持ち方をした時，人がどれほど人に近づけるかを示すような詩に，出会うことが出来ました.

筆者はこれを読んだときに，学術論文にもこのようなことが生じることに価値が置かれてもよいのではないかと感じた．読み手の北村さんは間違いなく感動している．こころとからだが，つまり身体的に動いている．この詩に対して，たとえばピアジェの発達で考えると，知覚，認知能力の未分化な機能が・・・と説明できるだろう．あるいは，幼少期の脳の発達から言うと・・・などと，さまざまな理論で説明できるだろう．しかし，このような説明は，現象のメカニズムの理解には繋がっても，自身の身体が躍動するまでになるのだろうかと疑問を抱く．事例研究を味わう醍醐味とは，先の詩に触れることで，個々人に何らかの動きが生じることと同種のものと考える．事例に目を通し，何を感じるか，何を想像するか，どのような心的エネルギーが動き出すのかといった人の生に力動を生じさせるのが事例研究の魅力の一つと考えるのである.

学術論文が現場には役に立たないという批判が多少なりともある．当然ながら，科学的手続きに基づいた学術論文は貴重である．しかし，それだけではないとも思う．学術論文は，我々のような専門家だけのものではない．実際に現場で指導にあたる人達が読むこともある．スポーツ活動上での苦悩からの脱出のきっかけとなることもある.

科学的な理論の説明も大切だとは思う．それと同じように，ひとつの事例を通して，読み手のこころが動き，つまりこれまでの体験，経験が動き，そして，その次の行動に影響を与えるような論文も，科学論文と同じように価値が認められてもいいのではないかと考える[13]．そのような論文を書くことは簡単ではない．しかし，挑戦しなければならないと筆者自身に言い聞かせている．

7．事例検討から事例研究へ-わからなさを大切にする-

質の高い事例検討の場は少しずつ増えてきているようだ．たとえば，国立スポーツ科学センターで毎月行われている事例検討会は，年々その会自体が成熟しているように感じる．さまざまなバックボーンの持った研究者や実践者が集まり，多角的な視点でもって，ひとつの事例について考えることのできる場である．そのような場を，全国各地で育くみ，土壌を豊かにしてもらいたい．事例検討とは，実践と研究に対する個人内の往還的思考プロセスの触媒とも言えよう．そのプロセスを経て活字化された事例研究が発表されるのがスポーツ心理学会の目標のひとつでもあると思う．

最後に，山本会長の言及された「わからなさを大切にする」について一言添える．これは研究だけでなく，実践においても同じである．簡単にわかるものは，そもそも学問の対象とならない．ましてや専門的な資格を持つ者が実践を行うまでもない．我々のような研究者あるいは専門性を有した実践者が，人間の営みの複雑さ，わからなさを持ち続けることが必要かと思う．研究者であれ，実践者であれ，わらかなさに対峙する苦悩に身を置き，その苦悩を大切にしながら，その先に辿り着くであろう研究者の深奥から浮上する新たな知見を積み重ねることのできる，あるいはそのプロセスを重んじる学会になればと願っている[註6]．

Ⅲ．おわりに

本稿は，ひとりの大学教員の取り組みを活字にして遺すことを目的とした．読者の中には，なぜ紀要なのかと疑問を抱く者がいるかもしれない．いくつか理由を挙げておく．体育学部に所属する多くの教員は，研究活動のみに従事しているのでなく，運動部活動の指導・管理運営や地域でのスポーツ指導実践，あるいはスポーツを通じた社会問題解決への取り組みなどにも専心している．そこでの体験は，言葉には表すことの難しいなんらかの感動をそれぞれにもたらしているだろう．それを研究という形にするときに，その表現化が困難な作業であるにも関わらず，それを掲載する学術雑誌もさほど多くはない．その受け皿として，本紀要の役割を提示したかったことが理由の一つである．また，複合領域である体育学あるいはスポーツ科学においては，所属成員間にある種の団結力が備わっているかのように映ることがある．しかしながら，それぞれの専門性を真に理解する機会は意外と少ないように思う．紀要に遺る中で，わずかでも同士の営みが誰かに繋がるのならば，それも大学の紀要の価値と考えてもよいと筆者は考えている[註7]．

註

註 1）日本スポーツ心理学会のウェブサイト（http://www.jssp.jp）を参照されたい．

註 2）心理サポートを求めてやってくる人を総称的にクライエントと呼ぶ．本稿では，その対象は文脈によって選手，アスリート，競技者と記載しているが意味ある違いはない．

註 3）学術的論稿に私的なことを記述することの是非について筆者は私見を述べることしかできない．少なくとも心理臨床実践では，クライエントの生育歴を丹念に聞く．それにより，目の前にするクライエントの苦しみの意味を深く了解できるからである．指導実践する指導者の指導哲学が重要であることは言うまでもないが，そこには指導者の生育歴，競技歴，指導歴，すなわち生き方が強く関わる．個人の歴史があるからこそ，了解できる資料も存在する．本稿もそれと同じと考える．

註 4）筆者がこのように考えるに至ったのは，山本昌輝教授（立命館大学）との対話にある．山本教授は，「宿業体としての人間と業熟という形の超越」について論じているが 5)，その本質は苦しみの中に発見的に見いだす個性とであろう．その点において，競技者に対する心理臨床と根底は同じである．

註 5)　筆者は，老松の身体系個性化[6]を拠り所とし，心と体の総体としての身体をイメージし，アスリートの語る身体を媒介とした心と体の繋がりの在り様と個性化プロセスについて関心を持ち一連の研究を行っている[7) 8) 9)].

註 6) ここで論じた内容は，本文中に引用したもの以外の学術書や論文[14) 15) 16) 17)]も参考としている．

註 7) 筆者がこのように思うのは，本学部体育学科の阿部悟郎教授の影響による．阿部教授は，研究委員会のいくつかの会議の席において，時代の潮流に沿わないが，後に価値あるものと評価される論文があること，そしてその可能性を担保するためにも紀要の存続は重要であることを訴えている．筆者の紀要に対する考えは，間違いなく阿部教授によって変わったことをここに触れておく．

引用文献

1) 日本スポーツ心理学会第 47 回大会実行委員会(2020) 日本スポーツ心理学会第 47 回 2 号通信.

2) 山本裕二 (2020)「スポーツ心理学」と「日本スポーツ心理学会」, 日本スポーツ心理学会第 47 回大会研究発表抄録集, p6.

3) 河合隼雄 (1999) 中空構造日本の深層　中央公論新社.

4) 河合隼雄 (2003) 臨床心理学ノート　金剛出版.

5) 山本昌輝 (2015) パトスの人間学　メディアイランド.

6) 老松克博 (2016) 身体系個性化の深層心理学　遠見書房.

7) 武田大輔 (2020) 東京 2020 大会に臨むアスリートへのスポーツカウンセリング　体育の科学　Vol.70-5.

8) 武田大輔 (2019) トップアスリートに対するカウンセリングアプローチ-臨床スポーツ心理学の立場から-　心身医学 Vol.59.

9) 武田大輔 (2021 刊行予定) 第 11 章　心と身体のつながり-アスリートのパフォーマンスに見る内的課題-　中込四郎編著　スポーツパフォーマンス心理臨床学. 岩崎学術出版社.

10) 武田大輔 (2020) 実践経験から学問に貢献する，そして再び実践へ. 日本スポーツ心理学会第 47 回大会研究発表抄録集, p7.

11) 武田大輔 (2019) SMT 指導士の資質向上に向けて-SMT 指導士としての自己研鑽-. メンタルトレーニングジャーナル, 12, p.14-16.

12) 中込四郎 (2012) 事例の報告をどのように「研究」にしていくか　心理サポートの事例研究　日本スポーツ心理学会第 39 回大会研究発表抄録集, : 13.

13) 武田大輔 (2013) 臨床スポーツ心理学の現状と課題. スポーツ心理学研究, 40 (2) : 211-220.

14) 荒井弘和 (2020) アスリート・コーチに対するメンタルサポート 3.0　体育の科学　Vol.70-1.

15) 中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か　岩波新書.

16) 田中省吾 (2017) 生きられた＜私＞を求めて　北大路書房.

17) Tod, D. and Eubank, M. 編 (2020)　Applied sport, exercise, and performance psychology. Routledge.

［その他］

体育学部紀要の存続価値を巡る私見

武田　大輔*1

The personal opinion on the continuation of publication of the Bulletin of the School of Physical Education.

by

Daisuke Takeda

Abstract

The purpose of this paper is to present my personal opinion by looking back on the five years I was involved in the research committee and my own recent situation as an opportunity to reconsider the new value of the School of the Faculty of Physical Education. I argued that there is value in allowing free submissions that go beyond the scope of general academic papers, in connecting faculty members who belong to the university, and in bequeathing the living testimony of the faculty members themselves.

Ⅰ．はじめに

大学の運営方針の転換に伴い，学部紀要の出版に関する基本的な考え方を再検討することが各学部において求められている.筆者の聞く限りでは，大学としての考えは，それぞれの研究者の研究領域や分野における主要なジャーナルへの積極的な投稿を推奨していることにある．したがって，紀要に関わる予算を含めて，各学部における紀要の位置づけを明確にする必要が生じてくる．この作業は，基本的には単年度で構成される研究委員会による議論を経て，その原案が教授会にて審議されるのが通常であろう．しかし，人的にも時間的にも限りある委員会活動だけの原案でよいのだろうか．委員会の枠を超えて，各教員がそれぞれに紀要の持つ意味を改めて考える時間を持ってもよいのではないか．それは，各教員の日頃の活動を振り返る機会ともなろう．以上のように，大学運営に関わる背景と,個人的な考えとが動機となり，本稿を執筆することとした．体育学部においては学部紀要を発行する意義をどのように考えるのか，つまりその存続価値を議論する契機を提示することが本稿の目的である.

Ⅱ．学部紀要の独自性と可能性

1．研究委員会での紀要出版担当の経験から

筆者は2016年の本学入職時から現在までの約5年間において研究委員会委員を拝命し，主に紀要の出版に関わる業務に関わらせていただいている．そもそも煩雑な作業のある紀要作成であるが，電子化への移行,予算削減による教員の作業増など，その煩雑さと業務負担は年々厳しくなっていると感じる．ネガティブな言及はほどほどにし，これ

＊1　東海大学体育学部生涯スポーツ学科

までに紀要に関わる業務を通じて筆者が感じたことを記載する．

最初に紹介したい印象深いことは，植田恭史教授による一連の玉稿「私の考えるコーチング論」である．2019 年度はⅨとあり，その積み重ねを想像できる．単なるハウツー的な指導書ではなく，指導者としての姿勢や生き方までが伝わってくる内容である[註 1)]．植田教授が素晴らしい指導者であることは，筆者がわざわざ説明しなくとも周知のことである．筆者が東海大学に赴任しすぐに感じたことは，ここには素晴らしい指導者が多くいるということだ．その理由は簡単で，他大学と比べて充実しているとは決していえない施設環境において，多くの運動部が高い競技レベルにあるからだ．そしてそれは本学における指導者や学生アスリートの創意工夫があってのことであろうと想像した．そのため，本学の指導者らの体験知を活字として遺すことには多くの意義や価値があると考える．

ところが，その論述を拝読しているときに，僭越ながら，時折違和感を感じたのである．戸惑いであったのかもしれない．その時はその理由がわからなかった．その後，植田教授の論文だけでなく，ほかにも多くの実践に基づいた資料を論文化する論稿がいくつか投稿され，一部は審査を経て，またある一部は研究委員会による精査を経て出版に到るのだが，残念ながらすべてが掲載されることはなかった．それらひとつひとつの詳細についてはここでは触れないが，筆者が感じたことは，この紀要自体がいわゆる狭義の科学観あるいは学術論文の一般的概念や体裁に縛られているのではないかということである．大胆に言えば，著者の主張を支える客観的な裏付けがなければ学術論文ではないという偏った価値観である．ここでの客観性は，数値に代表されるように可視化され，再現可能なものといった狭義の意味である．たとえば，植田教授の論述の中にも，ご自身の主張を支えるような他者の研究を引用しているのだが，引用元の内容とご自身の主張とがやや離れていると感じることがあった．その引用がなければ，より力強い主張となったはずだと感じるのである．もちろんすべての教員の学術論文に対する考え方を尋ねたわけではないので，あくまでも筆者による想像を基にした指摘である．

ところで筆者自身はというと，現在における科学観に縛られ，自身の心理サポート実践やそれに基づく研究の表現に苦悩している．それは本紀要 50 号において別に提出した．コーチング領域だけでなく，体育やスポーツ，健康運動などを包含する体育学に身を置く者[註 2)]の多くは，それぞれのフィールドで他者との交流を生身でもって体験し，それを自身の経験としているであろう．あるいは他者との交流だけでなく，大地，水，空気といった自然とも生身で関わっている．意識と体の相互的関わりの強い体育人においては，その体験の言語化は容易でないと想像する．無理矢理に研究の俎上に落とし込もうとして安易な操作化を施した実証研究は，しばしばリアリティとの距離を作るだろう．その距離は，研究者と現場（指導者や運動実践者など）との距離とも置き換わる．それでも専門用語で構成された概念遊びは高尚なやり取りに見えるため，専門家でなければ，高度な研究が行われていると認識されるだろう．

話が逸れる前に本旨に戻る．コーチングの妙やコーチングの本質といった体験そのものの言語化は困難ではあるが，そうは言っても，何らか活字にしていくことは大学人の使命である．その活字化に狭義の科学観が邪魔をしているなら，それに依らない表現が許される表現媒体があっても良いのではなかろうか．体育学部紀要によって実現できると考える．繰り返すが，体育学部教員のあらゆる実践の記録は学術的にも貴重である．

2. 原著論文とは

原著論文とは何かを改めて考えることが，最近の個人的出来事の中であった．筆者の考える原著論文とはオリジナリティに富む研究の発想やそれによる知見の提示がなされたものと考えていた．たとえば，「（ある現象に対して）みかんを用いて明らかにした研究は見られるが，りんごで行った研究は見あたらない．だから意義がある．」といった類いは，対象を変えて行っただけであり，真の独自性とは言えないと考えていた．パラダイムシフトが起こるような結果を提示することは夢のよ

うな話だが，少なくとも各研究領域のメジャーとされるジャーナルに原著として採択されることを研究者は目指していると想像する．ただしそれは容易でないとも考える．数年にわたる研究の積み重ねの先に，独自性のある論文，すなわち原著論文があると筆者は考えていたからである[註3)]．ところが，改めて原著論文の定義はと尋ねられても，明確には答えられないと思い直したのである．たとえば，いくつかのジャーナルの投稿規定等を確認してみる．筆者の領域に近いところから，日本体育学研究，日本スポーツ心理学研究，東海大学紀要体育学部を取り上げ，それぞれの定義を引用する[註4)]．

体育学研究：原著論文は，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，新たな科学的な知見をもたらすものであることが必要です．ただし，人文系と自然系の論文構成には違いがありますので，論文の構成や見出しはそれぞれの研究領域に応じて適切なものを用いてください．

スポーツ心理学研究：原著論文は，新しい知見を含む実証的または理論的な論文である．

本学部紀要：原著論文とは，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，未発表の資料に基づき新たな科学的な知見をもたらすもの．

以上のように，定義はされているものの，曖昧なところが多い．本学部紀要の原著に注目すると「科学論文としての内容と体裁」，「科学的知見をもたらす」のように“科学”への重み付けがあるようだ．それでは，科学とは何かを考える必要がある．しかしながら，現状としては本学部教員によってこれらを真剣に議論する時間的余裕はなく，査読を必要とする原著論文については，査読を担当する教員の科学観，原著に対する考え方に頼らざるを得ないのである．

本稿は科学論を述べることが趣旨ではない．本学部紀要を存続させる意義や，本学部における原著論文とはどのようなものが相応しいのかを考える契機を提示することである．予算の削減が大学の決定となり，本学部紀要の発刊についても研究委員会で話題となった．紀要の根幹だけでなく，出版までの詳細などをすべて決定するまでにはいかなかったが，しばらくは学部の人的および財的資源でもってできる範囲で継続することが確認された．学部としての紀要をどのように位置づけるかは今後の課題とした．この時に発せられた阿部悟郎副委員長（体育学科教授）のパーソナルコメントは紀要の存続意義を考える上で重要であると思われた[註5)]．発言の内容はおおよそ次に示すとおりである．「各専門領域における学術雑誌への論文採択には，その時代の潮流にあったものとなってしまうこともある．学術的産物には後生で評価されることもある．そのような論文を大切にする上でも，紀要は存続すべきである」．主要雑誌ではリジェクトされたので紀要に投稿するといった消極的理由でなく，将来的に価値ある論文へと繋がるために，内容の多様性や自由度を認める紀要となることが望まれる．一方で，学術団体で設置されている編集委員会と同じ機能を有する本学部研究委員会であるが，この「体育学部研究委員会の編集のもと，東海大学体育学部によって紀要は発行されるため，学外の識者に評価されることも意識しなければならない．社会的責任がある」．これは同じく研究委員会委員の内山秀一教授（体育学科）によるパーソナルコメントであり，重要な指摘である．いわば自由と規律のようなものであろう．最低限の体裁を持ちながらも，現代における科学論文の範疇を超えた論文が提出されても良いのではないだろうか．その価値は多様に評価されてよい．そのために，これを機に投稿規定についても取り上げ，いずれの原稿の内容もそれぞれに特徴を持つ価値あるものとして整理する議論を待ちたい．ちなみに，筆者は本稿を「その他」の内容（原稿の種類）として提出しているのだが，投稿規定にその原稿内容は記載されていない．投稿の申し込みに用いる投稿原稿添付票には，原稿の種別として，査読を希望しない「その他」があり，審査を希望する領域にも「その他」があるのだ．前任者からの引き継ぎ資料からなので，おそらく2016年以前からこのようになっていたのだと

想像される．細かな規定にこだわらず，あるいは気づかずにいたことで，ここまでにもこの「その他」で書かれた論稿もある．今更規定に沿っていないからとの理由で取り下げるのは，愚の骨頂である．そのままにしておいてよいと思う．今後の議論において，整理されることを待ちたいが，社会的責任と自由度を担保することを考慮されたい．

3．誰のために書くのか

若手研究者なら大学機関への就職のため，現職教員であれば業績評価のため，といった理由もあろう．しかし，それだけでない理由が当然ある．

私的な話を紹介したい．筆者のゼミ生のことである．彼女は卒業論文を提出した後に，後輩のゼミ生に次のようなことを述べた．それは「*卒業論文作成においてたくさんの学術書を読みました．学術書を読むというのは，人との出会いであると感じました．著者の主張を読んで，なぜこの著者はこのように主張するのかを考えるようになりました．それは著者の人柄に触れるようなことでした．だから，学術書を読むということは人との出会いなんだということを学びました．(2019年度卒業　生涯スポーツ学科　黒岩莉咲子)*」である．“体育学部教員は団結力がある”，“仲が良くていいですね”といった言葉を聞くことがある．たしかにそのようなところはあるだろう．しかし，それぞれの教員がどのようなことに関心を持ち，どのような価値観を有しているのかといった専門領域の肩書き名称からは見えない学術的な営みにおける人柄に触れることは，実のところはさほど多くないのではなかろうか．委員会の業務，共に行う授業，あるいは今は積極的にできない飲み会などのコミュニケーションとは異なる水準での関わりといったものがあるだろう．それが学部紀要の役割であっても良いと考える．つまり，同じ職場で働く仲間の人柄に触れる機会としての意味も紀要にはあるのではないか．

他者への方向性を述べたが，同じく自分自身への方向性としてはどうだろうか．すなわち自分のために書く動機を保障する場としての紀要である．筆者がこの50号に私見を記した一番の動機は，自分のためであった．本号の別の論稿において，心理サポート実践と研究との往還における筆者自身の苦悩を記した．そこでは，なかなか言語化にたどり着けないもどかしさを訴えた．そのような心境の中，あるとき小説家村上春樹を題材とした書籍[1]を読んでいた．そこには村上氏の小説を執筆するきっかけが記されていた．「・・・才能や能力があるにせよないにせよ，とにかく自分のために何かを書いてみたいと・・・」．この一節に触れたときに，自分自身がざわつくような感じを覚えたのである．またこの時に，若い頃の心理臨床の訓練でのことを思い出した．それは，病院臨床において，多くの老人がカウンセラーに自身の生涯の物語を聴いてもらうことで，生のエネルギーが満ちてくることであった．自己の生きた証が遺ることの偉大さを思い出したのである．学術論文として相応しいのかどうかも大切だが，それ以上に自分のために書きたい自分がいることに気づいたのだ．ここまでで理解されると思うが，何かに縛られて息苦しくしていたのは筆者自身だったのである．教員としての業務の種類と量が過多となっている今日ではあるが，その中でも特にエネルギーを注ぎ大切にしている生業を，大学人として何らかの形で遺したいと思う教員がいるかもしれない．それぞれがここに生きていることを遺すような紀要であってもよいと願うのはお門違いだろうか．尋ねてみたいところである．

Ⅲ．おわりに

2020 年度体育学部紀要は，節目となる 50 号である．単なる節目でなく半世紀という重みある数字であり，しかも本来なら東京オリンピック・パラリンピックが開催されたはずの年でもあった．体育学部として特別な号となったかもしれない．ところが実際には，新型コロナウイルスによるさまざまな生活習慣や働き方に変化が求められ，多くの人々がそれへの適応に相当のエネルギーが使われたと思う．大学人も同じである．そうは言っても，もう少し 50 号発刊へ向けて何か発信できなかったのかと反省する．

冒頭に述べたように，各教員が紀要の位置づけを考えてよいと思う．それは，それぞれに多忙な業務に追われる中，その仕事ひとつひとつのプロ

セスには次世代に遺すべく大切なものが含まれており，それを言語的表現において達成できる媒体が紀要であると考えるからである.そのためには，教員各自によって紀要の位置づけを考えることが必要であろう．また，その思考がそれぞれの仕事をアウトプットする積極的かつ主体的な機会となれば幸いである．広く世の中に評価される論文だけが価値あるものではないと思う．同時代に，同場所で，活動を共にした同志との関わりが，次世代に何らかをもたらすことにも価値を置いてもよいのかと思う．そしてそれは，自分自身を遺すことでもある．以上が，筆者の紀要に対する価値観である．さまざまな考えが出てくることを期待したい.

註

註 1）本稿においては，植田教授のすべての玉稿を引用リストには載せていないが，これまでの体育学部紀要を手にすればその詳細は把握できる.

註 2） ときおり体育人や体育会系の人と括られるが，その意味や是非はここでは問わない.

註 3）この考えは，筆者自身の受けてきた大学院教育環境から感じたものである．しかし思い起こせば，恩師が「各大学の紀要でも優れた論文に出会うこともある」ともおっしゃっていた．筆者はそれをずいぶんと忘れていたのである.

註 4） 現在においては，多くの学術団体がウェブサイトを有しており，誰でも簡単にアクセスできる．サイトには投稿論文に関する規定や手引きが紹介されている．本稿では URL までを記載することはしないが，筆者は本紀要の発行時期の直近に確認した.

註 5） 阿部教授による，あるいは後述する内山教授によるパーソナルコメントは，あくまでも筆者が感じ取った内容である．ここに紹介したのは筆者であり，この意見に対する異論は筆者に対して提示されたい.

引用文献

1）山愛見（2019）村上春樹，方法としての小説．新曜社．pp.21-22.

謝辞

本稿に個人名を記載することを許可してくださった植田教授，内山教授，阿部教授，および卒業生の黒岩莉咲子氏に心より感謝いたします．なお，植田教授に確認をした際には，1 年 1 篇を目標に執筆され，書くことの喜びや世に出ることの誇りを感じられたこと，そしてそれをもたらした体育学部紀要への感謝のお言葉をいただきました．ここに付しておきます.

東海大学紀要（体育学部）投稿規定

1970年４月制定
1990年４月改定
1998年４月改定
2005年７月改定
2017年４月改定

Ⅰ　投稿資格

本紀要への投稿は，原則として「本学体育学部教員」およびその関係者とする。但し研究委員会が認めた場合には，その限りではない。

Ⅱ　原稿の内容

体育学の研究領域における総説，原著論文，実践研究，研究資料およびその他とし，和文，欧文のいずれでもよい。但し完結したものに限る。

１.「総説」とは，特定の研究領域に関する主要な文献の総覧で，単なる羅列ではなく特定の視点に基づく体系的なまとまりを持つもの。

２.「原著論文」とは，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，未発表の資料に基づき新たな科学的な知見をもたらすもの。

３.「実践研究」とは，保健・体育・スポーツを実践する立場からの，授業研究やトレーニング，コーチングおよびスポーツの戦略・実践にかかわる研究や報告などの要素が含まれたもの。

４.「研究資料」とは，調査や実験の結果を主体にした報告であり，体育学の研究上，客観的な資料として価値が認められるもの。

５.「研究報告」とは，他の学術誌等に掲載された研究論文の概略を報告するもの。

６.「実践報告」とは，コーチングやスポーツ等の実践事例の記録を纏めたもの。

Ⅲ　投稿期日

原稿は毎年研究委員会の定める期日までに提出するものとする。

Ⅳ　掲載採否・順序

掲載の採否・順序などは原則として編集委員会が定める査読委員の審査を経た上で，研究委員会において決定する。

尚，「研究報告」「実践報告」は原則として査読を行わないが，採否については研究委員会において決定する。

Ⅴ　投稿一般規定

１．用　紙

和文原稿，欧文原稿ともにＡ４判の用紙を使用する。

２．用語および文体

１）原稿は，原則としてワードプロセッサーで作成するものとし，横書き，１ページ全角40字30行の設定とする。本文はひらがな現代かなづかいとする。外国語は原語での記述を原則とし，かな書きする場合はカタカナとする。数詞は算用数字を使用する。

２）欧文原稿

⑴　原稿は，欧文（原則として英語）とし，不透明なタイプ用紙に通常の字体（ワードプロセッサーの場合は半角）を使い，タイプまたはワードプロセッサー書きにするが，写真図版にある文字についてはこの限りではない。また，図表説明のスペースはシングルとする。

⑵　用紙の上端，下端および左端は約３センチ，右端は約2.5センチの余白を置き，ほぼ27行にわたって書く。ページ番号は，下端余白中央に書く。

⑶　欧文による表題の下に著者名（ローマ字），更に著者名の下に所属する機関名を正式英語名称に従って書く。

３．原稿紙数

投稿は，ワードプロセッサーにより，Ａ４版白無地用紙に作成する。原則として，和文原稿は１編につき図表，抄録等を含めて刷り上がりが10ページ以内とする。欧文原稿も，１編につき図表，抄録等を含めて刷り上がり10ページ以内（刷り上がり１ページは，おおよそ600語）とする。これをこえる場合の費用は著者負担とする。

４．単位および単位記号

国際単位系，メートル法を基準とする。

５．項目分け

大項目より小項目への順序は，原則としてつぎのごとくとする。

Ⅰ，Ⅱ，…１，２，…１），２），…（1），（2），…ａ），ｂ），…⒜，⒝，…

６．図表および写真

図表は，必ず別紙に記載し，原稿中にその挿入箇所を記入する。図表は一括し文巻末に添付する。原稿は白紙または淡青色方眼紙に黒で書くことを原則とし（ワープロ・パソコン作成図表も可），図表中の文字や数字ははっきりと書く。写真は原則として白黒の鮮明な画面のものとする。なお表題は表の場合は上方，図の場合は下方に記入する。

７．引用，注記，および参考文献

引用，注記，および参考文献は，原則として本文中の該当する箇所の右肩に小数字で１），２）のように初出順に番号を付け，原稿末尾にその番号順に，以下の例にならって一括掲載する。

例１）論文＝著者名（発行年）論文名，誌名，巻（号），引用ページ（p. または pp.）の順に記入する。

小野寺孝一・宮下充正（1997）全身持久性運動における主観的強度と客観的強度の対応性，体育学研究．21，pp. 191-193.

例２）単行本：著者名（発行年）書名（版数ただし初版は省略），発行所，引用ページ（p. または pp.）の順に記入する。

マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学．大修館書店，pp. 118-119.

８．抄　録

１）和文原稿の場合，「２．用語および文体の２）欧文原稿⑴―⑶」の規定に準じて，欧文（原則として英語）にて表題，著者名，所属を明記し，研究の目的，方法および結果が簡明に理解できるような300語程度の抄録を添える。なお，同時に欧文抄録の和訳文を添付する。

２）欧文原稿の場合，和文にて表題，著者名，所属を明記し，研究の目的，方法および結果が簡明に理解できるような600字程度の抄録を添える。

９．原稿提出の際の提出物

１）原稿添付票（投稿整理票）

２）原稿２部（正と副）

３）抄録２部（和文原稿の場合は欧文抄録の正と副，欧文原稿の場合は和文抄録の正と副）

４）和文原稿の場合は，欧文抄録の和訳文２部（正と副）

５）正・副原稿の電子ファイル各２種（Word 形式と PDF 形式）

尚，副の原稿は著者名，所属を伏せて提出する。

10. 校　正

原則として校正は著者に依頼する。校正は研究委員会で定めた期日までに必ず返却する。

11. 別刷り

掲載論文の別刷りを希望するときは，その必要部数をあらかじめ研究委員会に申し込むこと。なお，50部をこえる別刷りの費用は著者負担とする。

12. 人を対象とする研究に関する倫理審査について

研究計画で，身体的介入がある場合や，国の方針の適用範囲にある場合など「人を対象とする研究」を行う時は，必ず倫理委員会の審査を受けなければならない。なお，審査結果については，論文中に明記することとする。

13. 東海大学機関リポジトリへの登録について

掲載論文は「東海大学機関リポジトリ規程」に従い当該リポジトリに登録され，インターネット上で公開される。

以上

編集後記

2020年度「東海大学紀要（体育学部）」第50号をお届けいたします。

今年度の紀要は記念すべき50号で、特別寄稿が２編、原著論文１編、実践研究２編、研究資料２編、実践報告２編、その他３編の計12編が掲載されております。

今年2020年度は、新型コロナウイルス（COVID-19）に始まり、新型コロナウイルスに終わった１年でした。４月の緊急事態宣言から大学全面入構禁止で、緊急事態宣言解除後も、原則遠隔授業、そのまま、夏の第２波到来。秋学期になってようやく条件付きで入構できるようになり、遠隔と対面授業の併用でなんとか授業成立と思ったら、そのまま11月末から第３波到来。年末年始後に２度目の緊急事態宣言発出となり、現在に至っています。このような状況の中で、何とか例年通りに発行を迎えることが出来、ひとまずほっとしています。論文執筆者、査読者、紀要編集にご尽力いただいた出版社、並びに関係の皆様に、心より御礼申し上げます。

近年、大学の研究、教育環境は著しく変化しています。それに伴い、紀要の位置づけが全学的に検討されており、今後、紀要の存続を含めて抜本的に改革する必要があると考えます。一昨年度から、この「東海大学紀要（体育学部）」には電子投稿形式を採用しましたが、本年度は発行のための予算も大学予算から学部予算へと変わりました。そのため、今回の編集作業は可能な限り、紀要編集委員（体育学部研究委員会）メンバーで実施し、例年以上の打ち合わせ、作業を重ね、なんとか発刊に漕ぎ付けることができました。今後、体育学部の研究の益々の発展のために紀要を存続させるのであれば、原稿の種類や査読の仕組み（レベルも含め）、編集のあり方、投稿規定、予算等について検討・改革していく必要があるでしょう。また、体育学部においては、論文としては測れない研究や活動があります。これらについても、きちんと報告・記録して活用し、未来に伝達するアーカイブ機能を高めていきたいと考えます。プランの詳細はまだ明確ではありませんが、大学全体の方針に従いながら、学部の研究活動の推進、研究成果の発信に、引き続き努めて参ります。今後ともご協力のほど、よろしくお願いします。

東海大学体育学部研究委員会
委員長　山田　洋
副委員長　阿部　悟郎
編集担当　内山　秀一
押見　大地
武田　大輔
八百　則和
吉村　哲夫

東海大学紀要　体育学部
電子版

2020—No. 50

2021年3月31日　発行

発行者　東 海 大 学 体 育 学 部
神奈川県平塚市北金目四丁目1番1号　〒259-1292
School of Physical Education, Tokai University
4-1-1 Kitakaname, Hiratsuka-Shi, Kanagawa-Ken, Japan

発行所　東 海 大 学 体 育 学 部
神奈川県平塚市北金目四丁目1番1号　〒259-1292
電話0463(58)1211

港北出版印刷